

機械だと考へてゐたものだ。彼は私の方を向いて、帽子に手を擧げながら、出鱈目なロシア語で言った。

『申上げますがねえ。わし達が水の上を涉らなければならぬなんて、製造技師は夢にも考へなかつたんですよ。』

その瞬間の困難も忘れて、私は、彼の皮肉のいかにも敵中してゐるので、彼を抱きたいやうに感じた。

その列車は一つの軍事行政上及び政治上の施設であつたばかりでなく、同時に戦闘施設であつた。その體裁は多くの點で、車輪のついた參謀本部といふよりも、むしろ装甲列車に似てゐた。事實、それは武装されてゐた、若くは尠くともその機關車及び機關砲車はさうであつた。乗組員は全部武器を取扱ふことが出来た。彼等はみんな皮の正服をつけてゐたので、いつも外貌は重々しく堂々としてゐた。左腕の肩のすぐ下に、みんなは大きな金屬性のバッヂをつけてゐたが、これは造幣局で念入りに鑄造されたもので、軍隊のうちで非常に人氣を呼んでゐた。車輛と車輛の間は電話と、合圖の組織で結びつけられてゐた。旅行中人々を警戒の状態におくために、晝も夜も、頻々と警報があつた。武装綺隊は、よく『陸戦隊』として列車を離れて行つたものだ。危険な場所へ、皮のコートを着けた部隊が現れると、それがいつも定つて壓倒的な効果をもつた。戦闘線の背後、まさに數キロメートルのところ

ところにその列車がゐると知つてゐた場合、最も神經質な軍隊ですら、特にその指揮士官たちは彼等の全勢力をあつめるのが常であつた。秤皿の均衡がとれてゐない時には、ほんのちよつとした重量が、それを決するに足りるものだ。二箇年の旅行の間、大多數の場合、その重量の役目を演じたものは、その列車とその部隊であつた。歸還した『陸戦隊』を列車に迎へた時、我々はいつても何人かゞ失はれてゐるのを發見するのが常であつた。戦場で軍隊の方へ参加して行つたもの及び我々の視野から姿を消したものを數へないで、全部で我々の列車は、戦死や負傷で約十五人の人間を失つた。たとへば、レーニンと名づけられた典型的な装甲列車のために、我々の列車の乗組員から一小隊が編成された。他の乗組員は、ペトログラードを前にした戦場で、軍隊に結びついた。ユデニツチ攻撃の戦争に参加したところから、その列車は全體として、『赤色旗』の勳章で飾られた。

時として、その列車は切斷され、彈丸を浴せられ、又は空中から爆彈を投下された。それが虚實さまざまな勝利の話で織りなされた傳説で取圍まれたのは、不思議ではない。時々、一師團の、一旅團の、又は一聯隊すらもの指揮官が私に、もう三十分餘分に彼の本營に止まつてゐて欲しいといつた。それはたゞぶら／＼と時間を費すためか、又は彼と一緒に自動車か馬上で、少し離れた戦線部へ乗り込むためか、列車から數人の人々を給與物や贈物をもたせてそこへ派遣し、列車到着のニュースを遠く廣く傳播させようがためであつたのだ。『これは豫備の一師團ほど役に立つでせう。』と指揮官は

よくさう云つたものだ。列車到着のニュースは、同様に敵の戦線へも達するのが常であつた。その人達は、この不可思議な列車を實際にさうだつたよりも、無限に恐る可きものゝやうに想像した。だがそれはたゞ精神上に及ぼすその感化を増加するに役立つたのだ。

その列車は敵の憎悪を買ひ、それを誇りとしてゐた。一度ならず、社會革命黨員はそれを破壊しようとして企てた。社會革命黨員の審問のときに、セミヨノフによつて詳細にその話が述べられた。彼は、ヴオロダルスキーの暗殺と、レーニンの生命を奪ふ計畫とを組織し、またその列車を破壊する準備行動にも参加したのだ。事實、さういふ企ては大して困難なことではなかつた。たゞ、その時社會革命黨が、政治的に弱くなつてゐて、自信を失つてゐたことゝ、もはや若い世^{ゼネレーション}代に大した感化力を持つてゐなかつたことを除いては、さうであつたのだ。

南部の我々の旅行の或る時に、ゴルキー驛で、その列車が破損された。眞夜中に、私は不意に寢床からはね飛ばされ、脚下で大地が這つて、どこにもしつかりした支柱のない地震の時に抱くあのぞつとするやうな感情で、捉へられた。まだ半睡で、私は寢臺のわきにしがみついた。耳慣れた轢音がびたりと止み、その瞬間に車體が急轉し、ぢつと動かなくなつてしまつた。夜の沈黙のなかで、耳に入るものとは、か細い、悲しげな人聲だけであつた。車の重い扉は傾いてあけることさへ出来ず、私は逃れ出ることが出来なかつた。人影といふものがなく、それが私を氣遣はせた。それは敵であつた

か？ 手に拳銃をにぎつて、私は窓から飛出し、カンテラをさげた人の方へ走つて行つた。彼は列車の指揮官で、私に近づかうとして近づくと出来なかつたのだ。

車輛は傾斜地にあつて、三つの車輪は土堤へふかくめいり込み、他の三つの車輪は軌道から高くあがつてゐた。車の前部と後部とは歪ち曲つてゐた。前方の金網が一人の哨兵を封じ込んでしまつてゐた。私が闇の中で聞いたのは、子供の泣聲のやうな、彼の悲しい、小さな聲だつたのだ。いかにもしつかりと彼をくるんでゐる金網から、彼を救ひ出すのは容易な業ではなかつた。みんなが驚いたことには、彼は、打撲傷をうけ、恐怖を抱いたゞけで、何事もなく助け出されたことだ。全部で、八輛の車が破壊された。その列車の俱樂部に使はれてゐた饗宴車は、磨いた木片の塊りであつた。數名の人達は、勤務の順番の來るのを待つ間、そこで讀書したり、將棋をやつたりしてゐたが、樁事の起る十分前の眞夜中に、みんなその俱樂部を去つてしまつた。書物や、軍需品や、戦線への贈物をつんだトラックは、同じくすつかりひどく破損してしまつてゐた。重傷を帯びたものは一人もなかつた。この樁事は轉轍をあやまつたゞめに起つたものか、怠慢のためか、それとも果敢な動作のためか、我々はずひに見究めることが出来なかつた。我々にとつて幸にも、列車はその時僅か三十キロメートルの速力で、一つの驛を通過しつゝあつたのだ。

その列車の乗組員達は、彼等の特別の任務の外に、多くの他の仕事を遂行した。飢饉の時、悪疫の

猖獗の間、さては宣傳運動に、また國際大會に、彼等は援助した。その列車は、田園地方で、及び多くの子供の家で、榮譽の第一位だった。列車内のコンミニュニストは自身の新聞『警衛』^{オン・ガード}を發行してゐた。冒険や戦闘の多くの出來事が、その新聞に誌されてあつたが、不幸にも、これも他の多くの記録と同じに、私の現在の旅行用の書類のうちにはない。

クリミヤで塹壕を築いてゐたウランゲルに向つて、攻撃の準備をするために旅立つてゐた時、一九二〇年十月二十七日の列車新聞の『途上』に私は書いた。

『我々の列車は再び戦線に向つてゐる。』

『我々の列車戦闘員は、一九一八年の重大な數週間、即ち我々がヴォルガの支配權をにぎるために戦つてゐた間、カザンの城壁のまへにあつた。その戦闘はずつと前に終つた。今日ソヴィエツト權力は太平洋に近づいてゐる。』

『我々の列車の戦闘員は、ペトログラードの城壁の前で、耀しく戦つた。ペトログラードは救はれ、それ以來、世界プロレタリアートの多くの代表者達の訪問をうけてゐる。』

『我々の列車は、一度ならず西部戦線を訪問した。今日、ポーランドとの間に假媾和條約が署名されてゐる。』

『我々の列車の戦闘員は、クラスノウ及び後にデニキンが、南方からソヴィエツト・ロシアに向つて

進撃した時、ドンの草土帯の上に在つた。クラスノウとデニキンの日はもう遠い過去だ。』

『いまは、フランス政府が自己の要塞としてゐるクリミヤが残つてゐるだけだ。このフランスの要塞の白軍守備隊は、備はれたドイツ・フランス人將軍のウランゲル男爵の指揮の下にある。』

『我々の列車の仲のよい家族は、いま新たな戦闘に發足しつゝあるのだ。このキャンペーンをして最後のものたらしめよ。』

そのクリミヤ戦争は實際に、内亂の最後のキャンペーンであつた。數箇月後、その列車は解散された。この頁のうちから私は、私の以前の武器をとつた同志達みんなに向つて、同胞としての挨拶を送る。

第十章 ペトログラードの防衛

ソヴェエト共和國の革命戦線には、十六箇の軍團が戦つてゐた。フランス大革命はほどそれと同数の——十四箇——軍團をもつてゐた。而してその十六箇のソヴェエト軍團は何れも、それ自身で短いがしかし眩目的な歴史をもつてゐた。どれか一つの軍團の番號を言つたゞけでも、立派な物語の數々を呼び起すに足りるのだ。軍團の一つ一つは、自身の、常に變化して止まないとは言へ、明確な生理學を持つてゐた。

第七軍團はペトログラードへ西部から接近する作業にしたがつた。停滞状態が長引いたので、その道徳性は損じた。その警戒心は弛緩し、その最良の働き手、諸枝隊の全部すらが、その軍隊から取り去られて、戦線のうちの一層活動的な部分へ送られた。不斷に熱心さの充實を必要とする革命の軍隊にとつては、足踏みするといふことは殆ど定つて不幸に終り、またしばしば災厄に終るものだ。第七軍團もその例外ではなかつた。

一九一九年六月、フィンランド灣の、『クラスナヤ・ゴルカ』（赤い丘）と呼ばれる重要な要塞が、白軍の一技隊によつて占領された。數日後それは赤色海軍力によつて奪取された。その時、第七軍團の參謀長ルンドクヴァイスト大佐が白軍にあらゆる種類の通報を送つてゐたことが、發見された。その他にまだ彼と密着して仕事をしてゐた隱謀者があつた。この事はその軍團を骨の髄まで震撼させた。

七月に、ユデニツチ將軍は白軍の北西軍の總司令官とされ、コルチャツクによつて彼の代表と認められた。八月、イギリスとエストニアの援助の下に、ロシアの『北西政府』が樹立された。フィンランド灣にあるイギリス海軍は、ユデニツチに支持を約した。ユデニツチが攻撃を開始する時期は、我が他の戦線において致死的に壓迫された瞬間といふことに定められた。デニキンはさきにオレルを占領し、軍需品製造の中心地チュラを脅かしてゐた。そこからモスコウまでは、ほんの短い距離でしかなかつた。南部は我々の全注意を要求した。丁度その時、西方からの最初の強烈な打撃で、第七軍團はすつかり均衡を失つてしまひ、武器や糧食をその場に遺棄して、殆ど反抗の様子さへ見せず、算を亂して退却し始めた。ペトログラードの諸指導者、わけてもジノヴィエフは、敵の用意の優れてゐること——自動小銃、タンク、飛行機、その内部のイギリス補導者及びさういつたもの——について、レーニンに語りつゞけてゐた。レーニンは、我々は他の諸戦線、なにかんづく南部戦線を空にし、力を弱めることを犠牲として初めて、最新の技術的達成で武装されたユデニツチの士官軍と戦ふことが出来る、と結論した。しかしこれは出来ない相談であつた。そこで彼の見解では、たゞ一つやることがある、それはペトログラードを抛棄し、戦線を短縮する事だといふのだ。さういふ切斷が肝要だ

と決心した後で、レーニンは他の指導者達を説得しようと努め始めた。モスコウに到着した時、私は断乎としてこの計畫に反対した。その場合、ユデニツチと彼の主人達はペトログラードだけで満足はしないであらう。彼等はモスコウでデニキンと會はうと欲してゐるのだ。ペトログラードで、ユデニツチは巨量の工業資源と人力を見出すであらう。更に進んでペトログラードからモスコウへの彼の進路には、何等重要な障碍はないであらう。そこで私は、どんな犠牲を拂つてもペトログラードを救はなければならぬと決心し、第一にペトログラードの市民の間に支持を見出した。當時政治局の一員だつたクレステンスキーが、私に味方した。スターリンもたしか私の主張を支持した、と信ずる。その二十四時間の間、幾度となく私はレーニンを攻撃し、つひに彼は『よろしい、やらう！』と言つた。

十月十五日に、ポルトビュローは戦線の形勢に關する私の決議案を採用した。『我々は、差迫つた軍事上の危険の存在することを認め、實際上ソヴェット・ロシアを一箇の兵營に轉化する手段をとらなければならぬ。黨及び労働組合の援助を得て、それらの人々を軍務に使用する目的を以て、黨、ソヴェット諸施設及び労働組合の各成員の姓名を登録しなければならない。』これに實行方法の箇條書きが附された。ペトログラードについては、その決議は『撤退すべからず』と言つた。同じ日に私は國防會議へ布告の草案を提出し、その中で『血の最後の一滴を搾つてもペトログラードを防衛すること、一フートも譲るのを拒むこと、戦闘を市の街路へ引入れて來ること』と述べた。たとひ

二萬五千の戦闘員をもつた白軍が、百萬の住民をもつた都市へ、どうかして無理に進軍することが出來たとしても、街路で、眞摯な、立派に組織された抵抗に會つたならば、その軍隊は壊滅をまぬかれないであらう——私はこれを全然疑はなかつた。同時に、エストニア及びフィンランドが干與して來る可能のあることに着目して、私は、軍隊及び労働者を南西の方へ撤退させる計畫を樹てる必要があると考へた。といふのはペトログラード・プロレタリアートの精華の大袈裟に死滅するのを救ふには、これが唯一の道だつたからだ。

十六日に私はペトログラードへ向けて出發した。翌日レーニンは私に書き送つて來た。

『一九一九年十月十七日。同志トロッキイ、昨夜、國防會議の決議を……暗號で送達した。御覽の通り、君の計畫が承認された。ところでペトログラード労働者の南部への撤退は、もちろん、拒否されはしなかつたが（君はその意見をクラツシン及びリューコフに開陳したと聞いた。）しかし撤退の必要の生ずる前にそれを討議することは、最後まで戦ふといふ心構へから注意を他へ外らすであらう。ペトログラードを包圍し、退路を断つといふ計畫は、言ふまでもなく、君が現場で遂行するところによつて、相應の變更が生ずるであらう。……國防會議の提案によつて私の書いた宣言を同封する。急いで書いたので、甘く出來なかつた。君自身の原文の下へ私の名を入れた方がよかつた。敬白。』

私の見るところでは、この書簡は、さういふ性質の仕事に不可避的な、レーニンと私との間の最も激しい意見の相違が、實踐上でいかに克服されたか、そして我々の個人的關係又は我々の共同作業の上にかに何等の痕跡も残さなかつたかを、決定的に示してゐると思ふ。さう云へば、一九一九年十月にペトログラード開城の觀念を防衛したものが、私に反對のレーニンである代りに、レーニンに反對の私であつたらば、今日あらゆる國語で『トロツキイズム』の破壊的な顯現を暴露した文獻が、どつさり行はれてゐたことであらう。

一九一八年中は、聯合國は、カイゼルにたいする勝利の役に立つと思つて、我々に内亂を強制してゐた。だが、今は一九一九年であつた。ドイツはずつとまへに敗北してしまつた。しかし聯合國は依然として、革命の國土に死と、飢饉と、悪疫を蔓延させるために、數億の金を費消しつゞけた。ユデニツチはイギリス及びフランスから支給をうけてゐる傭兵隊長の一人であつた。彼の背部はエストニアによつて、つつかへ棒をされ、左の横腹はフィンランドで覆はれてゐた。聯合國は、革命によつて解放されたこれら兩國に、革命の屠殺に援助せんことを、要求した。レーヴェルで行はれたやうに、ヘルシングフォースで際限なく協議が行はれ、秤皿はぐらぐらした。我々はペトログラードの頭部で

敵意のある鉄を形ちづくつてゐるこの二つの小さな國に、警戒の眼を見張つた。

九月一日に私は、警告のつもりで『ブラウダ』紙に書いた。『いま我々がペトログラードの戦線へ招致しつゝある師團のうちで、バシキール騎兵隊の役目は重要なものであらう。而してもしブルジョア・フィンランドがペトログラードを攻撃しようと企てる場合には、赤色バシキール族は戦争の雄叫びをもつて進軍するであらう、「ヘルシングフォースへ！」』

バシキール騎兵師團はちよつと以前に組織されたばかりであつた。當初から私は、數箇月の間その軍隊をペトログラードに移送し、それによつて、この草土帯からやつて來た人々に都會の文化的環境でしばらく生活し、労働者と親しく接觸し、クラブ、集會及び劇場を訪ねる機會をもたせてやらうと計畫してゐた。ところで今之に、一つの新たな、それよりもつと差迫つた考慮が、附け加へられた。

——バシキール侵攻の亡靈でもつて、フィンランドのブルジョアジーを恐愕させようとの考慮だ。

しかし我々の警告は、ユデニツチの快速な成功ほどの重味をもたなかつた。彼は十月十三日にルガを占領し、十六日にクラスノエ・セロ及びガチナを占領し、ペトログラードとモスコウを連絡する鐵道線路を切斷し得るに到るやうな方向に向つて、ペトログラードの攻撃を導いてゐた。攻撃を開始して第十日目に、ユデニツチはツアルスコエ・セロまで進軍した。彼の騎馬の斥候隊は、丘の上からセント・アイザック寺院の鍍金した圓頂閣を見ることが出來たのだ。

フィンランドのラジオは、先廻りして、ユデニツチ軍はペトログラードを占領した、と報じた。ヘルシングフォースに在る聯合國の大使達は、これを公式に各自の政府に報告した。ヨーロッパ及び爾餘の世界の全部を通じて、赤色ペトログラードは陥落したとの報道がひろがった。スエーデンの一新聞紙は『ペトログラードが熱病となつた世界的な一週間』について書いた。フィンランドの支配階級は特に興奮してゐた。政府ならびに軍事當局は、干渉を主張してゐた。何人も獲物を取り逃がしたくはなかつたのだ。豫期通りに、フィンランドの社會民主々義黨は『中立』を守ることを約束した。一人の白軍歴史家は書いてゐる。『干渉の問題はいまや財政の方面の討議があつたに過ぎない。』残つてゐるのは五千萬法——これは聯合國の市場での、ペトログラードの血の價格だつたのだ——の支出を批准することだけだつた。

エストニアの問題はそれほど差迫つてはゐなかつた。私は十月十七日にレーニンに書いた。『希望通りにペトログラードを救へば、我々はユデニツチの息の根をとめる地位につくだらう。その場合、困難は、彼のエストニアへ避難する権利であらう。エストニアは彼に向つて國境を閉鎖しなければならぬ。もし彼が同國へ入つた場合には、我々はユデニツチを追跡して、エストニアに侵攻する権利を保留しなければならぬ。』この提案は、わが軍がユデニツチを驅逐し始めた後に承認されたが、その追撃を開始するには、若干の時間がかゝつた。

ペトログラードで、私は、指導者達が徹底的に頹廢の状態にあることを發見した。凡てのものが失はれつゝあつた。軍隊はごろ／＼し、碎け散つてばら／＼なものになつてゐた。司令の地位にある士官はコミュニニストを眺め、コミュニニストはジノヴィエフを眺め、そしてジノヴィエフは徹頭徹尾混亂の當の中心であつた。『ジノヴィエフは恐慌そのものだ。』とスヴェルドロフが私に言つた。スヴェルドロフは人間をよく知つてゐた。こちらの有利な時期、即ちレーニンの言葉をかりれば『何も恐しいものがないとき』には、ジノヴィエフは安々と第七天國によじ登つた。だが事態が悪くなると彼は定つて安樂椅子に寝そべつて——文字通りに、決して比喻ぢやない——溜息をついた。一九一七年以來、私は、ジノヴィエフには中間の氣分といふものがなく、第七天國か、それとも安樂椅子か、そのどつちかだといふことを確信する機會を澤山に持つたのだ。このときには、私は安樂椅子に横たはつてゐる彼を見出した。だがまだ彼の周圍には勇敢な人々——たとへばラシエヴィツチの如き——があつたが、彼等の手すら空しく、ぐにや／＼になつてゐた。凡ての人々がそれを感じ、それがいたる所に影響してゐた。私はスモルニーから電話して、軍隊ギヤレーヂから自動車を一臺よこすやうにと命じた。その自動車は時間通りに來なかつた。私はギヤレーヂ勤務の男の聲のうちに、不感動と、絶望と、運命にたいする降伏心が、行政部の下級者にすら感染してゐることを感得した。そこで特別な手段が必要であつた、敵は正に門に迫つてゐたのだ。さういふ瀬戸際にいつもするやうに、私は

私の列車隊の方を向いた——この人達はどんな境遇の下でも信頼出来る人々であつた。彼等は喰ひ止め、壓力を加へ、連絡をつけ、不適當な者を除いて、破れ目を充した。私は、完全に頽廢してゐた公式の機關から、階層を二三段下りて、黨、工場、職場及び兵營に下つた。

誰も彼も市は早速白軍に降伏するものと豫期してゐた。そこで人々は餘りに目立つたものになるのを惧れてゐた。しかし大衆が、ペトログラードは開渡されるのでなく、必要な場合には、内部から、即ち街路や廣場で防衛されるのだと感じ始めるや否や、精神は即座に變化した。勇氣があり、犠牲的な精神のあるものは頭をもたげた。男子及び女子の諸隊は、肩に掘鑿道具を擔いで、工場や職場から集まつた。當時ペトログラードの労働者は、一見ひどい状態であつた。顔は榮養不良で青ざめ、着物はボロ／＼で、靴——往々片方しか穿いてゐないものもあつた——は、穴で口が開いてゐた。

『我々はペトログラードを棄てない、同志たち！』

『さうだ』婦人達の眼は、特別な情熱で燃えてゐた。母達、妻達、娘達は、彼等のうす暗い、が温い巢を抛棄することを心から嫌つてゐた。『いや、わたし達はペトログラードを棄てない。』——さう答へて女達の甲高い聲は叫び、小銃のやうに彼女等の鋤を搦んだ。彼女等のうちで實際に小銃で武装し、機關砲の勤務についたものも僅かではなかつた。全市がいくつもの部分に分たれ、各々労働者の執行部によつて統率された。一層重要な地點は鐵條網でかこまれた。數箇所の位置が、あらかじめ射撃區

域をしるして、砲兵隊のために選ばれた。約六十門の大砲が、諸々の廣場や重要な十字街に覆ひをして配置された。運河、遊園、城壁、圍牆及び家々は防衛物を施された。郊外やネヴァ河に沿つて、塹壕が掘られた。かくて市の南部全體は一つの要塞に轉化した。多くの街路や廣場には、バリケードが築き上げられた。一つの新しい精神が、労働者區域から發して、兵營に、後方の軍隊に、及び戦線の軍隊にすらも及んだ。

ユデニツチは、ペトログラードからわづか十露里乃至十五露里の地點、二年前即ち權力を掌握したばかりの革命が、ケレンスキー及びクラスノウの軍隊を向ふに廻して、その生存のために闘つた時、私がゐたと同じそのブルコヴォの高丘にゐた。再びペトログラードの運命は、一絲で繋がれてゐた。我々は、即座に、どんな犠牲を拂つても、退却の墮性を破壊しなければならなかつた。

十月十八日私は命令を發し、『本當の眞實がひどく恐る可きものであつた場合、困難な戦闘について、虚偽の報道を送つてはならない。虚言は隠謀として處罰されるであらう。軍事作業の過誤はこれを認める、だが、虚言と、欺瞞と、自己欺瞞とはこれを許さない。』いつものやうに、切迫した瞬間に、私は、軍隊及び國民のまへに冷酷な眞實をむき出しにする必要があると考へた。そこで私は、無意味な退却が起ると、その日の中に公表した。『一小銃隊は、敵が側面をおびやかしたので、狼狽した。聯隊司令官は退却の命令を下した。その聯隊は八露里乃至十露里間駈足をつゞけ、アレキサンド

ロヅカに到着した。事情を調べて見ると、側面の軍隊は味方の軍隊の一つに属するものであることが分つた。……しかしそのうろたへた聯隊は、要するに、そんなに悪くはなかつた。その聯隊は、自信を取り直すと、直ちに取つて返し、早足や駈足で、寒さにも拘らず汗を搾つて、一時間八露里をのして、少數だつた敵を追ひ散らし、ほんの少しばかりの損害で、舊陣地を回復した。』

全戦争を通じてたゞの一度、この短い挿話のあひだに、私は一聯隊司令官の役目を演じなければならなかつた。その退却線がアレキサンドロヅカの師團本部にやつて来た時、私は最初に手にすることの出来た馬に跨つて、その退却線を押し返した。最初の數分間は、混乱以外の何ものもなかつた。彼等はみんな何が起つてゐるか分らず、その中の或者は退却を繼續した。しかし私は馬上で兵士を次々に追ひ立て、彼等を全部廻轉させた。その時始めて、私は、モスコウ出の百姓で、彼自身もと兵卒であつた私の忠實なコズロフが、私のすぐ後にくつゝいて驅けてゐるのを知つた。彼は、拳銃を打ち振りながら、荒々しくその線にそつて走り廻り、私の訴へを繰返し、それに値する凡てのものに向つてわめき立てた。『奮へ、子供達、同志トロツキイが汝等を指揮してゐるぞ。』人々はいま、すぐ前に彼等が退却してゐた地點へ進みつゝあつた。後にとどまつてゐるものは一人もなかつた。二露里後方で、小銃弾が、甘つたるい、むかつくやうなさゝやきを始め、最初の負傷者が倒れ始めた。聯隊司令官は別人のやうに變化した。彼は最も危険な地點へ姿を現し、その聯隊が以前に拋棄した陣地を回復

しないまへに、兩脚を負傷した。私はトラックで本營へ歸つた。途中我々は負傷者を收容した。衝撃は與へられた。私は、私の全存在をもつて、我々はペトログラードを救ふだらうと感じた。

その人間が全軍の責任を負つてゐる場合、彼は實際の戦闘の危険に身を曝らす権利をもつてゐるか？ 讀者諸君はすでに幾度もかう自問したに相違ない。こゝで私はちよつとこの問題について述べておき度い。平和の場合にも、戦時にも、行動の絶対の法則といふものは存しない、といふのが私の答へである。一切は事情に依存してゐる。戦線にそつて私の旅行に行を共にした士官達はよくかう云つた。『以前には、師團長ですら決してかういふ場所へ鼻先さへ突込まなかつた。』ブルジョア新聞記者は、これを『自家廣告のため』として取扱ひ、かくて彼等の視野の外にあるものを彼等の常套語に翻譯した。事實上、赤軍の創設された條件、その人間的構成、及び内亂の當の性質は、たしかにこの種の舉動を必要としたのだ。一切のこと——規律、戰鬥的慣習、及び軍事的權威——が、新しく築き上げられた、特に最初の時期、我々の力では、一切の必要物を一つの中心から、計畫に基いて、軍隊に供給することが出来なかつた。正にそのために我々は、全然砲火のもとで創られたこの軍隊に、通電かまたは半匿名の勸告といふ方法では、革命的情熱を吹き込むことは出来なかつたのだ。そこで翌日彼等に最高司令部の峻嚴な要求が正しいものであることを認めさせ得るためには、兵卒達の眼前

で權威を獲得する必要があつた。傳統のないところでは、目ざましい實例が肝要だ。個人的冒險は、勝利への道の避くべからざる危険だつたのだ。

一聯の失敗を冒した司令部は、譴責され、更新され、改善されなければならなかつた。人民委員の間に大きな變更が加へられなければならなかつた。一切の軍隊が内部から、コミュニニストを新たに附加することによつて、強いものとされ、また新たな軍隊も到着し始めた。士官學生が戦線の地位に送られた。すつかり弛緩し切つてゐた給與作業は、二三日のうちに引き締められた。赤軍の兵士達はこれまでよりもしつかりした食物を與へられ、シャツと靴を變へ、一二の演説に耳を傾け、互ひに協力して、全く別人となつた。

十月二十一日は危機的な日であつた。わが軍隊はプルコヴォ高地まで退却した。そこから更に退却することは、鬭争を市の街路のうちへ移すことを意味してゐた。その時まで白軍は手ひどい反抗をうけないで前進したのだ。二十一日に、わが軍はプルコヴォ戦線に強固な陣地を敷き頑固に反抗した。敵の前進ははゞまれた。二十二日赤軍は攻勢をとり、ユデニツチは補充軍を招致して、彼の戦線を強める時間を得、戦闘はさらに激烈となつて行つたが、二十三日の夕方に、我々はツアルスコエ・セロ及びパウロウスクを奪取した。その間に近郊にあつた第十五軍團が南方から壓迫を加へ始め、白軍の

背部と右側をおびやかした。それからがらりと局面の變り目が來た。わが軍は、不意に敵の攻撃をうけ、敵の補充軍によつてひどく悩まされ、いまやお互ひが自己犠牲と英雄的活動を競ひ初めた。多くの損害をうけた。白軍の最高司令は、わが軍の損害が彼等のそれより大であつたと聲明した。おそらくさうだつたらう、彼等は、我々よりも經驗があつたし、武器を多くもつてゐた。だが、自己犠牲は我々の側により多くあつたのだ。若い労働者及び農民、モスコウ、ペトログラードから來た兵學生等は、全く生命を顧なかつた。彼等は機關砲をまともに受けて前進し、手に拳銃をもつてタンクを攻撃した。白軍の本營では、赤軍の『英雄的狂氣』について書いた。

まへの數日間は、ほとんど俘虜がなく、白軍の脱走者は稀であつた。が、この時、脱走者及び俘虜が急増加した。十月二十四日、私は戦争の残酷さを知つて、命令を發した。『防禦力のない俘虜や脱走者に向つて、刃物を向けるやぐさな兵卒に禍ひあれ！』

我々の前進は繼續した。エストニア及びフィンランドは最早干渉しようなどゝ考へてゐなかつた。潰走した白軍は、すつかり荒廢してしまつて、二週間のうちにエストニア國境へ雪崩れを打つて退却した。國境を越える時、エストニア政府は彼等の武装を解除した。ロンドン及びパリでは彼等に一瞥も與へなかつた。つい昨日まで聯合國の北西軍だつたものが、いまや寒氣と飢餓で潰滅しつゝあつたのだ。一萬五千の白兵はチブスにとりつかれて、野戦病院へ流れ込んだ。それが『ペトログラード

の熱病の世界的週聞』の結末であつた。

白軍指導者等は聲を高くしてコーワン提督を非難した。彼等の言ひ分では、同提督はフィンランド灣から彼等を十分に支援すると約束したといふのだ。この非難は——云はどちつとばかり——誇張されてゐた。わが水雷艇三隻は、夜襲の間に海軍によつて撃沈され、それと共に五百五十人の若い水兵が海底の藻くづとなつた。そのイギリス提督は尠くともこれに對して功績を興へられなければならぬのだ。重大な損害を悲しんでゐる陸軍及び海軍に向つて發せられたわが命令は、その日に言つた『赤色戦士達よ！ 戦線の凡てにおいて、諸君はイギリスの敵意ある計畫に會つてゐる。反革命軍はイギリスの鐵砲で諸君を射つてゐる。シエンクルスク及びオネガの彈倉、南部及び北部の戦線では、諸君はイギリス製の軍需品を見てゐる。諸君が捕へた俘虜は、イギリスで調製された正服をつけてゐる。アルハンゲル及びアストラハンの婦人や子供は、イギリスの爆弾をもつて、イギリスの飛行家によつて不具者にされ、傷けられた。イギリスの軍艦はわが海岸を砲撃した……』

『だが、イギリスの傭兵ユデニツチと峻烈な戦争を行つてゐる今日ですら、私は諸君に要求する、決して二つのイギリスがあるといふことを忘れてはならないのだ。得利と、狂暴と、醜行と、吸血のイギリスの外に、労働と、精神力と、國際親和の高邁な理想のイギリスがあるのだ。いま我々と戦つてゐるのは、株式取所引の山師共の陋劣な、不誠實なイギリスなのだ。労働と民衆のイギリスは我々の

味方なのだ。』(陸海軍にたいする命令第五百五十九號、一九一九年、十月廿四日。)

シエクスピーアでは悲劇と喜劇とがたがひちがひになつてゐる。それは人生において、崇高なものと、ケチな、俗悪なものが、からみ合つてゐるからだ。この時までには安樂椅子から身を起して、第二乃至第三天國へ攀ぢ登ることの出來たジノヴィエフは、コンミニスト・インターナショナルを代表して、私に次の文書を手交した。『赤色ペトログラードを救つたことは、世界プロレタリアート、及び従つてコンミニスト・インターナショナルにとつての、無限に價値ある奉仕を意味してゐる。ペトログラードのための戦争において、第一位の名譽は、もちろん貴君に、わが親愛なる同志トロツキイに屬するものである。コンミニスト・インターナショナル執行委員會の名において、私は貴下に銘旗を手交し、合せて要請する、貴下の配下の名譽ある赤軍のうち、最もそれを受くるに値する軍隊に、貴下からそれを授與されんことを。コンミニスト・インターナショナル執行委員會議長——ジノヴィエフ。』

私はペトログラード・ソヴィエツト、諸労働組合、及び他の諸々の團隊から、これと同様な文書をうけとつた。私は銘旗はこれを諸聯隊に手交した。文書は私の祕書がそれを文書綴りのかなへ藏ひ込み、そこに残されてあつたが、後になつて、ジノヴィエフが新しい歌を唱ひ始め、まったく異つた調

子になつた時、そこから取除かれた。

ペトログラードを前にしての勝利の歡喜の大爆發は、今日、これを描寫することは困難であり、想ひ起こすさへ困難であるが、その歡喜は、その時丁度我々が南部戦線において決定的の成功を獲得し始めてゐたので、それだけ一層大なるものがあつた。革命はふたゝび高く頭をもたげつゝあつた。レーニンの眼には、ユデニツチにたいする我々の勝利は、更に一層重大に意味をもつてゐた。といふのは十月の中旬頃まで、彼はそれを全く問題にならぬことだと考へてゐたからだ。ポルトビュローはペトログラード防衛の功によつて私に『赤色旗』の勳章を授けることに決定した。このために私は非常に困難な立場にたつた。曩に私は革命の勳章を設置することにむしろ躊躇したのだ。それといふのは我々が舊制度の勳位を廢止したのは、さう古いことではなかつたからだ。『赤色旗』の勳章を設置するに當つて、私は、それが、革命的義務の意識のまだ充實しない人々にたいして、一箇の附加的な刺戟物とされんことを希望したのだ。レーニンはこの點で私に賛成した。その勳章は設定され、尠くとも當時は、砲火の下での實際の勳功に向つて贈與された。ところで今、それが私に與へられようとしてゐるのだ。私は、これまでしばしば私が他の人々に與へたこの表彰物を輕蔑して、それを辭退したが、傳統に服従する以外に、私に道はなかつた。

このことで私は一つの挿話を想ひ出す、がこの挿話の正しい意味の初めてわかつたのは、若干後のことであつた。ポルトビュローの會議の終りに、カメネフがおそろしくまごついて、スターリンにその勳章を授與しようとの提議をした。『何のために？』カリーニンは心から不機嫌になつて、訊ねた。『何故スターリンに授與しなければならぬのか、私にはどうしても分らない。』人々は冗談にまぎらして、彼をながめ、その提案は可決された。會議の終つて後、プハーリンはカリーニンをとつちめた。『どうしても分らないかね？ これはレーニンの考へなんだ。スターリンは、他人のもつてゐるものを自分も持たないでは、生きておれないんだ。彼は決してそれを我慢しないだらう。』私はレーニンを理解し、心秘かに、彼に同意した。

勳章の授與式は、グラランド・オペラ劇場で非常に感銘深いやり方で行はれ、そこで私は、多くのソヴィエツト施設の共同會議をまへにして、軍事的形勢に關する報告をやつた。式の終り頃、議長がスターリンの名を云つた時に、私は喝采した。二三のためらつた拍手が私にしたがつた。一種の冷い當惑がホールに行互つた。しかもそれが特に目立つた、といふのはそのまへに行はれた喝采が非常なものだつたからだ。スターリン自身は、惻惻にも、缺席してゐた。

私は、全體としての私の列車に『赤色旗』の勳章を授與されたのは、無限の歡びを感じた。十一月四日の命令で私は言つた。『十月十七日から十一月三日までの第七軍團の英雄的な戦闘に於て、我の列車の乗組員は表彰に値する役割を演じた。同志カリガー、イヴァノウ、及びザスターは戦闘で

倒れた。同志プレード、ダウデン、ピューリン、チエルネウツェフ、クプリーヴィツチ、及びテスネツクは負傷した。同志アダムソン、ビューリン、及びキゼリスは弾丸にふれて惱んでゐる。私はこゝに他の人々の名前をあげない、といふのは、さうなると、凡ての人々をあげなければならぬからである。戦線にやつて來たためさましい變化のなかで、我々の列車の乗組員は、最も重要な役目を演じたのだ』

數箇月後、レーニンは電話で私に訊ねた。『君はキルデツオフの書物を讀んだかね？』その名前は私に何物も示唆しなかつた。『彼は「白」で、敵だ。ユデニツチのペトログラード進出に就て書いてるんだよ。』こゝで附け加へておかなければならぬが、レーニンは概して私よりもつと忠實に『白』方の刊行物に注意を拂つてゐたのだ。翌日かさねて彼は私に訊ねた。『あの書物を讀んだかね？』

『否』

『送つてあげようかね？』だが私は、レーニンと私がベルリンから同じ新刊物を受取つてゐたので、その書物を讀むことにした。『最後の章を讀む必要があるよ。それは敵の賞讃なんだ。そこには君についても言つてゐる。』しかしどうにも私には、その書物を讀む機會がなかつたのだ。ところが不思議なことに、私はコンスタンチノープルでその書物に行き會ひ、最後の章を讀めといつたレーニンの忠告を想ひ出した。こゝに、ユデニツチの閣僚の一人によつて與へられたものとしての、敵側からの

賞讃がある。

『十月十六日にトロツキイは大意でペトログラードに到着し、赤軍幕營の混乱は、彼の燃えるやうなエネルギーのまへに、道をゆづつた。ガチナが陥落する數時間前、彼はまだ白軍の進出を阻止しようとして努力してゐた。がそれが不可能だと知ると、彼は市を去つて、ツアルスコエ・セロの防衛を組織することに急いだ。強力な豫備軍はまだ到着しなかつた。しかし彼は急速に、ペトログラードの兵學生の全部を集中し、ペトログラードの男性人口の全部を動員し、それから機關砲をもつて(?)赤軍部隊の全部を彼等の陣地にかへし、彼の勢力的な手段によつて、ペトログラードへの一切の接路に防備を施した……』

『トロツキイは、労働者・コミュニニスト即ち精神堅固な人々の部隊を、ペトログラードそのものゝうちに組織することに成功し、その部隊を戦闘の激甚な場所へ送つた。ユデニツチの幕僚の證言によると、赤軍部隊でなく、(?)これらの部隊が、海軍陸戦隊及び兵學生と共力して、獅子のやうに戦つた。彼等は劍戟をもつてタンクを攻撃し、この鋼鐵の怪物の大袈裟な破壊の火の下に、列をなして倒れたが、なほその陣地の防衛をつとげた。』

我々は、決して機關砲をもつて赤軍の兵士を驅り立てはしなかつたが、我々はペトログラードを救つたのだ。

あらう。

だがしかし党内には闘争があり、しばしば非常に激烈な闘争があつた。事態はそれ以外にあり得なかつたのだ。仕事之餘りにも新しいものであり、困難は餘りにも大きかつた。舊軍隊は、なほ解體しつゝあり、そして我々が新しい聯隊を召集せざるを得なかつた正にその時に當つて、全國にわたつて戦争憎惡を撒き散してゐた。ツアーの士官は、時には全く無慈悲に、舊軍隊から追ひ出されて居り、我々は實にこの士官達を赤軍の教師として、編入しなければならなかつた。諸委員會が、尠くとも革命の最初の時期、革命の當の體現として、舊聯隊のうちに生れて來た。新しい聯隊のうちでは、委員會制度はこれを許しておくことが出來ず、解散された。舊い軍規にたいする呪咀が、我々が新しい軍規を導き入れた時にもまだ、我々の耳に響きつゞけてゐた。短い期間に、我々は義務兵役制度から徴兵制度へ、不正規兵の部隊から正しい軍隊組織へ赴かなければならなかつた。我々は不斷に不正規軍の方法と戦はなければならなかつた——この闘争は、極度の頑強さと、非妥協性と、時として最も峻厳な手段すらも、必要とした。不正規的交戦の混沌状態は、革命の根柢に據つてゐた農民的要素を表現してゐた。然るに一方それにたいする闘争は、プロレタリア國家組織を支持して、それを覆さんとしつゝあつた原始的な、小ブルジョアの無政府に反對する闘争でもあつたのだ。しかし不正規的戦争のやり方と手段とは、同時に黨の内部に反響を見出した。

軍事問題に於ては、反對派は、赤軍の編成の最初の數箇月の間、多かれ尠かれ明白な形をとつた。

その基礎的な觀念は、選挙的な方法の擁護となつて現れ、専門家の編入、軍規の設定、軍隊の中央集權化等々にたいする反抗となつてあらはれた。反對派は、この建前にたいして何等か一般的な理論的表式を見出さうと努めた。彼等は主張した。中央集權的軍隊は資本主義國家に特性的のものであり、革命は一定陣地による戦争を抹殺しなければならぬばかりでなく、同時に中央集權的軍隊もこれを抹殺しなければならぬ。革命の當の本質は、移動し、快速な攻撃を加へ、威嚇運動を行ひ得るその能力にあるのであつて、その闘争勢力は、さまざまの武器から成つた、小さな、獨立の枝隊に體現されてゐる。それは一つの地盤に束縛されるものでなく、その行動においては、全く共感的な人口の支持に依存してゐるものであり、その軍隊は自由自在に敵の背部に突然姿を現すことが出来る。等々。簡単にいへば『小戦争』の戦術が革命の戦術として宣言されてゐた。

これはすべて全く抽象的であり、實際には我々の弱點の理想化以外の何ものでもなかつたのだ。内亂の眞摯な經驗は、すぐこれらの偏見の正しからぬことを實證した。中央集權的組織と戦略の方が、地方的速成法、軍事的分散主義及び封建主義よりも優つてゐることは、闘争の諸經驗において、あまりにも速かに、あまりにもはつきりと、證明されたのだ。

赤軍はその勤務部隊のうちに、數千の、後には數萬の舊士官をもつてゐた。彼等自身の言ふところ

では、彼等の多數は、ほんの二年まへまで、穩健な自由主義者を極端な革命家だと考へてゐて、他方ポリシエヴィキは、彼等の眼には第四デイメンジョンに屬するものだつたといふ。私は當時、反對派を攻撃して書いた。『もし我々が軍事専門家を始め「無数の専門家」を獲得することが出来ないと思へるならば、我々は實際、我々自身及びわが黨について、我々の觀念の精神的な力について、我々の革命的道德の牽引力について、一箇の低劣な見解を抱くものである。』我々はたしかに我々の目的を達成した、が、困難と軋轢なしではなかつたのだ。

コンミニュニスト達は自己を軍事的作業に適應させるのに、若干の困難をなめた。こゝでは選擇と、教育とが肝要であつた。一九一八年八月、カザンを前にしてゐたときですら、私はレーニンに打電した。『服従することをわきまへてゐるコンミニュニスト、艱難に堪へる用意が出来、死の覺悟をしてゐる人々だけが、こゝへ送られねばならぬ。つまり煽動家はこゝでは要はない。』一年後、黨員の間にすら無政府状態がみなぎつてゐたウクライナにおいて、私は第十四軍團に與へる命令のうちで書いた。『私は警告する、軍隊の伍列に参加するために黨によつて派遣されたコンミニュニストは、何れもそれに依て赤軍の一部となつたものであり、赤軍の他の兵士と同様の權利と義務をもつてゐるものである。非行の罪に問はれ、革命的軍事義務を侵犯したコンミニュニストは二重に罰せられるであらう。何となれば、愚昧な、教育のない人間においては赦し得られる罪過も、世界の勞働階級を指導する黨

の一員にあつては、これを赦すことが出来ないからである。』明かに多くの軋轢がこの領域でもち上り、不平に不足することはなかつた。

軍事反對派には、たとへば現在の國立銀行の支配者ペタコフが含まれてゐた。彼はどんな反對運動にも定つて参加したが、それは一政府官吏としてその仕末をつけるために過ぎなかつた。三四年前のこと、ペタコフが私の屬してゐたと同じグループに屬してゐた時、私は冗談に豫言して、ボナパルト的のクー・デターがやつてくれば、ペタコフはその翌日手鞆を抱へて役所へ行くだらう、と言つた。いま私はもつと眞面目にかう附け加へることが出来る、もしこのことが事實となつて現れないとしても、それはボナパルト的のクー・デターがないからに過ぎないので、ペタコフに何等かの失敗があつてのことではないだらうと。ウクライナで彼は大きな勢力を張つたが、それは偶然のことではなく、彼は特に經濟の領域で、立派な教育のあるマルクシストであり、疑ひもなく、意志の強い、いゝ行政者であるからだ。はい時期にはペタコフは革命的エネルギーを示した。しかし、後年になつて、それは官僚的保守主義に變化した。彼の半ば無政府主義的な見解を征服するために、私は抑々の最初から彼に重要な地位を與へ、それで彼をして言葉から行動へ變移させようとしたのだ。この方法は新しいものではないが、しばしば非常に有効だ。彼の行政的意識は、間もなく彼を驅つて、それまで彼がそれに反對して言葉の戰爭をつゞけてゐた正にその方法を、採用せしめた。さういふ變化は有りふれ

たことであつた。

軍事反対派の最もいゝ分子は全部、間もなく仕事のうちへ引き入れられた。それと同時に私は、極めて執拗に、彼等自身の原則にもとづいて新しい聯隊を組織する機会を提供し、私としても一切の必要な物資を彼等に與へると約束した。ヴォルガの一つの地方グループだけが、この挑戦に答へ、一聯隊を組織したが、それは爾餘のものと同等異つてはゐなかつた。赤軍は全戦線において勝利を博しつつあり、反対派は、事實上溶け去つてしまつた。

軍事労働者が其處でヴォロシロフの周圍に蝟集されてゐたツアリツシンは、赤軍及び軍事反対派にあつて、特別な地位をしめてゐた。そこでは革命諸枝隊は、北部コーカサスの農民から出て來た、以前の下士を主にその首班としてゐた。コサツク兵と、南部の草土帯の農民との間の深い對立は、その地方の内亂に毒々しい獍猛さを與へ、それがすぐと諸村落にしみこんで行き、數家族全部の大袈裟な殺生にまで達した。これは地方の大地に深くその根を下した一箇の農民戦争であり、その百姓的の獍猛さにおいて、他の一切の部分の革命的闘争をはるかに越えてゐた。この戦争は相當に多くの強靱な不正規兵を正面へ押し出して來、彼等は地方的の小戦争には優れてゐたが、もつと大きな規模の軍事行動をとらなければならぬ場合には、いつも失敗した。

ヴォロシロフの生涯は、ストライキ、地下的運動、投獄及び流刑において、指導力をもつてゐた勞

働者・革命家の生涯を説明してゐる。今日の他の支配者の多くと同様に、ヴォロシロフは労働者の間から現れた一箇の民族的・革命的・民主主義者に過ぎず、それ以外の何ものでもなかつたのだ。このことは帝國主義世界戦争において、その後二月革命において、最も鮮かに現れた。ヴォロシロフの公の經歷では、現在の指導者の多くにおいて見るやうに、一九一四年から一九一七年までの年月が、大きな空白となつてゐる。この空白の祕密は、戦争中、これらの人々の大部分が愛國者となつて、彼等の革命的活動を停止したことにあるのだ。二月革命では、ヴォロシロフは、スターリンと同様に、左翼からグチコフ及びミュリコフの政府を支持した。彼等は極端な革命的民主主義者ではあつたが、いかなる意味においてもインターナショナルではなかつた。戦争中愛國者であつたボリシエヴィキは、二月革命の後には、民主主義者となり、然り而して今日ではスターリンの民族社會主義の追隨者となつてゐる。ヴォロシロフも決してその例外ではない。

彼はルガンスク出の労働者の一人であり、そのうちの特權的な高い部分の出身であつたが、習慣や嗜好の上で、ヴォロシロフはいつも、一個のプロレタリアートといふよりも少所有者に似てゐた。十月革命の後、彼は、軍事的知識と廣汎な見識を要求する中央集權的な軍隊組織に反對し、下士及び不正規兵の反対派の自然の中心となつた。かう云つたのがツアリツシン反対派の始まりだつたのだ。

ヴォロシロフの仲間では、『専門家』、陸軍大學の卒業生、高級幕僚及びモスコウは、嫌惡をもつて

取扱はれた。だが、その不正規兵の隊長達も自分自身で何等軍事的知識をもつてゐない以上、彼等自身『専門家』を手近かにおかざるを得なかつたが、この専門家は、自然第二流のものであつて、もつと才能のあり、もつと知識のあるものを斥けて、彼の地位にしつかりとしがみついた。南部戦線の司令官にたいするツアリツシン軍事首脳者の態度は、白軍に對する彼等の態度と、ほとんど異つてゐなかつた。モスコウの中心と彼等との交渉は、軍需品の不斷の要求から一步も出てゐなかつたのだ。我々の物資は極めてわづかで、工場で生産された一切のものは、即時に諸軍隊に送られてゐた。だがどの軍隊も、ツアリツシンの軍隊ほど澤山の小銃又は彈藥筒を吸収したものはなかつた。その要求が拒絶されると、いつもツアリツシンは『モスコウの専門家の隠謀』といふ叫び聲を立てた。その軍隊は、自分のために給與物を強奪するために、ツイヴォジョールといふ水兵を特別の代表としてモスコウにとどめておいた。我々が軍規をひきしめた時、ツイヴォジョールは山賊となつた。その後彼は捕へられて、射殺されたと信ずる。

スターリンは數箇月ツアリツシンに滞在して、ヴォロシロフの手製の反對派と、彼と最も親しい間柄の仲間の助けをかりて、私にたいする彼の隠謀を策してゐた。その時ですら、それが彼の活動のうちで最も重要な地位を占めてゐたのだ。だが彼は、それをするに當つて、いつでもドロンをきめこむことの出来るやうな風に、自身を處理してゐた。

219

毎日毎日私は、最高司令官又は戦線司令官から、命令を遂行することが出来ないとか、その實状を知ることが出来ないとか、或は質問に對する答へを得ることすら出来ないとか、つた種類の、ツアリツシンに對する不平を受取つた。レーニンはこの軋轢の發展を警戒して見守つてゐた。彼は私よりもずつとよくスターリンを知つてをり、ツアリツシンの頑強なのはスターリンがこつそり指揮してゐるからではないかと、明かに疑つてゐた。形勢はもはや我慢が出来なくなり、私はツアリツシンに命令を強行することに決意した。最高司令部とツアリツシンとの間に新しい衝突があつて後、私はスターリンの召喚を求め得るにいたつた。それはスヴェルドロフの仲介を通じて行はれ、彼はスターリンを連れ戻すために特別列車で出掛けた。レーニンはこの衝突を最少限度のものにしようと思つてゐた。そしてこの點で彼はもちろん正しかつた。私としては、これまでスターリンに殆ど一顧をすら與へてゐなかつたのだ。一九一七年に、彼は、たゞ目にとまるかとまらない影として、私のまへに飛び出した。戦闘の最中にあつては、私はいつも彼の存在を忘れてゐた。私がツアリツシン軍隊のことを考へたのは、南部戦線で信頼の出来る側面軍を必要としてゐたからで、どんな犠牲を拂つてもそれを組織しようとして、私はツアリツシンへ向けて出發した。その途中で、スヴェルドロフと出會つた。彼は私の意嚮について用心深く訊ね、それからスターリンと會談してはどうかと提議した。スターリンは、時恰も、スヴェルドロフと同じ列車で歸還の途にあつたのだ。

『貴下は實際、彼等全部を罷免しようとするのか？』とスターリンは、誇張した謙遜の調子で、私に訊ねた。『彼等はいゝ小供達だ。』

『そのいゝ小供達は革命を荒蕪させるだらう。革命は、彼等が生長して青年期をぬけ出て来るのを待つてゐることは出来ない。』と私は彼に答へた。『私の欲するのは、ツアリツシンをソヴイェット・ロシアへ引入れることで、それ以外にはない。』

數時間の後、私はヴォロシロフと會つた。その幕營は狼狽の状態にあつた。トロツキイは大きな箒を携へ、不正規軍の隊長等を代へるために澤山のツア一の將軍達を伴つてやつて來たといふ風説が行はれてゐた。こゝで附け加へておかなければならぬが、その隊長達は、私がそこへ到着する時までには大急ぎで、聯隊、旅團、及び師團の司令官として各自自身を任命してゐたのだ。私はヴォロシロフに質問し、君は戦線及び最高司令官からの命令をどう考へるか？ と訊ねた。彼は私に腹藏なく答へ、ツアリツシンは、正しいと認めた命令だけを遂行することが必要だと考へてゐる、と言つた。それは餘りにひどかつた。私はそれに應酬し、もし彼が命令や軍事的任務を、彼に與へられた通りに、正確に絶對的に遂行しようとしなければ、私は即時に護送兵をつけて彼をモスコウへ送り、革命裁判所の審問に附する、と言つた。私は誰一人罷免せず、形式上の服従の證明で満足した。ツアリツシン軍隊中のコンミニュニストの大部分は、單なる恐怖からでなく、心から眞摯に、私を支持した。私は部隊

の全部を訪問し、不正規兵を鼓舞してまはつたが、彼等の間には多くの優れた兵士があり、たゞ適當な指導者が必要であつた。この仕事を終へて、私はモスコウへ歸つた。

この事件の凡てにおいて、私は個人的偏見とか惡意とか言つた感じは、全然もつてゐなかつた。私は、これまでの一切の私の政治的活動において、個人的考慮が何等かの役目を演じたことは曾つて無かつた、と立派に云ふことが出来ると思ふ。否、我々が遂行してゐた大きな闘争においては、私に餘計な問題の考慮をゆるすには、賭が餘りにも大きかつたのだ。その結果、私はしばしば個人的偏見、友好的愛憎心、又は虚榮心を傷けた。スターリンは注意深く、その傷けられた人々を拾ひ上げ、またそれをする時間と、個人的興味とをもつてゐたのだ。その時以來、ツアリツシンの支配仲間は、彼の主なる武器の一つとなつた。レーニンが病氣になるとすぐ、スターリンは彼の同盟者の助けをかつて、ツアリツシンをスターリングラードと改名した。その人民の大衆は、その名が何を意味するものか、理解の亡靈すらもつてゐなかつた。そしてもしヴォロシロフが今日ポリトビュローの一員であるならば、その唯一の理由は外でもなく、一九一八年に私が、護衛兵をつけてモスコウへ送ると威嚇して、彼の降服を強要したからだ——それ以外に理由は見出せない。

我々の軍事的作業に關する章、いや寧ろそれと結びついた黨内の闘争に關する章を、これまでどこにも發表されなかつた當時の黨通信文書からの若干の抜萃で説明することは、興味のあることだと思

ふ。一九一八年十月四日、私はタンボフから直通線でレーニン及びスヴェルドロフに言つた。

『私は絶対にスターリンの召致を主張する。ツアリツシン戦線は、軍隊の数が多いに拘らず、悪い状態に在る。私は、南部戦線の司令官の命令に服従するといふ條件で、彼（ヴォロシロフ）をそのまま第十軍團（ツアリツシン）の司令官としておいた。いままで彼等は、コプロウのところへ軍事動作の報告すら送らなかつたのである。私は日に二回、彼等に動作と偵察の報告を送らせるやうにした。もし明日これが行はれないならば、私はヴォロシロフを審問に附し、軍隊への命令にこの事を聲明するつもりである。その通路が徒歩でも馬上でも通過不可能になるまへに、攻撃を開始するためには、ほんの短い時間しか残されてゐない。我々には外交的折衝をやつてゐる時間はないのである。』

スターリンは召致された。レーニンは、私がひたすら軍事的考慮によつて導かれてゐることを理解してゐた。同時に彼は自然、その意見の不一致に當惑し、我々の関係を緩和しようとなつた。十月二十三日、彼はバラシヨウに在る私に書簡を寄せた。

『今日スターリンが、ツアリツシン前のわが軍の三つの大きな勝利の報道を携へて、歸還した。（その「勝利」は、実際には、挿話的な意味しかないものだ——トロツキイ）スターリンはヴォロシロフ及びミニン——彼はこの人々を非常に價値のある、全く掛けかへのない働き手だと認めてゐる——にたいして、その地を去らぬやうに、中央の命令に全部服従するやうにと説服した。彼によると、彼等の

不満の唯一の原因は、彼等へ彈藥や彈藥筒を送ることが極度に遅れたり、又は全く送らないことすらあることである。それが缺乏してゐるために、良好な状態にあるコーカサス軍隊の二十萬の精銳もまた、失はれつゝあるといふ。（この不正規軍は、それから僅か後に、たつた一撃を喰つてよろめき立つてしまつて、その完全な無力を暴露したのだ——トロツキイ）スターリンは南部戦線で働き度いと熱望してゐる。……彼は、實際の仕事において彼の見解の正しさを明示し得んことを希望してゐる。……レウ・ダヴィドウキツチ、君にこれらスターリンの言辭の全部を報告するにあつて、私は要請する、この全部を考慮して、第一に、スターリンと個人的にこの問題を談議する意嚮が君にあるかどうか——このために彼は君を訪問することを諾してゐる——それから第二に、一定の具體的な條件でいまの軋轢を取り除き、共同作業——それをスターリンは非常に希望してゐる——をするやうに手筈を定めることが可能だと君は考へるかどうか、を答へて欲しい。私としては、スターリンと連絡を保つて仕事する手筈を整へるために、あらゆる努力を拂ふ必要があると考へてゐる。　　レーニン』

私はこれに答へて満腔の同意を表し、スターリンは南部戦線の革命軍事會議の一員に任命された。だが、あゝ、妥協は何等の効果もたらさなかつた。ツアリツシンでは事態は爪のあかほども改善されなかつた。十二月十四日、私はクルスクからレーニンに打電した。『ヴォロシロフは妥協の一切の

企てを水泡に歸せしめてしまつたので、最早彼を現地地位に止めておくことは出来ない。新司令官を加へた新たな革命軍事會議をツアリツシンに送り、ヴォロシロフをウクライナへ移す必要がある。』

この提議は反對なしで可決された。しかしウクライナの事態も亦、改善しなかつた。以前と同様、そこに漲つてゐる無政府状態は、正規的な軍軍行動を非常に困難なものとした。そしていま、再びその背後にスターリンを持つヴォロシロフの反對派は、その行動を全く不可能にしてしまつたのだ。

一九一九年一月十日、私はグレーデー驛から、當時の中央執行委員會議長スヴェルドロフに次のメッセージを送つた。『私は無條件的に聲明しなければならぬ、さきにツアリツシンの軍隊を完全に崩壊に導いたツアリツシン政策は、ウクライナに於てはこれをどうしても認容することは出来ない。…スターリン、ヴォロシロフ一派によつて取扱はれた戦線は、全計畫の荒廢を意味してゐる。トロツキイ。』

レーニン及びスヴェルドロフは、遠い所からツアリツシン・グループの仕事を見てゐたので、なほ妥協を成立させようと試みてゐた。不幸にも私は彼等の電報を受取らなかつたが、一月十一日、私はレーニンに返答した。『妥協は勿論必要だ、だが腐つた妥協は必要でない。現在の事實として、ツアリツシンの人達は今カールコフに集まつてゐる。…ツアリツシン政策に對するスターリンの保護は軍事専門家のいかなる隠謀又は裏切りよりも悪い、最も危険な潰瘍だと私は思惟する。トロツキイ。』

『妥協はもちろん必要だ、だが腐つた妥協は必要でない。』四年後、レーニンは同じスターリンのことのついでに、殆どこの言葉そのまま、この文句を返して來た。それは十二回黨大會のまへであつた。レーニンはスターリン一派を打破しようと準備を整へ、民族問題の線にそつて、彼の攻撃を開始したので。私が妥協を提議した時、レーニンは答へた。『スターリンは腐つた妥協をやるだらう、そして彼は我々を欺くだらう。』

一九一九年三月、中央委員會への書簡のなかで、私はジノヴィエフに答へた。彼は軍事反對派と共に盲動してゐるらしかつた。『私は、ヴォロシロフが軍事反對派のどのグループに組入れらるべきものか、それを決定するために、個人心理の研究に従事することは出来ない。だが私は敢て云ふ、彼に關して、私が私自身を責めることの出来る唯一のことは、協議、説服、及び個人的組合せの方法で進まうとして、二三箇月にも互つて、私の計畫の遂行を延引させたことであつて、しかもその時には、仕事の利益としては、そんなものでなく、確乎たる、行政的決定を要求してゐたのだ。これと云ふのは、要するに第十軍團の問題はヴォロシロフの見解を變へることにあつたのでなく、出来るだけ短時間の間に軍事的成功を確保することにあつたからだ。』

五月三十日に、ヴォロシロフの指揮の下に諸軍團をもつて獨立のウクライナ・グループをつくり度いといふ執拗な要求が、カールコフからレーニンのもとへ到着した。レーニンはカンテミロウカの停

車場に在つた私に、直通線でこれを通じて来た。六月一日、私は彼に答へた。『第二、第八及び第十三軍團を合併して、ヴォロシロフの配下におかうとする一部ウクライナ人の執拗な要求は、全然これに賛成することは出来ない。我々の必要とするところは、ドンネツ領域における行動的統一ではなくて、デニキンにたいする一般的統一である。……ヴォロシロフによる軍事及び食料の獨裁（ウクライナにおいて）の觀念は、キエフ（即ちウクライナ政府）及び南部戦線に反対の方向をとるドンネツ分離主義の産物である。私は微塵も疑はない、この案の實現は混沌状態を激化するにすぎぬであらうし且つ軍事行動の方向を全く殺してしまふであらう。ヴォロシロフ及びメズラウクに向つて、彼等に與へられた實際の仕事を遂行するやうに要求してもらい度い。トロツキイ』

六月一日、レーニンはヴォロシロフに打電した。『一切の紛擾を即時に停止すること、一切の仕事を軍事的基礎におくこと、獨立のグループに關する一切の立派な計畫や、ウクライナ戦線を回復しようとする同類の企てについて、この上時間を浪費しないこと、これは絶対に缺く可からざることだ。レーニン。』

レーニンは、規律のない分離主義者を操縦することがいかに困難か、それを經驗から學び知つて、同じ日にポルトビュローの會議を召集し、次の決議を可決し、それは直ちにヴォロシロフ及び凡ての關係者へ送られた。『中央委員會のポルトビュローは、六月一日に會議を開き、トロツキイの意

見に完全に同意し、獨立のドンネツ合同軍をつくらんとするウクライナの計畫を決定的に拒否した。我々は、ヴォロシロフ及びメズラウクが彼等の眼前の仕事を遂行せんことを要求する。……然らざれば明後日トロツキイがイズウムに諸君を訪ね、彼の決定を一層詳細ならしめるであらう。……中央委員會のビュローの訓令によつて、レーニン。』

翌日、中央委員會は軍司令官ヴォロシロフの問題を取上げた。彼は、敵軍から捕獲された軍隊供給物の大部分を、彼の軍隊の使用にあてるために強奪したのだ。中央委員會は決議した。『同志ラコウスキーに訓令して、このことをイズウムに在る同志トロツキイに打電せしめ、且つ、これらの供給物を共和國の革命軍事會議の管理に移すため、最も強硬なる手段をとらんことを彼に求めしめること。』同じ日にレーニンは直通線で私に報道した。『デュベンコ及びヴォロシロフは軍隊財産を勝手に使用してゐる。完全な混沌状態、ドンネツ地域へは如何なる眞摯な援助も與へられない。レーニン。』言葉をかへて云ふと、その時ウクライナに行はれてゐたことは、曩にツアリツシンで私がそれと争闘した慣行の、單なる繰返しにすぎなかつたのだ。

私の軍事活動が私のために澤山の敵をつくつたことは、不思議ではない。私は傍見をしなかつた。私は軍事的成功の邪魔をするものを肘で押しつけた。或はまた、仕事に取急いで、うっかり者の踵を踏んづけ、餘り忙しいので挨拶すらしなかつた。或る人々はそんなことを覚えてゐるものだ。不平な

抱いた者、感情を傷けられたものは、スターリン又はジノヴィエフへ彼等の通路を見出した、といふのは、この二人も亦手傷をそだてゝゐたからだ。戦線で逆轉がある度に、不平家共はレーニンにたいする彼等の壓力を増した。舞臺裏では、これらの策謀はその時ですらスターリンによつて手配されてゐた。我々の軍事政策、『専門家』にたいする私の保護、コンミニュニストにたいする峻嚴な取扱ひ、等々を非難した覺書が提出された。辭職を餘儀なくされた司令官達、又は失望した赤軍『元帥達』は我々の戰略の危険、高級司令官のサボターージュ、その他澤山のことを指摘した報告を、後から後から送つた。

レーニンは指導上の一般問題に餘りにも没頭してゐたので、諸戦線へ小旅行を試みることや、又は軍事部門の日常問題に立入ることが出来なかつた。私は殆どいつも戦線に歸つてゐた——それがモスコウの告口屋共の活動を容易ならしめたのだ。彼等の執拗な非難も、時々にはしかレーニンを掻き亂すことが出来なかつた。私がモスコウへ訪問する時までには、彼は多くの疑問や質問をつみかさねておいた。だが、私と半時間談合した後は、我々の相互理解と完全な親和とは、ふたゝび取戻された。コルチャツクがヴォルガに近づいてゐた時で、東方で我々が敗北してゐた間のこと、人民委員ソヴィエツトへ私は汽車から眞直ぐにかけつけたが、その會議の一つでレーニンは私にノートを書いてよこした。『専門家の全部を焼いてしまつて、ラシエヴィツチを總司令官に任命するしたらどうかね？』

ラシエヴィツチは古いポリシエヴィキで、『ドイツ』戦争中に軍曹の地位に昇進した人だ。私は同じノートで答へた。『見戲だ！』レーニレは『君は僕におそろしく手酷しいね。』とでもいひたげを、非常に意味の深いしめ顔をして、重い眉毛の下から盗むやうに私を眺めた。だが、心の底では彼は實際何等疑問の餘地を残さなかつた。會議の後我々は一緒に出て來た。レーニンは戦線についてさまざまのことを私に訊ねた。

私は言つた。『舊士官を全部蹴出してしまつた方がよくはないかつて、私に訊ねましたね？ だがいつたい、いま我々の軍隊に、舊士官がどれだけゐるか御存じですか？』

『知らない。』

『凡その數だけでも？』

『私は知らないんだ。』

『三萬人以下ぢやないですよ。』

『え？』

『三萬人以下ぢやない。叛逆者一人にたいして頼りになるものが百人ゐる。脱走者一人に對して、戦死するものが二三人ゐる。どうして彼等の全部を取換へてしまはなければならないか？』

數日後、レーニンは社會主義社會建設の問題について演説してゐた。これがその時彼の云つたこと

だ。『我々の軍事部門に在る士官は數萬をもつて數へられると、最近同志トロツキイは私に報告したが、その時私は、我々の敵を正しく使用する祕密は何であるか……資本家達が我々に反対して使用するために集めた煉瓦から、どうしたらならばコンミニズムが建設されるかについて、一つの具體的な概念を得た。』

同じ頃に開かれた黨大會に、私は缺席——戦線にゐた——したが、レーニンは、反対派の非難を向ふに廻して、當時私の遂行しつゝあつた軍事政策に對する公平な擁護の態度をもつて、現れて來た。この理由で、第八回黨大會の軍事部會の速記録は、今日までつひに公表されてゐないのだ。

戦線で、私は或る時メンデンスキーの訪問をうけた。私は久しい以前から彼を知つてゐた。反動の時代、彼は、極左のグループ、即ち彼等（ボクダノフ、ルナチャルスキーその他）の新聞の名前からヴェルヨドヴィストと呼ばれてゐた一派に屬してゐた。メンデンスキー自身はフランスの社會主義に傾いてゐた。ヴェルヨドヴィストは、ロシアから『非合法的』な革命的な仕方やつて來た十人乃至十五人の労働者のために、ボログナでマルクス主義學校を組織してゐた。これは一九一〇年の事だ。約二週間、私はそこで新聞に論文を書き、また黨の戦術問題について、討論會を指揮した。そこで私はパリから來たメンデンスキーに出會つたのだ。彼の私に與へた印象を描寫するには、彼は全然何等

の印象も與へなかつたと言ふのが最善のあらはし方であらう。彼は誰か他の實在しない人間の影のやうに、或はむしろ未完成の肖像畫の拙いスケッチのやうに、思はれた。さういふ人間があるものだ。たゞ時々、他に巧に取入らうとする微笑、乃至は眼の祕密な戯れが、己れのつまらなさから脱れようとして彼の焦慮してゐることを、暴露した。十月時代彼がどんな行動をしたか、いやそも／＼何等かの行動をしたか、私は知らない。だが、權力を奪取した後、當時の押し合ひへし合ひのうちで、彼は大藏省へ送られた。彼は彼自身の何等積極的な活動も示さず、むしろ彼の無能を明るみにさらけ出した。且けだつた。其後、ヂェルヂンスキーが彼を掴まへた。ヂェルヂンスキーは意志が強く、熱情的で、且つ道徳性の高い人であつた。彼の容姿はチエ・カー^{*}を支配した。メンデンスキーは黙々として書類に埋れてゐたので、誰一人として彼に注意を拂ふものはなかつた。ヂェルヂンスキーが、その晩年に、彼の代理役ウンシユリヒトと別れた時、他の人が見つからなかつたので、始めてメンデンスキーをその後任に任命しようと提議した。この提案には驚かないものはなかつた。『しかし他に誰か？』ヂェルヂンスキーは辯解して、言つた。『誰もないんだ。』しかしスターリンはメンデンスキーを支持した。いつたいにスターリンは、政府機關のお蔭ひとつで政治的に存在してゐる人々に支持を與へた。そんな工合でメンデンスキーはゲー・ペー・ウーの内部でスターリンの本當の影となつたのだ。ヂェルヂンスキーの死後には、メンデンスキーはゲー・ペー・ウーの首腦者となつたばかりでなく、同時

に中央委員會の一員となつた。かく實在しない人間の影でも、官僚の映寫幕の上では、實在の人間の影として通用するのかも知れない。

*チエ・カーは『チレズブチャイナヤ・コミツシヤ』(非常委員會)の略稱で、主として革命の防衛に關する、警察及び司法事務を遂行してゐた。チエ・カーの職能は、その組織替への後、ゲー・ペー・ウー(全國政治局)によつて管掌されてゐる。——英譯者。)

だが十年前、メンヂンスキーは彼自身のために別箇の軌道を發見しようと試みた。彼は陸軍の特別部門についての報告を携へて、列車中の私を訪ねた。公式の訪問を終つた後で、彼は、例の他に巧みとり入らうとする微笑——これは人を警戒させると同時に當惑を感じさせた——をうかべて、吃りながら、要領を得ないことを云ひ始めた。彼は最後に私に質問した。スターリンが貴下にたいして非常に込入つた隱謀を企てゝゐますが、貴下は御知りですか？

『何ですと？』私はたゞ當惑して言つた。——私はそんなことは考へたこともなければ、てんで譯がわからなかつたのだ。

『さうです、貴下が特別にレーニンに敵意を抱いてゐる者を貴下のまはりに集めてゐると、彼はレーニンやその他の若干の人々に説きつけてゐるのです。』

『君は氣が狂つたに相違ない。メンヂンスキー。どうか眼を醒してくれ。私としては、そんなことを

話すことすらいやだ。』メンヂンスキーはまごついて肩をひん丕げ、空咳をしながら出て行つた。その同じ日の後、彼は他の畑を求め初めたと思ふ。

一時間かそこいら仕事をした後で、私は何か私に故障が起つたやうに感じた。この男は、その譯のわからない話で、食物を一杯鷄呑みにしたと丁度同じやうに、私の平靜を亂したのだ。私は明白な、いろ／＼な出來事を想ひ起し、それをつなぎ合して見た。すると私の眼のまへに、スターリンが新しい光に照されて現れた。すつと後になつてクレステンスキーはスターリンについて私にかう言つた。

『彼は黄色い眼をした悪人だ。』メンヂンスキーが訪問した後で、初めて私の心をよこぎつて閃いたのは、彼のこの『道德上の黄色さ』であつたのだ。その後短日時の訪問にモスコウへ赴いた時、私はいつものやうに第一にレーニンのところへ行つた。我々は戦線について話し合つた。レーニンは生活の具體的な細かいこと、小さな事實及びその場の観察を好み、それは藪のまはりを無駄に打廻ることをせず、直ちに彼を事物の眞髓に觸れしめたのだ。彼は實際の生活へ紋切型に近づく遣り方に堪へることが出來なかつた。一切の中間的な段階を一足飛びにして、彼はいつも彼獨特の質問を構へた。そして私は、彼がそれで事實のなかへ穿ち進んで行く巧妙さをいつも驚歎しながら、彼に答へるのが常であつた。我々は笑つた。レーニンは通例快活な氣分であつた。私も私自身を陰鬱な人物だとは描かないであらう。最後に私は、メンヂンスキーが南部戦線へ私を訪ねて來たことについて話した。

『その話に何等か本當のことがあるなどいふことが、實際あり得ることだらうか?』と私は訊ねた。するとレーニンがすぐ興奮し、彼の顔に血が浮いて来るのを私はみとめた。『何も彼もくだらぬことだ。』彼はさう繰返してゐたが、非常に自信のある風ではなかつた。

『僕はたゞ一つだけ知り度いと思つてゐる。』と私は言つた。『僕が君に反對する人々を拾ひ上げてゐるなど、そんなおそろしい考へを、ほんの一瞬間にせよ、君は受けつけることが出来ますか?』
『くだらぬことだ。』とレーニンは答へた。この時には、斷乎とした口調だつたので、すぐ私は安心させられた。我々の上にかゝつてゐた小さな雲は消えたやうに思はれ、分れる時はいつにない友誼がこもつてゐた。しかし私は、メンヂンスキーが彼自身の帽子を通して私に語つたのでないことを理解した。レーニンが、すべてを私にあかささないで、それを否定したのだとすれば、それは彼が紛擾、個人的の喧嘩を避けようと欲したからに過ぎなかつたのだ。

この點で私は全くレーニンに同感した。

しかしスターリンは明かに紛擾の種をまいてゐた。彼がいかに組織的にそれをやつてゐたか——ほとんどそれ以外に何事もせず——それを私の知つたのは、それから甚しく後のことではなかつた。といふのはスターリンは曾つて何等重要な仕事をしなかつたからだ。『スターリンの第一の性質は怠惰だ。』とブハーリンは或る時私に言つた。『そして彼の第二の性質は、彼より多くのことを知つてを

り、又はよく仕事の出来る人なら、何人にたいしても執念深い嫉妬を抱くことだ。彼はイリイツチの脚下を掘らうと試みさへしたのだ。』

第十一章 戦略についての意見の相違

この書物では、私は、赤軍の歴史又はその戦闘史を詳しく語つてゐるのではない。その二つの題目は、革命の歴史と不可分的にむすびつけられて居り、自叙傳の範囲をはるかに越えてゐるものであつて、おそらく他の一書の主題となるであらう。だが私は、内亂の過程に生じた政治上、戦略上の意見の相違をそのままにして通することは出来ない。革命の運命は軍事行動に依存してゐた。時の進むにつれて、黨の中央委員會は、戦争の問題に、別けても、戦略の問題にますます没頭して行つた。主要な司令官の地位は、舊派の軍事専門家によつて占められてゐたが、彼等には社會的、政治的條件の理解が缺けてゐた。黨の中央委員會を擁してゐた經驗ある革命的政治家には、軍事的知識が缺けてゐた。大きな規模の戦略的着想は、いつも集合的努力の結果であつた。そしてさういふ場合にいつも見るやうに、それは軋轢と紛擾を惹起したのだ。

中央委員會が戦略上の意見の相違によつて分裂したのは、二つの場合においてであつた。言ひ換へると、そこにあつた主要な戦線の數だけ、意見の不一致があつたのだ。こゝでは私は、それらを非常に簡単に取扱ひ、軍事指導部に現れて來た問題の本質を讀者に紹介し、同時に、その後私について發

明されたものを、ついでに、暴露することしか出来ない。

中央委員會における最初の激しい争論は、一九一九年の夏、東部戦線の形勢に關聯して起つた。當時の總司令官は、スウイヤーツースクの章で述べたヴェツエチスであつた。私は、ヴェツエチスをして彼自身と、彼の權利と、且つ彼の權威とを確保せしめる方向へと、私の努力をむけた。これがなければ、司令は不可能だ。ヴェツエチスの見解では、コルチャツクに對して我々が大成功を収めた後では、東部へ、ウラルの他の側面へ、餘りに遠く衝き進むことを差控へるといふのだ。彼は冬の間東部戦線を山嶽の手前に停めようとしてゐた。これによつて我々は、東部から數箇師團を引き戻し、それを當時デニキンがますます危険なものとなつてゐた南部へ振り向けることが出来るであらう、といふのであつた。私はこの計畫を支持した。しかしこれは、東部戦線の司令官で、曩にツアーの軍隊の參謀本部附の大佐であつたカメネフ、ならびに軍事會議の二人の委員、即ち共に古いボリシエヴィキのスマルガとラシエヴィツチから、猛烈な反對をうけた。コルチャツクはすつかり敗北してしまつたのであるから、彼を追撃するにはほんの少數の兵力で足りる、この際最も重要なことは、彼が息をつく合間を得るのを阻止することだ、といふのは、もしその合間を得れば、彼は冬の間勢力を回復し、我々は春になつて再び全部新たに東部の軍事行動をやり始めなければならぬだらう、と彼等は主張した。だから問題の全體は、コルチャツクの軍隊及びその後陣の條件をどう正しく評價するかにかゝ

つてゐた。その時ですら私は、南部戦線をもつて、東部戦線よりも遙かに重要で、且つ危険だと考へてゐた。後になつてこれの正しかつたことが、十分に確證された。

しかしコルチャツク軍の評価では、東部戦線の司令官のそれの方が正しかつたことが證明された。中央委員會は、最高司令部に反對の決議、したがつて私にたいする反對の決議を採用した。といふのは、私は、この戰略的方程式には若干の不明な點があるけれども、重要な、知れ渡つた性質の一つは總司令官のまだ新しい權威を維持することの必要であるといふ理由で、ヴェツエチスを支持したからだ。中央委員會の決定の正しかつたことが分つた。東部軍隊は南部戦線のために若干の軍隊を割き、同時に、コルチャツクを追撃して、シベリヤの中央までその進軍をつゞけた。このために最高司令部に移動が齎らされた。ヴェツエチスは罷免され、カメネフが彼の後を襲つた。

意見の相違は、そのものとしては、實際的性質のもので、もちろんレーニンと私との間柄に、微塵も關係のあるものではなかつた。だがこれらの小さな挿話的な意見の相違のなかゝら、隱謀はその網を織りつゝあつたのだ。一九一九年六月四日、スターリンは南部から書簡を送り、軍事的指導の危険なることを述べてレーニンをおびやかさうとつとめた。『現在の全問題は』と彼は書いた、『中央委員會が妥當な結論を引出すに足る勇氣を見出し得るかどうかに在る。中央委員會は、十分な資格と處断をもつてゐるか？』この文章の意味は、まづたく明瞭だ。その文章の調子は、これまでスターリ

ンが一度ならずこの問題を提起し、ちやうどその度數だけ、レーニンの反對に會つたことを、證明してゐる。私はその時、この凡てを全く知らなかつた。しかし私は、何等かの隱謀が進行中であると感じてゐた。さういふ時間もなく、それに立入り度くもなかつたので、私は中央委員會へ辭職の申出をなし、それでその隱謀をお終ひにさせようとした。七月五日附で、中央委員會は次のやうに答へて來た。

『中央委員會の組織及び政治部局は、同志トロツキイの聲明を審議し、十分にそれを討議した上で、満場一致をもつて次の結論に到達した。即ち同志トロツキイの辭職を承認し、彼の要請を容れることは、到底不可能である。中央委員會の組織及び政治部局は、現在最も困難、危険、重大であり、且つ同志トロツキイが自らそこで活動することを選んだ南部戦線における仕事をして、彼にとつて最も都合よく、共和國にとつて最も有利にするために、その權能内のあらゆる努力を致すであらう。同志トロツキイは、軍事人民委員及び革命軍事會議の議長たる資格において、南部戦線の革命軍事會議の一員として、同戦線の司令官——彼が自ら推薦し、それに従つて中央委員會が任命したる——と共力して行動する十分なる權能をもつてゐる。中央委員會の組織及び政治部局は、同志トロツキイにたいして、軍事的見地から同戦線を改善するものと彼の認めた一切のものを確保するために、凡ゆる手段

を使用し、且つ彼の希望する場合には、黨大會を召集する全權能を附與するものである。レーニン、カメネフ、クレスチンスキー、カリーニン、セレブリヤコフ、スターリン、スタソヴァ。』

この決議には他の人々とまじつてスターリンの名が記されてゐる。スターリンは、舞臺裏で隱謀を行つて居り、勇氣と確乎さに缺けてゐるとしてレーニンを攻撃してはゐたが、中央委員會にたいして公然と反對するだけの精神を持つてゐなかつたのだ。南部戦線は、すでに述べたやうに、内亂において主要な地位を占めた。敵の兵力は、二つの獨立な部分から構成されてゐた。コサツク兵——特にクーバン地方において——と、全國に互つて徵集された義勇兵白軍がそれだ。コサツク兵は、勞働者及び農民の攻撃から、彼等の境界を防禦しようと熱中してゐた。義勇軍はモスコウを占領しようと熱中してゐた。これら二つの軍隊は、義勇軍が北方コーカサスにあるクーバン・コサツク兵と共同戦線を形ちづくつてゐた間だけ、その利益が一致した。しかしデニキンは、コサツク兵をクーバンの彼等の地方から連れ出すことは、非常に困難であり、事實不可能であることを知つた。我々の最高司令部は、その社會的基礎を無視して、抽象的戰略の一つとして、南部戦線の問題に近づいた。クーバン地方は義勇軍の主要な根據地であつた。したがつて最高司令部は、ヴォルガからその根據地に向つて決定的の攻撃を加へることに決定した。その理由は、デニキンをして彼の諸軍隊をひきゐてモスコウに急進

し、そこに到達しようを試みさせよ、その間に我々は、彼の背後で彼のクーバン根據地を掃蕩するであらう、その時にはデニキンは空中に浮き上つてしまひ、我々は素手で彼を捕へることが出来るであらう、といふのだ。これが一般的な戰略的計畫であつた。もしそれが内亂でなかつたら、この計畫は正しかつたであらう。しかし實際の南部戦線へそれを適用した時、その計畫が單に理論上のものであることが説明され、大いに敵を助けたのだ。デニキンは曩にコサツク兵を説いて、北部への長い進軍につれ出すことに失敗したが、一方いま彼は、南方からコサツクの巢窟に加へた我々の攻撃によつて、助けられた。この攻撃の後、コサツク兵は最早彼等自身の土地で、自身を防禦することは出来なかつた。そして我々は我々自身で、コサツク兵の運命と義勇軍の運命とを結びつけたのだ。

我々は、我々の行動、及び軍隊と技術的手段の集中に向つて、注意深い準備をしたに拘らず、何等成功しなかつた。コサツク兵はデニキンの後陣にあつて恐る可き保障を形ちづくつた。彼等はその土地に根を下したやうに見えて、四肢と齒でそこにしがみついた。我々の攻撃はコサツクの全人口を驅り立てた。我々は、時間と勢力を費しつゝ、唯ひとへに、武器を執る能力のある一切のコサツク人を眞直に白軍へ追ひやる事をしてゐたのだ。その間にデニキンはウクライナを掃蕩し、彼の兵力を満し、北方に進軍し、クルスクとオロルを占領し、チュラを脅かしてゐた。チュラが陥落すれば、それは一つの破局であつたらう。といふのはそれには小銃及び彈藥製造工場の損失が伴つたであらうから。

最初から私の主張した計畫は、それと正反對なものであつた。私は、我々の最初の攻撃で義勇軍をコサツク兵から切離し、コサツク兵はそのまゝにして置いて、我々の全兵力を義勇軍に集中することを要求したのだ。この計畫によると、攻撃の主要方向はヴォルガからクーバンに向つてはなくて、ヴオロネツからカールコフ及びドンネツ地方に向ふことになる。國土中で北部コーカサスとウクライナとをわかつこの部分では、農民と労働者とは全部、赤軍に味方してゐた。この方向に進んだら赤軍はバタヘナイフを刺すやうに行動したであらう。コサツク兵は、他國人の侵攻から彼等の境界を護衛するために彼等の場所にとゞまつて居り、我々は彼等に手を觸れなかつたであらう。コサツク人の問題は、本質上軍事的よりは寧ろ政治的な、一箇の獨立な問題となつたであらう。しかし第一に、戦略としてのこの問題を、デニキンの義勇軍の打破から切離すことが必要であつた。最後に、結局採用されたのはこの計畫であつた。が、それはデニキンがチュラを脅かし始めて後のことであつた。——チュラを失つたら、その損失はモスコウを失つたよりも一層危険であつたらう。我々は、數箇月を浪費し、多くの不必要な損害をうけ、數週間極めて恐怖すべき日々を送つたのだ。

序でに私は、次のことを指摘しておかなければならぬ。南部戦線に就ての戦略上の意見の相違は、農民の評価または『過小評價』の問題と、極めて密接に關係してゐた。私は、一方農民及び労働者と他方コサツクとの關係を土臺として、私の計畫を打ち擧げて、この論點の線に沿つて、最高司令部の

カデミツクな計畫——それは中央委員會の大多數の支持をうけた——に、私自身の計畫を對置したのだ。もし私が、農民にたいする私の『過小評價』を證明するために使用された努力の千分の一を費したならば、私はジノヴィエフ、スターリン及び爾餘の者にたいしてのみでなく、同じくレーニンにたいして、まさに同じやうな虚妄な非難を構へることが出来たのだ。

戦略的性質をもつた第二の紛擾は、ユデニツチのペトログラード攻撃に關聯して起つた。この出来事は前々の章に描かれてゐるから、こゝに繰返す必要はない。たゞ次の事を附け加へておかう。レーニンは、南部——そこから主要な脅威が向けられてゐた——の極めて重大な情勢に影響され、またユデニツチの軍隊が異常に立派な技術的準備をもつてゐるとのペトログラードからの報道に影響されてペトログラードを抛棄して戦線を短縮する必要があると信じ始めた。ジノヴィエフ及びスターリンが、レーニンに反對の私を支持したのは、おそらくこの時だけだつたらう。レーニン自身は數日後に、彼の明かに誤れる計畫を抛棄してしまつた。

最後の意見の相違、そして疑ひもなく凡てのうちで最も激烈なそれは、一九二〇年の夏、ポーランド戦線の運命に關して起つた。當時のイギリス首相ボーナー・ローは、下院において、フランスのコミニュニストに與へた私の書簡を引例して、我々に一九二〇年の秋にポーランドを紛碎する意嚮の實際だとした。同じやうな斷定が、ポーランドの陸軍大臣故シコルスキの著書のなかにも見出さ

れるが、こゝでは一九二〇年一月のインターナショナルの大会での私の演説を引いて、それが支持されてゐる。この凡てはピンから切りまで、單なる譎語にすぎないものだ。もちろん私は曾つて、ピルススキーのポーランド、即ち、憂國的言辭と英雄的馱法螺吹に覆れた壓制と抑壓のポーランドに對して、私の好意を表したことは無い。ところで、ピルススキーによつて我々に戦争が強制された場合、我々は中途半端で停まらうとはしないだらうといふことを示すために、私の言説の若干を拾ひ上げることは容易であらう。さういふ言説といふものは全部の道具立ての結果であつたのだ。しかしこれからして、我々がポーランドとの戦争を欲してゐるとか、又はその準備までしてゐるとか言つた結論を引き出すのは、事實と常識とを無視して、嘘をつくものだ。我々はその戦争を避けるために、あらゆる努力を拂つた。我々はこの目的を達成するためにいかなる手段もおしまなかつたのだ。シコルスキーは、我々が異常に『怜悯』に平和の宣傳をやつた事を、承認してゐる。もつとも彼は、その怜悯さの祕密は非常に單純なもので、たゞ我々が最大の讓歩の犠牲を拂つてゝも平和を確保しようと、全力を傾けて努力してゐた點にあるといふことは、これを理解してゐないし、また理解してゐるとも揚言してゐない。おそらく他の何人にも優つて、私はこの戦争を欲しなかつた。といふのは、三年間の止むことなき内亂の後で、それを遂行することがいかに困難なことか、私は餘りにもはつきりとしてそれを知つてゐたからに過ぎない。我々が平和を保有しようとする不屈不撓の努力——その努力は我々の外

交政策をして忍耐と教授法的執拗の組合せたらしめた——を拂つたにも拘らず、ポーランド政府はシコルスキーの書物が明白にしてゐるやうに、意識的に、決心を定めて、戦争を始めた。我々は眞摯に平和を欲した。ピルススキーは我々に戦争を課した。我々が戦争を敢てすることが出来たのは、ただひとへに人民の大衆が我々の外交的決闘を眼を離さずにつと見てゐて、我々は戦争を強要されたのだといふことを徹底的に確信したからだ。この點で彼等は絶対に正しかつた。

ロシアは一つのこれまでよりも一層眞實に英雄的な努力をした。ポーランド軍のキエフ占領は、それ自身では何等軍事上の意味はもつてゐなかつたが、我々にたいして一つの大きな奉仕となつた。即ちそれはロシアの眼を醒したのだ。ふたゞび私は、人々及び物資を動員し、諸軍隊と諸都市を歴訪しなければならなかつた。我々はキエフを奪還した。それから我々の勝利が始まつた。ポーランド軍は恐ろしい速さで潰走した。その速さは私の曾つて豫期しなかつたもので、ピルススキーの軍事行動の根底に實際に横たはつてゐたものが、單なる蠻勇であるとは、私は信することが出来なかつたからだ。然し我々の側にも亦、最初の大きな勝利の後をうけて、我々の前に開けてゐる成功の可能性の觀念が、大いに誇張されたのだ。防禦戦争として始まつたこの戦争は、攻撃的・革命的戦争に轉化されなければならぬといふ見解が、次第に擡頭し、勢力を得はじめた。原理的には、もちろん、私はさういふ行き方にたいして、何等反對を加へることは出来なかつた。が、問題は單に、勢力の相互關係の

問題であつた。ポーランドの農民及び労働者の態度は未知量であつた。我々のポーランドの同志の或る人々、たとへばローザ・ルクセンブルグの共働者の故ジェー・マカーレウスキーの如きは、情勢を非常に冷静に評量した。出来るだけ速かに戦争から抜け出ようとの私の欲求には、マカーレウスキーの評價が重要な要素となつたのだ。しかしまたそこには他の聲もあつた。ポーランド労働者の蜂起についての高い期待があつた。とにかくレーニンは、ポーランドの労働者を助けて、ピルスドスキー政府を顛覆させ、権力を奪取させるために、戦争を最後まで押し進め、ワルソウの入口まで迫ることに決心したのだ。政府の決定と見られたこの見解が、最高司令部及び西部戦線の司令部の想像を容易に捕へてしまつた。私がモスコウへ定時的の訪問をした時に、輿論が強く『最後まで』戦争を押し進める方へ傾いてゐたのを、私は發見した。これにたいして私は絶対に反對した。ポーランド人はすでに平和を求めてゐた。我々は我々の成功の頂上に達してゐる、そこでもし我々が、我々の勢力を誤斷して、この上進んで行くなれば、我々は既に得られた勝利を乗り越えて、敗北に赴く危険を冒すであらう、と私は考へたのだ。第四軍團が物凄い努力をして、五週間にやつと六百五十キロメートルを進軍し得た後では、同軍はたゞ墮力で前進し得るに過ぎなかつた。萬事は精力にかゝつてゐた。そしていまその精力は細い糸でしかなかつた。我々の戦線を動搖せしめ、我々の未曾有の攻撃的突進——フオツシユですらこれを認めざるを得なかつた——を、一つの難局たる可き敗北に轉化せしめるには、一回の強烈な打撃で十分であつたらう。私は、軍隊が餘りにも疲弊しない以前に、即時に媾和を締結すべしと要求した。私を支持したのは、いま想ひ出し得るかぎりでは、リユーコフだけであつた。爾餘の凡ての人々は、私のゐない間に、レーニンによつて獲得されてゐた。かくて攻撃の繼續が決定された。

247

ブレスト・リトウスク時代と對照して見ると、役割が全く逆になつてゐた。その時、媾和の調印を遅延させること、領土の或るものを失ふ犠牲を拂つても、ドイツのプロレタリアートに情勢を理解し、その言葉にしたがふ時間を與へることを要求したのは、私であつた。ところがいま、我々の軍隊が前進をつゞけ、ポーランドのプロレタリアートに情勢を正しく評價して、武器をとつて立つ時間を與ふることを要求したのは、レーニンであつた。ポーランド戦争は、さきにブレスト・リトウスク闘争によつて明示されたものを、反對の側から確證した。即ち、戦争の事相と革命的大衆運動の事相とは、別箇の尺度で測定されるものである。軍隊の行動は、何日何週間を尺度として測定されるが、人民の大衆の運動は通例、幾月幾年を尺度として測定される。もしこのテンポにおける相違が十分に計算に入れられないならば、戦争の齒車は、革命の齒車に運轉を起させる代りに、その齒を破壊するに過ぎぬであらう。とにかくそれが、短いブレスト・リトウスクの闘争において、且つ大きなポーランドの戦争において、實際おこつたことなのだ。我々は我々自身の勝利を乗り越えて、ひどい敗北へと赴い

た。

ワルソウを前にしての破局が異常に重大なものとなつた理由の一つが、ルヴオフ（レンベルグ）の方向に行動してゐたソヴェット軍隊の南部グループの司令官の行爲であつたことは、これを注意しておかなければならぬ。このグループの革命軍事會議の主なる政治的立物は、スターリンであつた。スターリンは、スミルガ及びツカーチエウスキーがワルソウに入ると同時に、どんな犠牲を拂つてもルヴオフに入り度いと願つてゐた。或る人々はさういふ野心すら持つことが出来るものだ！ ツカーチエウスキーの配下の軍隊に迫つてゐる危険が、すつかり暴露され、最高司令部が南西諸軍にたいして、彼等の進軍の方向を變更して、ワルソウ前のポーランド軍の側面を攻撃するやうにと命令した時南西軍司令部は、スターリンに慫慂されて、西方への前進を繼續したのだ。この軍隊が『他』を助けてワルソウを占領することが重要であると同じに、彼等自身ルヴオフを占領することも同様に重要ではないか？——これがスターリンの慫慂であつた。繰返し命令され、威嚇された後始めて、南西軍司令部はその前進の方向を變更した。しかし數日の遅延は、すでにその致命的な結果を生んでゐた。

我々の軍隊は四百キロメートル乃至それ以上退却した。前日の輝かしい勝利があつて後、何人もこの情勢にあきらめることが出来ないであらう。ウランゲルの戦線から歸還すると、私はモスコウが第二ポーランド戦争に賛成してゐるのを發見した。こんどはリュウコフですら、その方の陣營に移つて

ゐた。『一度出發したら、』と彼は言つてゐた『我々は最後までそれをやり通さねばならぬ。』西部戦

線の司令部はこの希望を鼓舞し、十分な豫備軍は到着した、砲兵隊は準備が成つた、等々と言つてゐた。希望は思想の父であつた。私は答へた。『我々は西部戦線で何を持つてゐるのか？ たつた今その中へ粗末な人間の捏粉を流し込んだばかりの、精神的に敗北した部隊だけだ。そんな軍隊で戦争することは出来ない。いやもつと正確に言へば、かういふ軍隊を以つては、一方退却して、後陣に新しい軍隊を準備する防禦行動はやれるかも知れない。しかしさういふ軍隊が、それ自身の破片の撒き散らされてゐる道路に沿つて、勝利的な前進をするやうに己れを高め得ると考へるのは、馬鹿げたことであらう。』私は、すでに犯された過誤の繰返しは、我々に十倍も犠牲をはらはせるであらう、現に提案されてゐる決定には私は服さず、黨にたいして訴へかけるであらう、と宣言した。レーニンは正式には戦争の繼續を擁護したが、こんどはそれをするに當つて、まへのやうな自信と執拗さをもつてゐなかつた。平和締結の必要にたいする私の動かし難き確信は、手酷しいものではあつたが、レーニンに感銘を與へた。彼は、私が西部戦線を訪問して、退却後のわが軍の情勢について直接の印象を得て来るまで、この問題の決定を延期しようと提議した。私にとつては、これはレーニンがすでに私に賛成したことを意味した。

私は、戦線の本營が第二の戦争に賛成なのを發見した。しかしそこには自信がなかつた。それはた

だモスコウの態度の反映でしかなかったのだ。軍隊の階梯を、軍團から師團へ、聯隊へ、大隊へと下るにしたがつて、私は攻撃戦争の不可能を理解した。私は、視察して廻りながら、寫しもとらないで手記して、そのことを手紙にかいてレーニンに送った。戦線で二三日送つただけで、私がモスコウから携へて来た結論の正しさを確認するに十分であつた。私はモスコウへ歸り、ポリトビュローは殆ど満場一致で、即時平和に賛成の決議をした。

ポーランド戦争中の戦略的計算における過誤は、大きな歴史的結果をもつた。ピルスドスキーのポーランドは、豫期しないほど力を得て、戦争からぬけ出て来た。これに反して、ポーランド革命の發展は手痛い打撃をうけた。リガ條約によつて設定された國境は、ソヴェット共和國をドイツから切離したが、この事實は後になつて兩國の生活の上に大きな意味をもつたものであつた。レーニンは、もちろん、他の何人よりもよく『ワルソウ』の過失の意義を理解し、一度ならずそれを思想及び言葉に表した。

亞流共の文獻では、レーニンはいまや、スーズダルの聖像畫家がクリスト及び聖徒を描くのとほぼ同じやり方で、描かれてゐる。すなはち理想的な影像の代りに、諸君はそこにカリカチュアを見るのだ。聖像畫家達は彼等自身より高く昇らうと大いに努めるが、結局彼等自身の趣味を反映するに過ぎず、その結果、彼等自身の理想化された肖像を描かざるを得ない。亞流共の指導權の權威は、人民に

その無誤謬性を疑ふことを禁ずることによつて維持されてゐるのであるから、したがつてレーニンは亞流共の文獻のうちでは、情勢の評価において天才を示したところの一個の革命的戰略家として、なく、失敗のない決定を與へる自動機械として、説明されてゐる。レーニンに關して天才といふ言葉を初めて適用したのは私であつて、それは他の人々がそれを口にする勇氣のなかつた時のことなのだ。然り、レーニンはおよそ人間があり得る最も大きな天才であつた。しかし彼は、何等の過失も犯さない自動計算器ではなかつたのだ。彼は、他の何人か彼の地位にあつたならば犯したであらうところよりも、過失を犯した度合は尠なかつた。だが、彼もやはり過失を犯した。そして彼の仕事の一切が巨人的に廣大であつたのに應じて、重大な過失も犯したのだ。

第十三章 新經濟政策への移渡、及びレーニンと私との關係

いま私は、レーニンと私の共働の最後の時期に近づいてゐるが、この時期は、亞流共のその後の勝利の基礎がそのなかにふくまれてゐるので、したがつて一層重要な意義を導いて來る時期だ。レーニンの死後、我々の相互關係の歴史を歪曲するだけの目的でもつて、歴史や文獻を取扱ふひとつの複雑な、多くの部門をもつた組織がつけられた。その目的は、主として、二つの『原理』の間の不斷の闘争を描き出すことによつて、我々の意見が相違した諸瞬間を過去から切離すことによつて、個人的争論的表現から澤山のものを取り出すことによつて、就中、單なる發明によつて、達せられて來てゐるのだ。中世の辯護派アポロジストの書き下した教會史は、亞流共の歴史的研究と比べると、科學的取扱の典型だ。彼等の仕事はまた次の事實によつて多少容易にされたのだ。私はレーニンと意見を異にした場合にはそれを公然と發表し、必要と思つたときには、黨に訴へようとした。然るに亞流共は、レーニンと意見が相違した場合——私の場合よりも遙かにその度合が多かつたのだ——には、いつもそれについて口を噤んでゐるか、または、スターリンのやうに、拗ねて、モスコウ近くの何處か田舎へ數日隠れてしまつた。

多くの場合、レーニンと私とがお互ひに獨立で到着した決定は、本質に於て同一なものであつた。いつもちよつと言葉を交したゞけで、お互ひの諒解がもたらされた。私は、ポルトビュローロポルトビュローロか又は人民委員ソヴェットの決定が誤りを惹起すと考へると、紙片に短いノートをかいてレーニンに送つた。彼はいつも答へた。『絶対に正しい。君の提議を出してくれ給へ。』時々彼は、私が彼の提案に賛成するかどうかと問うた質問や、彼を支持して演説して欲しいといふ要求を、私に送つて寄こした。また時々彼は、電話で或る問題の處理について私と打合せ、それが重要な問題の場合には、『きつと間違ひなく來てくれ給へ』と念を押した。我々が相携へて仕事をしてゐた時——原則上の問題にはいつものことだつた——には、決定に不満な人々、彼等の間の現在の亞流共は、沈黙してゐた。幾度かスターリン、ジノヴィエフ又はカメネフは、非常な重要な問題で、私と意見を異にしたが、レーニンも私と同様な意見だと知るとすぐに、彼等は沈黙のうちに消えた。我々は、『弟子達』がどんな仕方でもいつもレーニンの觀念に賛成して、彼等自身の觀念を抛棄する用意のあつたのを認めてよからう。が、この用意のあつたことは、レーニンがなくても彼等が同じ結論に到達することが出來たのだといふ證左を、毫もふくんでゐないのは明白だ。この書物では、レーニンと私の意見の相違が、實際には決して持つてゐなかつた重要さを持つてゐる。これには二つの理由がある。我々の意見の相違は例外的であり、さういふものとして注意を惹いたことだ。レーニンの死後、その相違が亞流共によつて、

天文学的の大きさに擴大され、我々の誰とも何等關係のない獨立の政治的要素となつたことだ。

私は、特別の一章を設けて、ブレスト・リトウスク媾和についてのレーニンと私の意見の相違を詳細に述べた。いま私は、一九二〇年の末、即ち新經濟政策への移渡の正にその直前に、數箇月の間お互ひを隔てゝゐた他の意見の相違について述べよう。

所謂労働組合に關する討論が、ある期間、我々の關係を曇らせてゐたのは、これを拒むことは出来ない。我々はいづれも、餘りにも革命家的であり、餘りにも政治家であつたので、個人的なものを一般的なものから切離すことが出来なかつたし、また切離したいと思ふことすらなかつた。スターリンとジノヴィエフとが、私にたいする彼等の鬭争を明るみに持ち出して來ることのできる、彼等にとつて合法的な機會とも呼べるべきものを與へられたのは、この討論の間であつた。彼等はこの形勢を十二分に利用しようとあらゆる努力を傾けた。それは彼等にとつては、『トロツキイズム』にたいする彼等の未來の反對運動の下稽古だつたのだ。だが、レーニンを最も悩ましたのは、まさにこの事態だつたので、彼はあらゆる仕方ですれを消してしまはうと試みたのだ。

この討論の政治的内容は、その上に非常に澤山の糟滓が積みあげられてゐる。だから私は事象の眞相に觸れようと努める未來の史家を羨まない。その出來事のすつと後、即ちレーニンが死んで後、亞流共は、當時の私の建前が『農民の過少評價』のそれであり、新經濟政策にほとんど敵對的なそれで

あるのを發見した。これが、實際に、その後私に加へられた一切の攻撃の基礎であつた。事實においては、もちろん、討論の根柢は全く反對のものであつたのだ。この事實の眞相を明かにするために、私は少しばかり後戻りしなければならない。

一九一九年の末、即ち我々の機關車の六割が『病氣』になつてゐた時、一九二〇年の春までには、この數字は不可避的に七割五分に昇るだらうと、考へられてゐた。それが我々の最も優れた専門家の公の意見であつた。さういふ状態では、鐵道輸送は無意味なものになりつゝあつた。といふのは、汽車の燃料には巨きな木材が使用されてゐたので、半ば健康状態にある残りの二割五分の機關車は、鐵道の必要物の輸送を滿たすに過ぎなかつたからだ。その當時實際上運輸組織の責任を負つてゐた技師ロモノソフは、政府のために機關車惡疫のダイヤグラムを作製した。一九二〇年中の數字を示しながら、彼は叫んだ。『死がやつて來る。』

『それならどうしたらいいか？』とレーニンが訊ねた。

『奇蹟のやうなことはない。』とロモノソフは答へた。『たとひポリシエヴィキでも奇蹟は行へない。』我々はお互ひに顔を見合つた。我々はどちらも、運輸組織の技術的作業も知らなければ、さういふ暗澹たる計算の技術的作業も知らなかつたので、なほ一層しよけてしまつたのだ。『それでも我々は奇蹟を行はうと努めて見よう。』とレーニンは冷淡につぶやいた。

だが、その後の數箇月の間、事態は絶間なく悪化して行つた。それには實際の條件にその原因が十分あつたのだ。が、或る技師達が運輸状態を彼等のダイヤグラムに副ふものとしてゐたと言つたことも、大いに在りさうなことだ。私は、一九一九年から二〇年の冬の數箇月を、經濟的な仕事を指導して、ウラルで送つた。レーニンは私に電話で、運輸の衝に當つて、非常手段でそれを引上げて欲しいと提議して來た。私は承諾の旨を答へた。

私は、ウラルから一山ひとやまの經濟的觀察の材料をもつて來たが、それは、戰時共產主義はこれを拋棄せぬばならぬ、といふ一般的結論に概括され得るものであつた。私の實際的な仕事が飽までも私に教へたところによると、内亂の條件によつて我々に強制された戰時共產主義の方法は、完全に使ひつくされてしまひ、我々の經濟生活を再生せしめるためには、どんな犠牲を拂つても、個人的利益の要素を導き入れなければならぬ、言ひ換へれば、我々は或る度合まで内國市場を回復しなければならぬのだ。私は中央委員會にたいして、食料徵發に代ふるに穀物税をもつてし、商品の交換を回復するの計畫を提出したのだ。

『食料計畫にもとづく平等徵發、交附の相互責任、及び製造産物の平等分配の現在の政策は、農業の狀態を低下し、工業プロレタリアートを分散せしめる傾向を持ち、國家の經濟生活を完全に破壊する危険をもつてゐる。』この言葉で、私は一九二〇年二月中央委員會に提出した聲明のうちに、私の見

解を表式化した。

その聲明書はなほ言をつゞけて言つた。『食料の源は枯渇するの危険にあり、これは徵發方法をいかに改善してもこれを阻止することは出来ない。これらの傾向は、次のやうにしてこれを防ぐことが出来る。(一) 剩餘物の徵發は、比率的基礎にもとづく支拂(現物をもつてする一種累進所得税)に代へられなければならず、その支拂の大きさは、耕作地面を増加させ又は一層良好なる耕作を促し、なほその上若干の利益を生ぜしめるが如き方法をもつて、確定されなければならぬ。(二) 農民に供給される工業産物と、農民が提供する穀物の量との間に、より一層密接な關係を樹立しなければならぬ。而してこのことは、農業地域(ヴォロスト)及び村落に適用されるのみでなく、同様に箇々の農家に適用されなければならない。』

その提議は非常に警戒された。だがそれから一箇年後に採用された新經濟政策の基礎的な主題は、最初にはそれから一步も出たものではなかつた。一九二〇年の初期には、レーニンは斷乎として私に反對した。その提案は、中央委員會において、四對十一で否決された。その後の事態の行程は、同委員會の決定の過誤であることを證明した。私はそれを、戰時共產主義のスローガンの下に飽まで指導されてゐた黨大會へは持ち出さなかつた。その後まる一年の間、國家の經濟生活は袋小路に沿つて藻掻いた。レーニンと私との喧嘩は、この袋小路から生じたのだ。市場制度への變移が否決された時、

私は、『戦時』的方法が適當に、體系的に適用され、かくて眞の經濟的改善が獲得され得るやうにされんことを要求した。一切の資源が、尠くとも原理的には、國有化され、政府の命令によつて分配されてゐる戦時共產主義にあつては、労働組合の獨立の役割はまつたく無いと私は觀察した。産業が、労働者にたいする一切の必要な生産物の供給を國家で保證する制度の上に立つてゐるならば、労働組合は、國家による産業及び生産物の分配の統治組織に含まなければならない。これが、労働組合をして國家組織の一部たらしめようとする問題の眞の本質であり、それは戦時共產主義から何としても従つて生ずる手段であつて、私がそれを擁護したのもその意味においてであつたのだ。

第九回大會によつて承認された戦時共產主義の原理は、運輸の組織における私の仕事の基礎であつた。鐵道従業員の労働組合は、その部門の行政機關と密接に結びつけられてゐた。軍隊的規律の方法が、全運輸組織に擴張された。私は、當時の最も強く、最も立派に規律の立つた軍事行政を、運輸行政に密接に關聯させた。このことは、特にポーランドとの戦争が始まつて、軍事輸送が第一に重要なものとなつたので、或る重要な利益をもたらした。毎月毎月私は、その動作が鐵道を破壊してゐた軍事人民省から、運輸人民省に赴き、そこで鐵道を徹底的な崩壊から救ふばかりでなく、それを一層高い能率の水準に引上げようと努力した。

運輸上の仕事の一箇年は、私にとつて學校の一箇年であつた。經濟生活の社會主義的組織の一切の

基礎的な問題は、運輸の領域において、その最も集中的な表現を見出した。機關車及び列車の型に非常に相違のある事は、鐵道及び修繕工場の仕事を複雑なものにした。革命前に、國家と同時に個人會社によつて管理されてゐた運輸組織を規格統一化するために、廣汎な準備作業に着手された。機關車はその等級によつて分類され、その修繕は一層系統的に組織され、且つ修繕工場はその技術的能力を基礎として正確な命令をうけ始めた。運輸を戦前の標準に引上げるプログラムは、四箇年半の間に實現されなければならなかつた。採用された手段は立派に成功したものであつた。一九二〇年の春及び夏に、運輸組織はその麻痺状態から回復し始めた。レーニンは鐵道の回復を公言する機會を、決して逸しはしなかつた。我々の運輸組織が崩壊するだらうとの見込で、ピルスドスキーの始めた戦争が、所期の結果をポーランドに齎らさなかつたとすれば、それは、鐵道輸送の表線が確實に向上し始めたからであつたのだ。これらの結果は、運輸組織の由々しい状態、ならびに戦時共產主義そのもの、體系から、不可避的に生じた、異常な行政的手段によつて達成されたのだ。

だが、三箇年の内亂を通つて來た労働階級は、軍隊的法則によるやり方に服従することを、ますます嫌つて來てゐた。レーニンは、彼の誤らざる政治的直覺をもつて、危機的なモメントが到着したことを感得した。私が、戦時共產主義を基礎として、純粹な經濟的考量に立つて、労働組合から更に一層の緊張した努力すら得ようとしてゐた間に、レーニンは、政治的考量に導かれて、軍隊的壓力

の緩和の方へ動いてゐた。第十回大會の直前、我々の方向は正反對的に交叉した。討論が黨内に燃え上り、それは實際上、論點を離れてゐた。黨は、労働組合がどれだけの場合まで、國家機構の一部に轉化さる可きであるか——それを審議してゐたが、當面の問題は、實際には、工業のための日々の麩包、燃料、原料の問題であつたのだ。黨は『共產主義の學校』について熱病的に論議してゐたが、實際に重要な事柄は、全國をおびやかしてゐる經濟的破局であつたのだ。クロンスタット及びタンボフ地方の叛亂は、最後の警告としてこの討論のなかへ闖入して來た。レーニンは、新經濟政策への變移についての、最初のテーゼを作製し、それが非常に一般から警戒された。私は直ちにそれに署名した。私としては、それは、一年まへに私の提起した提案の更新に過ぎなかつたのだ。労働組合についての爭論は、たゞちに一切の意義を失つた。その大會では、レーニンはその爭論において何等の役目も演ぜず、ジノヴィエフをして、爆發してしまつた彈藥筒の脱殻を弄ぶに委せた。大會の討議の間、私は、大多數によつて採用された労働組合についての決議は次の大會までは生命がないであらう、といふのは、新たな經濟的動向が労働組合戰略の完全な修正を要求するであらうから、との警告を與へた。而してレーニンが新經濟政策を基礎とした、労働組合の役割及び目的に關する全然新たな原則を表式化したのは、それから僅か數箇月後のことだつたのだ。私は、彼の決議案にたいして、心からの賛成を表明した。我々の固い戰線は回復された。レーニンは、二箇月の間つゞいた討論の結果とし

て、黨内に恒久的な分派が樹立され、諸關係を一層むづかしいものにし、仕事を遙かに困難なものにしはしまいかと惧れてゐた。

しかし私は、大會の開會中労働組合問題について私と見解を同うした人々との一切の協議を打ち切つてしまつた。大會から數週後には、レーニンは、私が彼と同様熱心に、もはや原理的に何等の基礎も持つてゐない一時的の諸分派を一掃してしまひたいと願つてゐることを、確信した。レーニンはあたかも彼の胸から重いものが取除かれたやうに感じた。彼は、中央委員會員に選舉されたばかりのモロトフの或る鐵面皮な言辭をとらまへ、それを利用して、理性よりも情熱をもつて、モロトフを攻撃し、そこで附け加へた。『黨關係における同志トロツキイの忠誠は、絶対に非難すべからざるものだ。』彼はいく度もそれを繰返した。かうして彼が、モロトフばかりでなく同時に他の者を押し返してゐたことは明かであつた。といふのはスターリンとジノヴィエフが強ひてこの爭論の雰圍氣を長引かせようと骨折つてゐたからだ。

この第十回大會で、ジノヴィエフの發議で、且つ全くレーニンの意志に反して、スターリンが黨の書記長の地位の候補者として推薦された。大會は、彼が全中央委員會の支持をうけてゐるものと信じた。しかし誰一人として、この任命に大きな意義を附したものはなかつた。レーニンのもとにあつたは、第十回大會で設置された書記長の地位は、政治的でない、單なる技術的な性質しか持つことが出

來なかつたのだ。それでもなほレーニンは杞憂した。『このコックは胡椒の利いた料理しか拵へないだらう。』と、彼はスターリンについてよくさう云つた。大會後の中央委員會の最初の會合の一つで、レーニンが執拗に『トロツキイの忠誠』を誇張して言つたのは、そのためだつたので、それは地下の隠謀にたいする一撃だつたのだ。

レーニンのその言葉は決して偶然なものではなかつた。内亂中、レーニンは私にたいする彼の精神的信頼を、或る時言葉でなく行動によつて表現したが、それは、何人もそれ以上の信頼を求めることも出來ず、それ以上を受けることも出來ないほど、爾く完全なものであつた。その機會は、スターリンが舞臺裏で指揮した例の軍事反對派によつて、提供されたのだ。戰爭中、私は實際上、無限の權力をもつてゐた。革命裁判所は私の列車内で開會され、諸戦線は私に従屬し、諸根據地は戦線の補助となつてゐた——而して時としては、白軍によつて占領されてゐない共和國のほとんど全領域が、根據地及び要塞地域から成つてゐた。たま／＼軍隊の車輪によつて轢き倒された人々は、親類や友人を頼み、彼等はその人々を救ふために彼等に出來るあらゆる努力をした。請願、愁訴及び抗議がさまざまの通路からモスコウに集中され、別けても中央執行委員會のプレシヂエームに集中された。

この種の最初の挿話は、ずつと前のスヴィヤーツースクの時期に起つた出來事に、關聯したものであつた。第四ラトヴィヤ聯隊の司令官が、同聯隊をその陣地から撤退させると威嚇した廉で、私によ

つて裁判に附された出來事については、私は曩に語つた。裁判所は、その司令官に五箇年の禁錮を宣告した。數箇月後、彼の釋放を求めた請願が來始めた。スヴェルドロフにたいする壓力が特に強かつた。彼はその問題をポルトビュエローに提出した。私は、その聯隊司令官が『革命にとつて危険な結果をもたらすだらう』と言つて私を威嚇した當時の軍事的情勢を、簡単に説明した。私が説明してゐる間に、レーニンの顔色は次第に蒼白になつて行つた。私の説明が終るか終らない中に、彼は息づまるやうな嘖聲——之はいつも彼の場合興奮を示してゐた——で叫んだ。『彼をそのまゝでおけ。そこに縛つておけ！』スヴェルドロフは我々二人を凝視して言つた。『私もさう思ふ。』

第二の挿話、即ちまへよりも遙かに重要な挿話は、彼等の配下の聯隊をその陣地から撤退させ、武器で威嚇して一汽船を獲取し、ニジニ・ノヴゴロドに航行の準備をした司令官及び人民委員の射殺に關聯してゐた。その聯隊は、私の軍事政策の反對派であつて、後にその熱心な支持者となつた人々の指導の下で、スモレンスクにおいて編成されたものだ。が、その時は彼等は囂々として反對してゐた。私の要請で任命された中央委員會の調査委員は、軍事當局の措置は絶対に正しもので、情勢がそれを命令したのだと満場一致で聲明した。だが、曖昧な風説がつゞいた。私はいく度か、その風説の源はポルトビュエローから遠くはないと感じたが、餘りに忙しいので、調査もせず、隠謀の絲をほぐしても見なかつたのだ。たゞ一度、ポルトビュエローの會議で、私は、スヴィヤーツースクでの無慈

悲な手段について審議するのになかつたら、我々はこの會合を持たなかつたであらう、と述べた。するとレーニンは、『絶対に』と言つてそれを取上げ、それから人民委員ソヴィエツトの印章のある用紙の下段に赤インクで、いつも彼がやるやうに、大急ぎで何か書き初めた。レーニンは椅子についてゐた、さうして會議は終つた。二分間後彼は私にその用紙を手渡した。「次頁に掲載する」

『もし君が欲しいと思ふなら、かういふものをどれだけでも君にやらう。』とレーニンは言つた。内亂の場合のやうな、急速な、取返しのならぬ決定——その中の或るものは誤つたものであるかも知れない——をする必要のある重大な事情にある時、レーニンは、私が將來必要だと考へた如何なる決定にも、前もつて彼の署名を與へた。しかもこれらのものは、それと共に生か死かを含んでゐる決定であつたのだ。或る一人の人間の他人にたいする信頼で、これより大なるものがあり得たであらうか？この特別の文書の觀念がレーニンに浮んで來ることの出來たのは、彼が私よりも善く隱謀の源を知つてゐたか、乃至はそれを怪しいと睥んでゐて、極度に猛烈にそれを打破する必要があると考へてゐたからに過ぎない。だが、彼が敢てさういふ危険を冒すことの出來たのは、私が忠誠を缺いたり、權力を濫用したりする筈がないといふことを、彼はいかにも堅く信じ切つてゐたからに過ぎないのだ。亞流共は、彼等の所藏のなかにさういふ文獻を求めたつて、無駄であらう。もしスターリンが彼の文書綴りのなかに何ものかを見出すとしたら、それは、彼が黨から隠蔽したレーニンの『遺書』に過ぎない。

ロシア社會主義聯邦ソヴィエツト共和國

人民委員ソヴィエツト議長

モスコウ、クレムリン、

七月……一九一九年

同志諸君、

私は、同志トロツキイの命令の峻嚴な性質を知り、同志トロツキイの與へた命令の正しさ、得策たりしこと、及びその目的の達成にとつて必要であつたことを確信し——絶對にかく確信するが故に、心からこの命令に裏書するものである。

ブイ・ウリヤノフ・レーニン

いであらう——そのなかにスターリンその人のことが言及され、権力を濫用することの出来、忠誠を缺いた人間として述べられてゐる『遺書』だ。我々の各々にたいするレーニンの態度を十分に理解するためには、これら二つの文章——レーニンが私に與へた辯護の無限な精神的な力と、スターリンに向けた精神上の『狼の旅券』*とを對置するだけで十分だ。

*『狼の旅券』といふのに、ツアアのロシアで、罪人にたいして旅券の代りに發行された所謂『通過證』の綽名で、それはいつもその無宿者を何處にも長く滯留を許さなかつた。——英譯者。

第十四章 レーニンの病氣

私は一九二〇年の春、コンミニュスト・インターナショナル第二回大會の前、初めての休暇をとつて、モスコウの近郊で約二箇月暮した。私はその間、醫療（私はこの時ちやうど私の健康を重大に考へ始めてゐた。）と、宣言書——これはその後數年間、コンミニュスト・インターナショナルの綱領の代用とされてゐたものだ——の起草と、狩獵とで、日を暮した。數年の緊張のあとのことで、私は休息の必要を感じた。だが私は、その習慣をもたなかつた、そしてそこらを歩き廻ることが、當時私の休息を妨げたことは、今日よりも甚しかつた。狩獵の魅力は、塗藥が局所に作用するやうに、私の心に作用するところに在るのだ。

一九二二年五月の初めの日曜日に、私は、手網をたづさへて、モスコウ河の舊い運河へ魚取りに行つた。雨が降つてゐて、草が濡れてをり、私は辻つて、長靴の紐を切つてしまつた。それは何も由々しいことでなく、私はたゞ、數日寢床で暮さなければならなかつた。三日目にプハーリンが私を訪ねて來た。

『君も床についてゐるのか？』と、彼はおどろいて叫んだ。

『他に誰か床についてゐるものがあるのかね?』と私は彼に訊ねた。

『レーニンが非常に悪い。彼は病氣の襲來をうけてゐる。そして歩くことも、話すことも出来ない。醫師達はすつかりまごついてゐるよ。』

レーニンはいつも同僚の健康に非常な注意を示し、『年寄は死ぬだらうし、若いものはまゐるだらう。』といふ、或る亡命者の言葉を屢々口にしてゐた。

レーニンはよく言つた。『我々のうちのどれだけのものが、ヨーロッパとは何であるか、世界の労働運動とは何であるかを知つてゐるか? 革命をもつてゐるものが我々だけである間、我々の黨の上層グループの國際的經驗は、どうしてもかけ換へのないものだ。』レーニンは自身で、嚴やかな健康の持主だと考へてゐたし、その健康は革命の破壊すべからざる支柱の一つのやうに見えた。彼はいつも積極的で、潑刺として、平な氣持で、且つ快活であつた。私が容易ならぬ徵候をみとめたのは、時折のことに過ぎなかつた。コミニユニスト・インターナショナルの第一回大會の間、彼の疲れた顔色、たゞならぬ彼の聲、病人のやうな彼の薄笑ひに會つて、私は驚愕した。一度ならず私は彼に、第二義的な事柄に彼自身を費消してゐると語つた。彼はそれを認めたが、それより他には出来ないと言つた。時々彼は頭痛がすると言つて訴へたが、いつも偶發的で、ほとんど苦しんでゐなかつた。そして二三週間休息すれば、それで恢復するに十分であつた。あたかもレーニンは決して磨滅しないかのやうに思はれてゐたのだ。

一九二一年の終りに、彼の健康状態は悪化して行つた。十二月七日、彼はポルトビュローの委員にノートを送つて、『私は今日、他へ出掛ける。最近、仕事を少なくして、休息を多くとるのだが、それにも拘らず、不眠症が地獄のやうに悪くなるばかりだ。私は、黨の會議にも、ソヴェット大會にも、さつぱり報告は出来なくなるのではないかと、虞れてゐる』と言つた。レーニンは、彼の時間の大部分をモスコウ附近の村落で送り始めた。だが、彼はそこから、非常に注意して仕事の進行の工合を見守つてゐた。當時、ゼネバ會議の準備が進行中であつた。一九二二年一月二十三日、レーニンはポルトビュローの委員に書き送つた。

『私はいまちやうどチチエリンから二通の書簡を受取つた。(二十日附及び二十二日附)彼は、適當な代償を得た上で、憲法にたいする或る小さな變更、即ちソヴェット内へ寄生的要素の代表者を入れることに同意するのは、望ましいことでないかどうかと訊ねて來た。これはアメリカ人を悦ばせるのだ。チチエリンのこの提議は、私の見解では、即刻彼が養生院へ送られねばならぬといふこと、この點についての一切の讓歩、延期についての同意等が、一切の商議にたいする最大の脅威であらうといふことを、示してゐる。』政治的の無慈悲に、隠れた人の良さの加味されたこのノートの一言一言に、生きて、呼吸づいてゐるレーニンがある。

彼の健康は悪化しつづけた。三月になつて、彼の頭痛は一層頻繁になつた。彼は何等機關の故障を發見しなかつたが、休息をつゞける必要があると言つた。レーニンは、半永久的にモスコウ附近の一村落到住居を定めた。而して彼が五月初めに最初の病氣の急變に會つたのは、そこだつた。レーニンは、ブハーリンが私を訪ねて來た二日前に、病氣になつたものと見える。その時私は、何故そのことを何も聞かされなかつたのか？ 當時、私は決してそれを疑らうとさへしなかつたのだ。「僕等は君を悩まし度くなかつた。それで彼の病氣がどんな工合になるか、それを見てからと思つて待つてゐたのだ。」と、ブハーリンは言つた。ブハーリンは、「大人達」が彼を説服して信じさせたものを單に繰返すだけで、全く眞面目にさう言つてゐた。當時ブハーリンは、半ばヒステリカルな、半ば子供らしい、彼の特性的な「ブハーリン式」な仕方、私にくつついてゐた。彼は、私の寢床の上に倒れて、毛布の上から手で私のまありを押しつけて「病氣になつてくれるな、お願ひする、病氣になつてくれるな……僕がいつもその死を恐怖してゐる人が二人ある。……レーニンと君だ。」とつぶやいて、レーニンの病氣についての彼の報告を終つた。私は親切に彼を勵まして、姿勢を取直させた。彼は、彼もたらした報知の惹起した驚愕に心を集めることから、私を妨げてゐた。打撃は壓倒的であつた。あたかも革命そのものが呼吸をひそめたかのやうであつた。

『レーニンの病氣についての最初の噂は』と、エヌ・アイ・セドローヴァは彼女のノートの中に書いてゐる。「たゞさい、やき合はれたゞけだつた。レーニンが病氣にかゝることがあり得ようなどとは、誰一人考へてゐなかつたやうだ。多くの人々は、彼が他の人達の健康に非常に氣をつけてゐるのを知つてゐた、が、彼自身は病氣に冒されないものゝやうに思つてゐた。舊い時代からの革命家のほとんど全部は、心臓を過度に緊張させた結果、その力が弱められて、何か心臓の病氣をもつてゐた。「彼等の殆んど凡ては、發動機に故障を起してゐる」と醫師達はいつもこぼしてゐた。

「あたり前な心臓は二つしかない。」とグエチエール教授はレウ・ダヴィドウィツチに言つた、「レーニンの心臓と君のとだ。こんな心臓をもつてゐれば、百まで生きることが出来る。」外國の専門家の診察は、これを確證した——モスコウで彼等の診察した心臓全部のうちで、レーニンとトロツキイのそれだけが、特別に立派に活動してゐた。レーニンの健康が急變したといふことが、もつと一般に知れ渡つた時、それは革命そのものにおける移變のやうに思はれた。レーニンが、他の人々と同じやうに、病氣で倒れて死ぬといふことがそも／＼あり得ることだらうか？ レーニンが動いたり、口をきいたりする能力を失つたと聞くのは、恐ろしいことだつた。私は、彼がその一切に打ち勝つて、起上り、恢復するものと固く信じないわけにいかなかつた。これが黨全體の感情であつたのだ。

遙かあとになつて當時を顧み、私は、三日目までレーニンの病氣のニュースを受けなかつたことを想ひ起して、新たに驚きの目を睜つた。當時私は、そのことについて立ちどまつて考へなかつたの

だ。だが、そのことは何等偶然であり得なかつたのだ。長い間私の反対派とならうと準備してゐた人達——就中スターリン——は、その時をつかまへやうと焦慮つてゐた。レーニンの病氣はいつ如何なる瞬間に悲劇になるか分らない性質のものだつた。明日、いや今日にでも、指導権の一切の問題が、最後のものとなるかも知れなかつた。私の反対派は、たとへ一日でもよいから、準備の時日を得ることが重要だと考へた。彼等は祕密に相談し、いろ／＼と方法を示し合した。私に反対しようとする三幅對の觀念は、すでに決定されたと斷定しなければならぬ。だが、レーニンは恢復した。彼の不屈の意志に驅られて、彼の全肉體は巨人的な努力を現はし、血液の缺乏で衰滅しつゝあり音響や文字を綜合する能力を失つてゐた頭腦は、不意に再生したのだ。

五月の終り頃、私はモスコウから約八十露里離れた場所へ、魚とりに行つた。その場所はたま／＼レーニンの名を冠した養生院のあるところだつた。子供達は私といつしよに湖邊を歩き、レーニンの健康について私にいろ／＼と訊ね、彼に贈つて欲しいと言つて野の花と一通の手紙を私に渡した。レーニンはまだものを書くことが出来なかつた。彼は祕書に命じて、數行の文章を書き取らせた。『ウラヂミル・イリイツチは私に命じて、貴下に次のことを書き送るやうにと求めた。彼は、ポドソルネチナヤ驛の養生院の子供達に彼から贈物をするやうにとの貴下の申入れを悦んで受入れると。またウラジミル・イリイツチは貴下に次のことを小さい者達に告げて欲しいと言つてゐる。彼は、彼等が親

切におくつてくれた手紙と、花に非常に感謝する、と同時に、彼等の招きに應ずることが出来ないのを残念に思つてゐる、がキット間も無く回復して彼等の仲間になることが出来るだらうと。』

七月に、レーニンは再び自分の足で立つた。そして十月までは正式には仕事に歸らなかつたが、彼は、あらゆるものに注意の眼を据ゑ、あらゆるものを研究した。病上りのこの數ヶ月の間、彼の注意を惹いた事象のうちに社會革命黨員の裁判事件があつた。社會革命黨員はヴォロダルスキー及びウリツキーを殺害し、レーニンに由々しい負傷を與へ、私の列車破壊を二度企てた。我々はこの一切を軽く取扱ふことは出来なかつた。我々はそれを我々の敵のやうな觀念的な見解から眺めることはしないで、『歴史における個人の役割』を正しく評價した。我々は、もし我々の敵にたいして、我々の黨の全指導的グループを次から次と暗殺することを許した場合、革命をおびやかして來る危険について、眼を閉づることが出来なかつたのだ。

熱つからず冷たからずといつた種類の我々の人道主義的な友達は、一般に報復の必要は認めることは出来るが、捕虜となつた敵を射殺することは必要な自己防衛の限度を超えることだ、と一度ならず我々に説明した。彼等は、我々が『寛宏さ』を示すやうにと要求したのだ。當時まだレーニンと私とに反對して、彼等の思つてゐることを敢て口にしてゐたクララ・ツェトキンその他のヨーロッパのコミニユニスト達は、我々は審判に附されてゐる人々の生命を救ふべきだと主張した。彼等は、その人

人にたいする處刑を禁錮にとどめるやうにと提議した。これが最も簡単な解決のやうだつた。しかし乍ら、革命時における對個人の報復問題は、全く特殊な性質をもつて居る。然るに人道主義的一般論はそれから背を向けて、無力に歸してゐるのだ。その場合の闘争は、實際の權力のためのものであつて、生死の闘争である——××といふものが、そもくさういふものである以上。かゝる條件のもとにおいて、數週間のうちに權力を奪取し、革命の舵機をにぎる人々を投獄し又は絶滅しやうと希望してゐる人達にたいして、禁錮は何を意味することが出来るか？ 人間の個性といふ絶對的な價値の見地からすると、革命は戦争と同様に『有罪の宣告』を與へられなければならない——大きくつた人類の全歴史も亦、さうでなければならぬやうに。だが、個性といふ當の觀念そのものが、諸革命の結果としてのみ發展したものであつて、それが完成にはまだ遙かに遠い一つの過程であるのだ。個性といふ觀念が現實性をもつたものとなり、『大衆』といふ半ば横柄な觀念が、『個性』といふ哲學的に特權づけられた觀念にたいする對立物たることを止めるためには、大衆は、革命の起重機によつて、もつと正確に言へば、一聯の革命によつて、新らしい歴史的段階に自らを高めなければならないのだ。規範哲學から見てこの方法が良いか悪いか、私は知らないし、また知らうとする興味もないことを告白しなければならぬ。だが、これが人類が今日まで見出して來た唯一の道だといふことを、私は決定的に知つてゐるのだ。

これらの考察はいかなる意味に於ても、革命的恐怖手段を『正當化』しようとするものではない。それを正當化しようと企てる事は、それが告訴者を注意することを意味するであらう。處でその告訴者は誰か？ 世界的大屠殺の組織者、利用者か？ 『未知の兵卒』に晚餐後の葉巻を恵む俄か分限か？ 戦争のない時にだけ戦争と戦ひ、彼等の厭はしい假裝舞踊會を繰返さうと用意してゐるかの平和主義者達か？ ホーヘンツォーレルン家の罪のために——及び彼等自身の罪のために、ドイツの子供達を飢ゑしめる資格が自身にあると考へてゐるロイド・デョーヂ、ウイルソン及びポアンカレか？ 遠い安全な場所からロシアの内亂の焰を煽り立て、同時にその碧血のうちから彼等の利益をつくり出さうと試みてゐたイギリスの保守主義者又はフランスの共和主義者か？ この點呼は、際限なくこれをつゞけることが出来るだらう。私にとつては、哲學的正當化が問題でなく、むしろ政治的説明が問題なのだ。××は、一切の矛盾を生か死かの二者擇一に還元するが故にのみ、××であるのだ。各半世紀毎に、屍の山を築くことによつて、アルサス・ローレンの主權の問題を解決する人達が、議會の腹藝以上の何ものでもないものによつて、彼等の社會的關係を再建することが出来るといふやうなことが、そもく考へられるか？ とにかく何人もまだ、それがどうして爲され得るのか、それを我々に示してゐないのだ。我々は鐵とダイナマイトの助けによつて、古い岩壁の反抗を破壊しつゝあつたのだ。そして、我々の敵が、多くの場合最も文明的な、民主的な國々からもつて來た小銃をもつて、我

我を射撃した時に、我々は同じ地方語でそれに答へた。パーナード・シヨールは髭を振りたて、このこととで雙方に向つて非難したが、誰一人として彼の聖禮式的の議論に注意を拂つたものさへないのだ。

一九二二年の夏、報復の問題は特に差迫つたものとなつた、といふのはそれが、嘗つて我々と相携へてツアーに向つて革命的戦争を行ひ、十月革命の後には我々に向つて恐怖手段の武器を轉じた黨の指導者に關聯するものだつたからだ。社會革命黨の陣營からの脱走者が我々に暴露したところによると、恐怖手段の良からぬ行爲は我々が最初さうと信ずる方へ傾いてゐたところは異つて、個人によつて教唆されたものでなく、その黨によつて教唆されたものであつた——尤も、その黨は、自己の冒した暗殺の責任を公然と承認する危険を敢てしなかつたが。裁判所による死刑宣言は、避く可からざるものであつた、が、それを執行することは、同じく不可避的に、恐怖手段による復讐の波を起すことを意味してゐた。それかと言つて、たとひ長期にしろ、刑罰の方法を禁錮に限ることは、彼等がソヴィエットの長生を信ずることなど微塵もありさうでないのだから、彼等を力づけると同等だつた。そこで、その黨が恐怖手段による鬭争を繼續するかどうか、宣告の執行をそれによつて決する以外、他に執るべき手段はなかつた。言葉をかへて言へば、その黨の指導者たちを人質としてとらなければならなかつたのだ。

レーニンの回復後、私が彼と最初に會つたのは、社會革命黨員の審問中であつた。「全く正しい。

それ以外に執る可き手段はない。」といふ私の提議にたいして、彼は即座に、救はれたやうに、同意した。彼の回復は、明らかに彼に元氣を與へてゐた。だが彼はまだ内心に危懼をもつてゐた。彼は全く當惑して、言つた。「分るだらう、僕は書いたり、しゃべつたりすることすら出来ないのだ。そしてすべてのことをもう一度學び通さなければならぬのだ。」さう云つて彼は、ものを訊ねるやうに私に向つて眼を上げた。

十月に、レーニンは正式に仕事に歸り、ポルトビエロー及び人民委員ソヴィエットを主宰し、十一月には、綱領についての演説をした——それはどう見たつて、彼の動脈にたいする重い負擔であつた。彼は、彼の病氣に關聯して、我々の背後で織られてゐた隠謀のほとんど眼に見えない絲を、知覺したやうに見えた。亞流共はまだ彼等の背後の橋梁を焼いてゐなかつた、が、そこ、で梁木を鋸でひき、ダイナマイトの棒を隠してゐた。その機會があるときは何時でも、彼等は、あたかも獨り歩きの練習でもするかやうに、私に反對し、且つさういふデモンストレーションを注意深く準備してゐた。レーニンは一層深く仕事に逢入り込むにしたがつて、この數箇月の間に起つた變化を、不安焦慮をもつて觀察し始めた。だが彼は、形勢を重大化することを懼れて、それらについては何ごとも言はなかつた。彼は『三幅對』をはねつける準備をしており、手始めに個人的な事柄でそれをやつたのだ。私は黨の仕事の一部として——即ち個人的に、非公式に——相當澤山の片手間仕事を指導してゐた。

が、そのなかに反宗教宣傳があり、それにはレーニンが非常に興味をもつてゐた。彼は、この仕事から眼を離さないやうにと、執拗に私に求めた。病上りの時期に彼は、スターリンが反宗教宣傳の機關を改正して、それから私を除き、そこで私に對する反對運動をやつてゐるといふ事を、どこから聞き知つた。するとレーニンは田舎から、ポルトビュローに書簡を送つて來て、その中で明白に其必要もないのに、カウツキーに關する私の書物を引用し、その名も言はず、書名もあげないで、その著者を賞揚した。私は告白しなければならぬが、これが私に對するスターリンの反對運動をレーニンが責めてゐるといふ事を示す遠廻しのやり方だつたとは、當時私は気がつかかなかつたのだ。さうかうする中に、ヤロスラウスキーが——私の代理といふ名目だと思ふが——反宗教宣傳の衝に當るために、前面に押し出された。レーニンは仕事に歸つて來て、そのことを聞いた時、ポルトビュローの或る會議で、猛烈にモロトフ——及び彼を通じてスターリン——を攻撃した。『ヤー——ロス——ラウスキー？ ヤー——ロス——ラウスキーが何者か、君は知らないのか？ その仕事はこの雌鷄をくつくつと鳴かせるだらう。彼は決してこの仕事を手配し得ないだらう。』等々。レーニンの猛烈さは、真相を知らない人には、度外れてさへ見えたくも知れない。だが、それはレーニンがヤロスラウスキーを堪へる事が出来ないといふ問題ではなくて、寧ろ黨の指導の問題なのだ。こんな出來事は頻々としてあつた。事態を一層立入つて眺めれば、スターリンが、そも／＼レーニンと密接に交渉するやうになつた。

の瞬間から、特に十月革命以來、レーニンにたいする彼の反對において、いつも壓倒され、無力であつて、そのために更に一層いら／＼してゐたことが分る。スターリンは恐ろしい嫉妬心と、野心をもつてゐるので、事々に、彼の知力的・精神的劣性を感じるのを堪へることが出来なかつたのだ。彼は私に接近しようと試みたやうだつた。私達の間に親密性に近い或るものをつくらうと企られた意味を私の理解したのは、それから甚しく後のことではなかつた。だが、私は、衰退の波がやつて來た時彼の力となつた正にその性質によつて、反撥された。彼の興味の狹隘、彼の經驗主義、彼の心理組織の粗雑、彼の地方的な特殊な狡猾性——マルキシズムは澤山の偏見からこれらを解放したが、それをそのままにしておかないで、徹底的に考へ抜かれ、心的に同化された哲學的概觀をもつて、それに置換へたのだ——が、それだ。彼の折に觸れての言葉——その時には偶然的なものと思はれたが、實際にはさうでなかつた——の或ものから判斷すると、スターリンは、レーニンの統制を厄介なものにして、レーニンにたいする反對の支柱を私のうちに見出さうと努めてゐたのだ。この種の企ての度びに、私は彼から離れて、歩きつゞけた。私にたいする彼の冷たい、最初は臆病であつたが、徹頭徹尾隱謀的な嫌惡の源は、こゝに見出されねばならぬと信ずる。彼は、彼を好いてゐる人々か、むつかしい問題で煩はされないうで暮し度いと求める單純な人間か、又は感情の傷けられた人達を、組織的に彼の周圍に集めた。第一、第二及び第三のグループは、すべてその數が多かつた。

日常の仕事では、私よりも寧ろスターリン、ジノヴィエフ又はカメネフを相手にする方が、レーニンにとつて便利であつたのは、疑ひなかつた。レーニンは他の凡ての人と同様に、自分の時間を節約しやうといつても骨折つてゐた。彼は軋轢に打ち勝つために費消される勢力を、最小限度に還元しようとつとめた。私は私自身の見解、私自身の仕事の仕方、それが一度び決定された場合、或る決議を實行する私自身の方法をもつてゐた。レーニンはこれを非常によく知つて居り、それを尊敬してゐた。私が事務的な委員に適任でないといふことを、彼が餘りにもよく知つてゐたのは、この故であつたのだ。彼は、彼の訓令を實行する人が必要な場合には、誰か他のものゝ方を向いた。或る時期、特にレーニンと私との意見が相違した時、このことは恐らく彼の助手達をして、特に彼等がレーニンに密接してゐるものと信ぜしめたことであらう。たとへば彼は、人民委員ソヴィエツト議長としての彼の代理者として、リユーコフとツュルパを招き、後にそれにカメネフを加へた。私はこれは立派な人選だと思つた。レーニンは實際的な、忠實な助手が必要であつたのだ。私はその役割には不適任であつたので、代理権を私に提供しなかつたことについて、私はたゞレーニンに感謝するばかりであつた。このことを私にたいする信任の缺乏と考へることは愚か、反對に私はそのなかに、私及び我々相互の關係にたいする決定的な、少しもこびへつらいのない評價を見てとつたのだ。その後、私はこれを完全に確信する機會をもつた。彼の第一の急變と第二の急變との合ひ間は、レーニンは以前の半分しか仕事

事をする事が出来なかつた。彼の血管からのかすかではあるが、やはり不吉な警告が、この時期を通じて断えず彼にやつて來てゐた。ポルトビユーローの或る會合で、誰かに彼のノートを手渡すために立ち上つた時——レーニンはいつも仕事を早めるためにこんな風にノートを交換した——彼はちよつとよろめいた。私は、彼の顔の表情が即座に變つたので、初めてそれを認めた。これは彼の生命の中心からの多くの警告の一つだつたのだ。レーニンはこの點について、何等の幻想もよつてゐなかつた。彼は、彼なしに、及び彼の後で、仕事がどんな風に進むだらうと、あらゆる視角からそれを默想してゐた。後になつて彼の『遺書』として知られた文書を、心的に彼の表式化したのは、その當時であつたに相違ない。そしてレーニンと私とが、將來における私の仕事について、長い會話を交したのち、この時——彼の第二回の急變まへの最後の週間——であつた。それが政治的に重要性を帯びてゐたので、私はたゞちに若干の人々（ラコウスキー、アイ・エヌ・スミルノフ、ソスノウスキー、プレオブラツェンスキーその他）にこの會話を繰返した。かうして繰返したお蔭で、その會話は私の記憶のうちに極めてハツキリと記録された。

それはかういふ風にして來たのだ。教育労働者組合の中央委員がレーニンと私に委員を派遣し、私が一年以前に運輸人民委員を引受けたと同じ風に、他の諸任務に加へて、教育人民委員を引受けて欲しいと要請して來た。レーニンは、私がそれについてどう考へてゐるかを知らうとした。私は、教育

の分野においても、他の凡ての分野におけると同様に、困難は行政機關から来るだらう、と彼に語つた。レーニンは、私の考への跡をとりあげて、答へた。「さうだ、我々の官僚主義は何だか奇怪なものだ。僕は仕事に歸つて来た時に、びつくりした。……君が軍事部門以外に、他のどの部門の仕事へも行かうとしない——尠くとも僕にはさう見える——のは、まさにこの爲めだ。」レーニンは、それから執情的な確信をもつて、彼の計畫を述べつけた。彼は、指導的な仕事に與へるには、限られた體力しかもつてゐなかつた。彼は三人の代理役をもつてゐた。「君は彼等を知つてゐる。カメネフはもちろん伶俐な政治家だが、爲政家としては何だらう？ ツェルパは病氣だ。リューコフは恐らく爲政家だが、彼は最高經濟會議へ歸つて行かなければならないであらう。そこで君が代理役とならなければならぬ。我々は人物の急激な配置替へをやらなければならぬやうな形勢にあるのだ。」ふたゝび私は、軍事部門での私の仕事すら不斷に困難にしてゐる『機關』を指摘した。「よろしい、君がその機關を掃つて建て直すいゝ機會だらう。」と、レーニンは、曾つて私の使つた表現をほめかして、即座に應じた。私は、私の言及してゐるのは國家機關中の官僚主義ばかりでなく、同様に黨内の官僚主義である、またこれら一切の紛議の原因は、二つの機關の連結のうちに、黨の書記局の階級制度ヒラルキをめぐつて集る勢力のある諸グループが相互の間に障壁を築いてゐることのうちに、在るのだ、と答へた。レーニンは緊張してそれに耳を傾け、彼の胸からまつすぐにやつて来るかの深い調子で、私の示唆を確

認した——それは、自分の交談してゐる人物が完全に彼を理解してゐることを確信し、會話の常套を拂ひのけてしまつて、最も重要な悩ましいものには、觸れた時にのみ、彼のなかにいつも爆發して来る調子なのだ。一瞬間、そのことを考へ廻した後、レーニンはぶつきら棒に質問した。「では君は、國家官僚主義ばかりでなく、同時に中央委員會の組織部にたいして、發砲しようと提議するのかね？」これは餘りに意外だつたので、私は失笑を禁ずることが出来なかつた。「さうであるらしい。」組織部局はスターリンの機關の當の心臓を意味してゐた。

『よろしい。』と、レーニンは、我々がものをその正しい名によつて呼んだことを明らかに悦んで、つゞけた。「もしさうなら、僕は君に、一般に官僚主義特殊に組織部局に反對して、ブロックをつくることを提議しよう。』

『立派な人間となら、立派なブロックをつくるのは名譽だ。』と、私は答へた。

我々は後刻ふたゝび會ふことを申合した。レーニンは、この問題の組織上の目的を考へておくやうにと、私に提議した。彼は、官僚主義と戦ふために、中央委員會に附屬する一委員會を創設しようと思論んだ。我々兩人もその委員となるのだ。この委員會は、實質上、官僚主義の脊骨たるスターリン分派を破壊するため、及び私をしてレーニンの代理となり、且つ彼の後繼者として人民委員ソヴィエツト議長の地位をつぐこと——彼はさう主張してゐた——を許すやうな、さういふ條件を黨内につく

り出すための、槓杆の役をするものなのだ。

謂ゆる『遺書』の全意味は、これと關聯してのみ明白となるのだ。そこでレーニンは六名の名前しか挙げず、一語一語に力をこめて、それらの人々を簡単に概評してゐる。云ふまでもなく、遺書をつくつた彼の目的は、私のために指導の仕事を容易にするに在つたのだ。彼は自然、最少限度の摩擦で、それをしやうと欲した。彼は、極めて裁斷的な判斷を緩和し、各人について非常に用心してものを言つてゐる。同時に彼は、第一位を占める資格があると彼の考へた人物を餘りに決定的に指示することを差控へた。たゞスターリンの解剖だけには、それとは別個な調子が感ぜられ、それはその遺書へ後でつけた追書では、全く絶滅的なものとなつてゐるのだ。

ジノヴィエフ及びカメネフについて、レーニンは、ふと思ひついたといつた調子で、書いてゐる。一九一七年の彼等の降伏は、『偶然なことではなかつた』ので、言葉をかへて云へば、これは彼等の血のなかにあるのだ。さういふ人間が革命を指導することの出来ないのは明白であるが、しかし彼等に向つて、過去をとがむ可きではない。ブハーリンは、マルクシストでなくて、街學者であるが、また彼は思ひやりの深い人間である。ベタコフは有能な爲政治家であるが、政治家としては非常に悪い。だが、この二人即ちブハーリンとベタコフとは、なほ學び修めて行くであらうことは、全く可能なことだ。最も有能なのはトロツキイで、彼の缺點は、自信の強過ぎるところにある。スターリンは粗悪

で、不誠實で、且つ黨の諸機關から彼の抜き出した權力を濫用し兼ねない。スターリンは分裂を避けるために、取除かれなければならない。これが『遺書』の要旨だ。それは、我々の曩の會話で、レーニンが私に出した提議を完成し、明白なものとしてゐる。

レーニンは實際には、十月革命の後になつて始めてスターリンを知つたのだ。彼はスターリンの強固性と、實際的な精神——その四分の三は狡猾性だ——を買つた。が、レーニンは一步一步、スターリンの無智、彼の政治的視野の非常に狭いこと、及び彼の例外的に、心性が粗悪で、粗笨なことを衝きとめた。スターリンはレーニンの意志に反して黨の書記長の地位に選出され、レーニンは自分が黨を主宰してゐた間だけ、それを黙認した。しかし最初の急變の後、毀られた健康をもつて仕事に歸つて來ると、レーニンは指導權の全問題に打ち込んだ。私との曩の會話はそのためだつたのだ。したがつて、遺書もさうだ。その最後の行は一月四日に書かれたものだ。その後、二ヶ月経過したが、その間に形勢は決定的な姿をとつた。レーニンは、今や、書記長の地位からスターリンを取除くばかりでなく、同時に黨において彼の資格を奪はうと準備してゐた。外國貿易の獨占の問題、民族問題、黨内の統治、勞働者・農民の監督、及び統制委員會の諸問題に關して、彼は組織的に、第十二回大會において、官僚主義、官吏間の疎隔、強制支配、及び一般的粗雑の體現者としてのスターリンにたいして、再び立つ能はざる打撃を加へようと準備してゐた。

レーニンは、彼が目論んでゐた黨指導部の編制替へを實行することが出来たであらうか？ その瞬間には、彼は疑ひもなくそれがやれたであらう。それには多くの先例があり、そのうちの一つは全く記憶に新らしく、且つ意義の深いものであつた。一九二二年十月、レーニンはまだ病上りで、田舎に暮して居り、私もモスコウにゐなかつた間に、中央委員會は、外國貿易の獨占到取返しのかね打撃を與ふる決議を、滿場一致で可決した。レーニンと私は、各々單獨で、事の重大なのを感知し、それから手紙を往復して、我々の行動を結びつけた。すると數週間後、中央委員會は、それを可決した時と同様滿場一致で、その決議を廢棄してしまつた。十二月二十一日にレーニンは勝ち誇つて私に書いて寄こした。『同志トロツキイ、我々は一發の射撃もしないで、單なる機動演習だけで、陣地を占領することに成功したやうだ。私は提議する。我々はこれで止めず、攻撃の壓力を強めよう。』一九二三年の初頭には、中央委員會にたいする我々の共同活動は、我々に勝利を齎したであらう——これには疑問の影さへ投ずることは出来ない。否それ以上、もし私が第十二回大會の前夜、スターリンの官僚主義に反對する『レーニンとトロツキイ』のブロツクの精神で、前面に歩み出たならば、たとひレーニンがその鬭争に直接参加しなくとも、私は勝利を占めることが出来たに相違ない。——私はこれを少しも疑はない。その勝利がどれだけ確乎たるものであつたか、それはもちろん別個の問題である。それを決定するには、國家内、勞動階級内、及び黨そのもの、内部の一聯の客觀的過程を考慮に

287

容れなければならない。これは別個の大きな主題である。一九二七年に、レーニンの妻は、もしレーニンが生きてゐたら、おそらくスターリンの牢獄で時をすごしてゐたであらう、と言つた。全くさうだと私は考へる。といふのは、問題はスターリンでなく、それを理解せられない彼の表現してゐる勢力だからだ。だが、一九二二——三年にはまだ、民族社會主義官吏、機關の篡奪者、『十月』の不法後繼者、ポリシエヴィズムの亞流共の手で、當時急激に形成されてゐた分派に向つて、公然の攻撃を加へることによつて、司令的陣地を占領することは可能であつたのだ。その主要な障害はレーニンの容態であつた。彼は、第一回の急變後と同様に再び立ち、第十一回大會の時と同様に第十二回大會に参加出来るものと期待されてゐた。彼自身はこれを期待してゐた。醫師達は、確信を失つて來てはゐたが、力づけるためにそれが出来ると言つた。機關人及び官僚主義者にたいする『レーニンとトロツキイのブロツク』の觀念は、當時、もつぱらレーニンと私が知つてゐただけであつて、ポリトビュローの他の委員達は、うす／＼それを感じてゐたに過ぎなかつた。民族問題についてのレーニンの書簡及び彼の遺書は、知られないまゝであつた。そこで私だけの獨立の活動は、黨及び國家において、レーニンの地位をつがうとする私の個人的鬭争だと解釋されたであらう。いやもつと正確に言へば、さう説明されたであらう。これは考へたゞけでも私をゾツとさせた。それは我々の伍列へひどい道德的荒廢を齎らすもので、たとひ勝利を得たとしても、そのために餘りにも堪へられない代價を支

拂ふものだと私は考へた。どんなにプランをたて、どんなに考慮しても、そこには積極的な、不確實の要素が残つてゐた——レーニンと彼の健康状態がそれだ。彼は、彼自身の見解を述べる事が出来るであらうか？ 彼はまだその時を持つだらうか？ それは革命の未來のために闘るレーニンとトロツキイによる争闘であつて、いまは病んでゐるレーニンの地位をねらふトロツキイの争闘ではないといふことを、黨は理解するであらうか？ レーニンは黨において独自の地位を占めてゐたので、彼の個人的容態の不確實は、黨全體の状態の不確實となつて現れた。不定な形勢が長引いた。そしてこの遅滞は亞流共に利用されるに過ぎなかつた。といふのはスターリンは、書記長として、この空位の全時期、諸機關の執事となつてゐたからだ。

一九二三年三月の初めであつた。レーニンは、裁判所の巨大なビルディングのなかの彼の居室で横臥してゐた。第二回の急變が間近く、數回の軽い脳震蕩がそのまへにやつて來た。私は、腰部神経痛のために、以前のカヴァレルスキー・ビルディングで、數週間床についてゐた。この建物のなかに私はアパートメントをもつて居り、レーニンとは、クレムリンの巨きな中庭によつて隔てられてゐた。レーニンも私も電話に近づくことが出來ず、その上、醫師はレーニンに一切電話で會話することを嚴重に禁じた。レーニンの二人の秘書、フォチエヴァとグラセルが、連絡係の役目をつとめた。彼等が私のところへ來て語つたのは、かうだ。ウラヂミル・イリイツチは、こんどの黨大會にたいするスターリ

ンの準備、わけでもデョルヂヤでの彼の分派的隠謀に關聯した準備について、非常に心痛してゐた。

『ウラヂミル・イリイツチは大會で、スターリンに爆彈を投じようと支度してゐる。』——これは、フォチエヴァの言葉そのまゝなのだ。『爆彈』といふ言葉は、レーニンが口にしたので、彼女の言葉ではない。『ウラヂミル・イリイツチは貴方にデョルヂヤ問題を處理して欲しいと求めてゐる、さうなれば彼は安心するでせう。』三月五日、レーニンは次のノートを口授して私によこした。

『親愛な同志トロツキイ、私は、黨の中央委員會において、君がデョルヂヤ問題の防衛を引受けてくれることを熱望する。現在、その問題はスターリン及びヂェルヂンスキーの「虐待」の下にあり、私は彼等の公平を信することが出來ない。もし君が防衛を引受けることに同意してくれれば、私は安心するだらう。もし何かの理由で、それに同意が出來かねるならば、どうか一切の書類を私に返へしてもらひたい。さうすれば私は、それを君からの拒絶の徴と考へるだらう。同志としての無上の挨拶を送る。レーニン。』

どういふわけでこの問題が、そんなに差迫つたものとされたのか？——私は調べて見た。つまりスターリンがレーニンの信任を裏切つたのだ。スターリンは、デョルヂヤにおいて自身のために支持勢力を確立しようとして、レーニンに隠れて且つ全中央委員會にも知らさないで活動し、オルズオニキツの援助を得、またヂェルヂンスキーの支持も得て、中央委員會の權力を無視し、嘘で自己を防衛し

て、その黨の最良部分にたいして組織的のクー・デターを遂行したのだ。レーニンは病氣のために他の同志達と會ふことが出来なかつたので、スターリンはこれを利用し、伴りの報道でレーニンを取り卷いた。レーニンは祕書に命じて、デョルヂヤ問題に關して得られる限りの一切の材料を蒐集させ、公然と聲明を發表しようとした。何が最も強くレーニンを衝撃したか——スターリンの個人的の不誠實か、それとも民族問題にたいする彼の粗雑な、官僚主義的な政策か、それは判断し難い。おそらく両者が一緒になつたものであらう。レーニンは鬭争を開始しようと手筈をきめてゐたが大會で演説することが出来なくなりはいまいかと懼れてゐた、そしてそれが彼を惱ましたのだ。『何故、ジノヴィエフ又はカメネフとその問題について談合されないのですか？』——彼の祕書達はさうレーニンに慫慂しつゝけた。だがレーニンは私心をはさまず、それを斥けた。彼は、もし彼が活動から身を引けば、ジノヴィエフ及びカメネフはスターリンと結びついて、私にたいして反對の三幅對をつくりあげ、かくて彼を裏切るだらうと、見透してゐたのだ。『君はデョルヂヤ問題にたいするトロツキイの態度を知つてゐるか？』とレーニンが訊ねた、『準備會議では、トロツキイは貴下の見解と一致した演説をしました。』と、その會合で書記として仕事をしたグラセルが答へた。

『確か？』

『さうです。トロツキイは、民族問題を理解しないと云つて、オルズオニキヅ、ヴォロシロフ及びカ

メネフを非難しました。』

『もう一度それを確かめてくれ給へ。』と、レーニンは要求した。

翌日、私の家で開かれた中央委員會の會合の席上で、グラセルは、前日の私の演説を簡単に總括したノートを私に手交し、『私は貴下を正しく理解してゐますでせうか？』と訊ねた。

『こりあ何のためにいるのかね？』と、私は訊ねた。『ウラヂミル・イリイツチのためです。』と、グラセルは答へた。私は『さう、これで間違ひはない。』と返辭した。その間、スターリンは我々のこの文通に警戒の眼をすゑてゐたが、その時には私は、それがいつたいどうしたことか、まだよく分つてゐなかつた。後になつてグラセルは私に語つた。『ウラヂミル・イリイツチは貴下と私の文通を讀んだあとで、不思議に晴れ晴れして……「さあ、別の仕事だ」と言ひました。それから私に、第十二回大會で彼の爆彈の一部となる可き一切の原稿を貴下に手渡すやうにと命じました。』レーニンの意圖は、いまは、一切私に明白になつた。彼は、スターリン政策を例にとつて、獨裁を官僚主義に轉化するこの危険を、無慈悲に、黨の面前へ暴露しようと欲してゐたのだ。

291 『明日カメネフが黨協議會のためにデョルヂヤへ出發する。』と、私はフォチエヴァに言つた。『デョルヂヤで正しく行動させるために、彼にレーニンの手記を知らしておくことが出来るが、それについてウラヂミル・イリイツチの意見を訊ねてくれ給へ。』それから十五分後、フォチエヴァは息せき切

つて歸つて来た。

『絶対にいけない、さうです。』

『何故？』

『ウラヂミル・イリイツチは、「カメネフは、すぐさま一切をスターリンに明かすだらう、するとスターリンは腐つた妥協をやつて、我々を欺くだらう。」と言ふのです。』

『では、ウラヂミル・イリイツチは、正しい線に沿つてすら、我々はスターリンと妥協が出来るとは、もはや考へないと言つた、そんなところまで来てゐるのか？』

『さうです、彼はスターリンを信じません。そして公然と、全黨の面前で、彼に反対して歩み出さうと欲してゐるのです。彼は爆弾を用意してゐます。』

この會話があつてから約一時間後、フオチエヴァは、古い革命家のムヂヴァニ、及びその他ヂョルヂアにおけるスターリンの政策の反対派に宛てたレーニンの覺書をもつて、再び私に會ひに来た。レーニンは彼等に宛て、書いた。『小生は、全心を傾倒して、諸君の事件を監視してゐる。オルズオニキヅの亂暴なやり方及びスターリン、ヂエルヂンスキーのそれにたいする支持には、私は滿腔の嫌惡を覺えてゐる。私は諸君のために、覺え書と演説を用意してゐる。』この覺え書の寫しは、私ばかりでなく同時にカメネフにも宛て、あつた。これを見て私はびつくりした。

『では、ウラヂミル・イリイツチは考へを變へたのか？』と、私は訊ねた。

『さうです、彼の容態は時々刻々に悪くなつて行つてゐるのです。醫師達の氣休めの言葉を信じてはいけないのです。彼はいまでは、ものを言ふのにも困難してゐるのです。……ヂョルヂア問題はおそろしく彼を悩ましてゐます。彼は、何事かを企て得るまへに、生命が駄目になつてしまふだらうと懼れてゐます。このノートを私に手渡す時、彼は、「手遅れにならない前に……自分は、それに適當な時の来る以前に、どうしても公然と出て行かざるを得ない。」と言ひました！』

『では、いま僕は、カメネフにそれを語つてもよいといふわけかね？』

『明かにさうです。』

『カメネフに私のところへ来るやうに言つてくれ給へ。』

カメネフは一時間後にやつて来た。彼はすつかり途方にくれてゐた。三幅對——スターリン、ジノヴィエフ、カメネフ——の觀念は、久しい以前から確立されてゐた。彼等の槍の穂先は私に向けられてゐた。叛逆者達の全計畫は、諸組織のなかで十分な支持を手をさめた後で、レーニンの合法的な後繼者を擔ぎ出さうとするに在つた。いまの小さな覺え書は、鋭利な楔のやうに彼等の計畫を割つてつき立つた。カメネフはどうしていゝか分らず、すつかり正直に私にさう言つた。私はレーニンの手記を彼に渡して、讀んで見るやうにと言つた。カメネフは十分に經驗のある政治家であるから、レ

ニンにとつては、問題はデヨルヂヤの問題であるばかりでなく、黨におけるスターリンの全役割の問題だといふことを、すぐさま理解した。カメネフは若干の附加的な事實を語つた。彼はたつた今、彼女の求めで、ナヂエヅダ・コンスタンチノヴナ・クルプスカヤを訪ねて来たばかりだつたのだ。彼女は非常に驚愕おどろいて、彼に語つた。『ウラヂミルは、いま、スターリンに與へる書簡を速記者に口授し、その中で彼との一切の關係を斷絶すると述べてゐます。』この直接の原因は、半ば個人的な性質を帯びたものであつた。スターリンはこれまで、レーニンを一切の報道の源から遠ざけようと試みてゐて、これと關聯して、ナヂエヅダ・コンスタンチノヴナに非常に無禮な態度をとつて來てゐたのだ。クルプスカヤは附加へた『あなたはウラヂミルを知つてゐられる。彼はスターリンを政治的に粉碎することが必要だと考へないなら、個人的關係を斷絶しようなどは、決して決心しなかつたでせう。』カメネフは蒼ざめ、動搖し切つてゐた。彼の脚下で、大地は滑つてゐた。彼は、これから何をしなければならぬか、どちらの道をとるべきか、それが分らなかつた。おそらく、私が彼にたいして非友誼的な仕方で行動しはしないかと、單にそれを惧れてゐた。

私は情勢についての私の見解を彼に述べた。私は言つた。『人々は、時として、危険を想像して、それにたいする恐怖から、自分自身に實際の危険を招くことがあるものだ。よく覺えてゐて、他の人達に告げてくれ給へ、私の最も好まないのは、大會において、組織上の何等かの變更のために鬭争を

開始することだ。私は、現状を維持することに賛成だ。もしレーニンが大會前に立つことが出来れば——不幸にもほとんど望みのないことだが——彼と私とは、一緒にこの問題を新たに討議しよう。私はスターリンを取除くこと、オルズオニキヅを放逐すること、及び運搬人民委員の職からヂェルヂンスキーを解任することには、反對である。だが私は、實質上、レーニンに同意してゐる。私は、民族問題にたいする政策の急激な變更、スターリンのデヨルヂヤ反對派の迫害の中止、黨の行政的抑壓の中止、工業化の問題にたいする確乎たる政策、高級の幹部の間の誠實な共働、を欲してゐる。民族問題については、スターリンの決議は何の役にも立たないものだ。それは、支配國民による高壓的な、傲慢な抑壓と、小さな、弱い、後れた諸民族の抗議及び抵抗とを、同一水平線におくものだ。私は、スターリンをして彼の政策の方向の變更を容易にしてやるために、スターリンの決議にたいする修正案の形式で、私の決議を提出する。だが、即時、急激な變更が必要だ。なほそれにつけ加へて、スターリンからクルプスカヤへ直ちに書簡を送り、彼の無禮について釋明し、その態度を變へることが必要だ。彼に無理をさせてはいけない。そして君は』と、こゝで私はカメネフに向つて言つた、『チフリスの協議會に臨んだ場合には、政策をすつかり變更して、民族問題にたいするレーニンの意見のデヨルヂヤの支持者と一致するやうに、取計らはなければならぬ。』

カメネフは救はれた様にホツと息いた。彼は私の提議の全部を承認した。彼の唯一つ懼れたのは、

スターリンが頑張るだらうと言ふこと、『彼の粗傲と、氣まぐれ』であつた。

『スターリンに何か他に選ぶ道があるとは、私は考へない。』と私は答へた。

その夜おそく、カメネフは、田舎へ行つてスターリンに會つて來たこと、スターリンが一切の條件を承認したことを、私に知らして來た。クルプスカヤは既に彼の釋明の書簡を受けとつてゐた、が、それをレーニンに見せることは出来なかつた、といふのに彼の容態が悪化してゐたからだ。だが私は、カメネフの語調が、數時間前我々が分れたときの調子とは異つてゐるといふ、印象を受けた。而してその變化がレーニンの容態が重大化した結果だと知つたのは、それから間もないことであつた。カメネフは、チフリスへ赴く途中か、乃至はそこへ到着して直後に、レーニンが再び意識不鮮明になつて、話すことも書くことも出来ないと言つて報じたスターリンの電報を受取つた。デョルヂヤ會議で、カメネフはレーニンの政策に反對して、スターリンの政策を實行した。個人的隱謀に固く結び付けられて、三幅對は事實となつたのだ。

レーニンの政策は、スターリン個人ばかりでなく、彼の全幕僚、わけても彼の補助者のヂエルヂンスキーとオルズオニキヅに向けられてゐた。この二人は共に、デョルヂヤ問題についてのレーニンの書簡のなかに、絶えず言及されてゐた。ヂエルヂンスキーは偉大な、爆發的な情熱の持主であつた。彼のエネルギーは、不斷の電氣的放射によつて、つねに張り詰めてゐた。どんな討論の場合、比

較的重要性の薄い事柄の討論の場合でも、彼はいつも燃え上り、彼の鼻孔は震へ、彼の眼は輝き、彼の聲は緊張してしばしば破れた。だが、こんな高い神經的緊張にも拘らず、ヂエルヂンスキーは決してその合間の弛緩状態といふものを持つてゐなかつた。彼はいつも同じ張詰めた動員状態であつた。レーニンは或る時彼を元氣のよい駿馬に比較したことがあつた。ヂエルヂンスキーは、彼のやつてゐることならどんなことにも、愛に陥り、氣狂ひのやうに有頂天になり、そこに何等個人的な要素を交へない——彼は完全に仕事に没頭してゐたので——熱情的な狂信性をもつて、彼の共力者を非難や干渉から擁護した。

ヂエルヂンスキーは彼自身の意見といふものをもつてゐなかつた。彼は曾つて、自身を政治家だとは考へず、尠くともレーニンの生きてゐる間はさうであつた。いろんな場合に彼は私に言つた。『私はおそらく悪い革命家ではない、だが、私は決して指導者でも、政治家でも、政策家でもない。』これは單なる謙遜でなく、彼の自己評價は本質において正しかつた。政治的な事柄では、ヂエルヂンスキーはいつも誰かの直接の手引きが必要であつた。數年の間、彼はロザ・ルクセンブルグに追隨し、彼女と共に、ポーランド愛國主義にたいする鬭争に進んで行つたばかりでなく、同じくポリシエヴィズムにたいするそれにも従つた。一九一七年、彼はポリシエヴィキに結びついた。レーニンは非常に悦んで、『古い鬭争の痕跡は少しも残つてゐない。』と私に言つた。最初の二三年の間、彼は特に私に

従つてゐた。後年彼はスターリンを支持した。経済的な仕事では、彼は單なる性情で、もの事をやり遂げた——訴へかけ、勧告し、自分の熱心で人民の足を持ち上げて。彼は、経済的發展については、考慮を重ねた觀念といふものは全然もつてゐなかつた。彼はスターリンの一切の過誤に仲間入りし、彼に持ち得る一切の情熱を絞つて、それを防禦した。彼は、そこからあのやうに情熱的に反對派を攻撃したその當のプラツトフォームから去つたすぐ後で、實際、獨りになつて死んで行つた。

スターリンの他の同盟者オルズオニキヅについては、レーニンは、彼がコーカサスにおいて官僚的な、高壓主義を執つた廉で、黨から放逐する必要があると考へてゐた。私はそれに反對した。レーニンは秘書を通じて私に、『尠くとも二箇年だけ』と答へた。ところで、スターリンの官僚主義と戦ふためにレーニンがその創設を計畫し、黨の良心の體現たる可きものであつた統制委員會において、何とオルズオニキヅが委員長とならうなどは、當時、レーニンが夢にも想像することは出来なかつたことだ！

その一般的な政治的目的は別として、レーニンが反對運動を開いた直接の目的は、もし彼の健康が回復した場合には私と共に彼が、乃至は彼が病氣に仆れた場合には彼の代りに私が、指導の仕事をする上に、最善の條件を創り出さうとするに在つたのだ。しかしながらその闘争は、遂に最後まで遂行されず、いや半ばすら進まず、却つて正反對の結果をもつたのだ。レーニンはスターリンと彼の同盟

者に向つて戦争を宣告したに過ぎず、且つこれすら、直接それにくまれてゐた人々に知られてゐただけで、全體としての黨には知られなかつたのだ。スターリンの分派——その時はまだそれは三幅對の分派であつた——は、最初の警告の後で、一層嚴にその仲間を閉ぢた。不安定の形勢がつよいた。スターリンは機關の先頭に立つてゐた。そこでは氣狂ひじみた歩調で、無理な人選が行はれてゐた。三幅對は原理上の事柄で自分の薄弱を感じれば感ずるほど、ますます彼等は私を恐れた——といふのは彼等は私を取除かうと欲したからだ——そしていよ／＼ますます一切の驚馬とやくざ者をしつかりと國家及び黨組織に結びつけた。その後一九二五年三月、黨の壓迫についての私の非難に答へて、ブハーリンは私に言つた。『我々にはデモクラシーはない、といふのは我々は君を怖れてゐるからだ。』『怖れることなんぞ止めてしまひ給へ。そして正しく仕事をやつて行かうではないか。』と、私は忠告的に提議した。しかし私の提議は無駄であつた。

一九二三年といふ年は、ボリシエヴィキ黨が強度に、だがまだ沈黙のうちに、窒息し、崩壊しつゝあつた最初の年であつた。レーニンは彼のおそろしい病氣と戦つてゐた。三幅對は黨と戦つてゐた。雰囲気は濃厚になつて行き、秋に及んで、その張りつめた空氣は、反對派の『討議』となつて、解け出して來た。革命の第二章——トロツキーズムにたいする闘争——が始まつた。實際には、それはレーニンのイデオロギー的遺産にたいする闘争であつたのだ。

第十五章 亞流共の隱謀

一九二三年の下旬であつた。第十二回大會は間近かであつた。レーニンがそれに参加出来る望みは殆ど無かつた。誰が主要な政治上の報告をするかといふ問題が、持上つた。ポルトビューローの會合で、『もちろんトロツキイだ。』と、スターリンが言つた。彼は、直ちにカリーニン、リューコフ、及び明かにその意志に反して、カメネフの賛成を得た。私は反對した。

『我々のうちの誰であつても、病めるレーニンの代りをつとめようと、云はゞ個人的に、それを企てるやうなことがあれば、黨は不安を感じるであらう。この度は、序論的政治報告をしないでやつて行き、議事々項の箇々の題目について、我々の述べべきことを述べることにしよう。その上』と私は附け加へた。『經濟上の諸問題について、我々の間に意見の相違がある。』

『私は何等意見の相違を認めてゐない。』とスターリンが答へ、同時にカリーニンは附け加へた。『ほとんど凡ての問題で、ポルトビューローは君の提案を採用してゐる。』ジノヴィエフはコーカサスへ行つて留守であつた。問題は未決のまま残された。とにかく私は、工業に關して報告することに同意した。

スターリンは、レーニンの方向から嵐が吹いて來て彼を脅かしてゐることを知り、私に取り入らうとあらゆる仕方で努力してゐた。政治報告は、中央委員會でレーニンについて最も勢力のあり、最も人氣のある委員即ちトロツキイによつて爲さる可きもので、黨はそれを豫期してをり、それ以外の何ごともし諒解しないであらう、と繰返しつゞけた。彼は、かうして表面だけ友誼的であらうと企てゝゐると、敵意を率直に示してゐるときよりも、むしろよけいにそれが身にそぐはないものに見えた。しかも彼の動機がいかに明々白々だつたので、なほ更さうであつた。

ジノヴィエフは間もなくコーカサスから歸つて來た。其時、極めて祕密の分派的な會合が、引つゞき私の背後で行はれてゐた。ジノヴィエフは、彼に政治報告をすることを許して欲しいと要求した。カメネフは、『我々はトロツキイを、黨及び國家を指導するの機能をもつ一人物とすることを許すべきであるか?』と、『舊いポリシヴィキ』に訊ねてゐた。この人々の多數は或る時期、十年乃至十五年、黨を離れてゐたものなのだ。彼等は、私の過去と、私のレーニンとの舊い意見の不一致を、これまでよりも頻繁に掻き集め出し、それがジノヴィエフの専門の仕事となつた。その間に、レーニンの容態は急轉回して悪化したので、最早そこから何等危険に脅かされることはなかつた。三幅對は政治報告をジノヴィエフにやらせることに決定した。舞臺裏ですつかり手筈をととのへた後で、その問題がポルトビューローに提起された時、私は何等反對しなかつた。凡ては臨機の處置といふスタンプが

捺されてあつた。三幅對の政策のどこにも、獨立の方向といふものは見出され得なかつたのであるから、意見の相違などは何等表明されなかつた。工業にたいする私のテーゼは、最初討議を須ひないで可決された。しかしレーニンの仕事に歸つて來る見透しのないといふことが確實に思はれた時、三幅對は大會にたいする準備の餘りにも穩かなのに恐れをなして、急轉向を演じた。彼等は、いま、黨の上層部分において、私を向うに廻して横隊を敷く機會をねらつてゐた。大會前の最後の機會に、カメネフは、すでに可決された私の決議にたいして、農民に關する一條項を附加しようと提議した。この修正案の主題についてこゝで述べることは無意味であらう。それは何等理論的又は政治的の意味をもつたものでなく、私を農民の『過小評價』の罪に問ふ基礎をつくるために——たゞ舞臺裏だけで——『挑發』の行動として工夫されたものなのだ。カメネフは、三年後彼がスターリンと斷絶した時、持ち前の人のいゝ皮肉で、彼等が當時どうしてこの非難——もちろんその創作者達の何人も眞面目にとつてゐなかつた——を捏造してゐたか、それを私に語つた。

政治において抽象的な道德的基準をもつて行動することは、一般に知られてゐるやうに、望みのないことである。政治道德は政治そのものから發するのであり、その機能の一つである。大きな歴史的任務を果す政治のみが、自身に道德的に非難することの出來ない方法を確保することが出来る。これに反して、政治的目的の水準の低下は、不可避免的に道德的衰亡に導かざるを得ない。ファイガロは、誰

でも知つてゐるやうに、政治と隱謀の間に全然區別を設けることを拒んだ。而して彼は、議會政治の全盛時代の到來以前に、生きてゐたのだ！ブルジョア・デモクラシーの道德家達が、然るものとしての革命的獨裁のうちに、政治的惡徳の泉源を見出さうと企てる時、我々はたゞ彼等を憐んで、肩をゆすつてゐることが出来る。ほんの一箇年でもいゝから、近代議會政治をフィルムにをさめたなら、それは非常に教示的であらう。だが、その場合カメラは、愛國的決議が可決される瞬間、下院議長の側に据ゑておいてはいけない。全く別の場所、銀行家と産業家の事務所に、編輯局の私室に、教會の巨頭達の宮殿に、政治好きの貴婦人の客間に、内閣におかれなければならない。またカメラの眼に黨指導者達の祕密の文通ををさめなければならぬ。他方、革命的獨裁の政治的道德に課せられる要求と、議會政治のそれに課せられる要求とは、非常に異つてゐるといふことは、完全に正しいであらう。獨裁の武器と手段とは鋭利なのであるから、念入りの防衛が必要である。穢いスリツパは何等おそろゝに足らぬが、不潔な剃刀は極めて危険だ。三幅對の當の手段は、私の眼には、政治的墮落の兆候だつたのだ。

隱謀者達の當面した主なる困難は、人民の大衆の面前で、公然と私に反對して歩み出て來ることであつた。勞働者達はジノヴィエフとカメネフを知つて居り、いつでも彼等に耳を傾けた。だが、一九一七年中の彼等の行動は、すべての人々の記憶にまだ餘りに鮮明であつた。彼等は黨内で何等道德的

權威をもつてゐなかつた。スターリンは、舊いボリシエヴィキの狭いサークル以外には、殆ど知られてゐなかつた。私の友達の或る人々はいつも私にかう言つた。『彼等は決して公然と君に反對して歩み出て來ることを敢てしないであらう。人民の心のなかでは、君は餘りにも不可分の、レーニンの名前と結びつけられてゐる。十月革命、又は赤軍、あるひはまた内亂を抹殺することは不可能だ。』と。私はこれに同意しなかつた。政治において、特に革命政治においては、一般に權威を認められた人氣のある名前は、非常に重要な、時としては巨人的な役目を演ずるが、しかし決定的な役割を演ずるものではない。結局において、個人的權威の運命は大衆のなかで進行してゐる一層深い過程によつて、決定される。革命の上げ潮の間、ボリシエヴィキ指導者にたいする誹謗は、ボリシエヴィストの勢力を強めるに過ぎなかつた。革命の引き潮の間は、同じ人間にたいする誹謗は、テルミドールの反動にたいして、勝利の武器を供給することが出來たのだ。

ロシア及び全世界における客觀的諸過程は、私の反對派を援けてゐた。しかしそれにも拘らず、彼等の仕事は決して容易なものではなかつた。黨の文獻、新聞及び煽動家は、レーニン、トロツキイの署名の下に經過した往日の記憶の上に、まだ生きてゐた。この凡てをもちろん一舉でなく幾多の段階を通じて、百八十度の角度で廻轉させることが必要であつた。その廻轉の大きさを示すために、革命の指導的人格にたいして黨の機關紙にみなぎつてゐた論調の實例を、鈔くとも若干擧げておかなければならない。

一九二二年十月十四日、即ちレーニンが最初の急變の後すでに仕事に歸つてゐた時に、ラデツクは『プラウダ』に書いた。『もし同志レーニンを彼の意志の傳達によつて支配する革命の理性と呼んでよいならば、同志トロツキイは理性によつて手綱をとられた鐵の意志と特性づけられてよいであらう。トロツキイの演説は、人々を仕事に呼びよせる鐘のやうに響いた。その一切の重要さ、一切の意味、ならびに最近數年間の我々の仕事の意味は、極めて明瞭に現れてゐる。』及び等々。ラデツクの個人的な餘計な言葉が一つの話柄となつてゐたことは本當で、彼は一つの事柄を言ふことが出來るとすぐそれに他の事柄をくつつけて行くことが出來た。だがこの場合遙かに重要なことは、これらの文章がレーニンのまだ生きてゐた間は何人の耳にも不快を與へないで、黨の中央機關紙に掲載されたと云ふ事實だ。

一九二三年、三幅對の隱謀がすでに事實となると共に、ルナチヤルスキーはジノヴィエフの功績を持ち上げようと試みた最初の一人であつた。しかし彼はどういふやり方で彼の仕事を始めたか？ 彼はジノヴィエフの特質を素描して、書いた。『もちろんレーニンとトロツキイとは、我々の時代の、おそらくは全世界の最も知名の人物となつた。ジノヴィエフは彼等のまへで若干後退した、だが、レーニンとトロツキイとは非常に長い間我々の陣營にあつて、大きな天稟のある人間、争ふ可からざる

偉大な指導者と見做されてゐたのであるから、革命の間に彼等が驚く可く生長した事について、何人も大して驚かなかつた。』

私が、こゝに多少不體裁に、これらの華々しい頌辭を引用するとしても、それはたゞ概要の描寫の要素として、もしくはさう言つた方がいいなら、裁判の證據物として、私にそれが必要だからに過ぎないのだ。ところで、まだ第三の證人としてヤロスラウスキーを引用しなければならぬのは、いとほしいことだ。彼の頌辭なるものはおそらく彼の讒謗よりもつと堪へ難いものでさへあるのだ。この人間は今日、黨で最も重要な役目をしてをり、彼のお話にならぬ低い身長によつて、黨の指導權がどれだけの深さまで轉落したか、その度合を示してゐる。ヤロスラウスキーは、全然私にたいする彼の誹謗によつて、現在の地位に昇つたのだ。黨の歴史を公然と腐敗させる人間として、彼は過去を、レーニンにたいするトロツキイの絶えざる鬭争だと説明してゐる。そしてトロツキイは農民を『過小評價した』農民を『無視した』農民に『注意を拂はなかつた』と言つてゐるのは、言ふまでもない。然るに一九二三年の二月——即ち、ヤロスラウスキーが既にレーニンにたいする私の關係、農民にたいする私の見解を知悉してゐたに相違ない時に、彼は、私の文筆的活動の最初の段階（一九〇〇年——一九〇二年）を取扱つた長い論文のなかで、次のやうな仕方でも私の過去を説明したので。

『同志トロツキイの操觚者及び著述家としての輝かしい仕事は、イギリスの著術家デョーヂ・バーナ

ード・シヨアの彼を呼んだやうに、「パンフレッド筆者の王」といふ世界的名聲を彼にもたらした。

四分の一世紀間の彼の活動を注視した人々は、彼の才能が特殊な光輝をもつて赫いてゐるのを見出すだらう。……』等々。『多くの讀者諸君は、極めて多く發行されたトロツキイの青年時代の寫眞を見たとに相違ない……』等々。『そこにある高い額の下に、その當時ですら、諸影像と、諸思想と、諸印象の嵐——それは時として同志トロツキイを驅つて、歴史の大道から一寸外らせ、また時々には、彼を強ひて餘りに迂路を選ばしめるか、又はその反對に、どんな道もあり得ないところへ大膽に殺倒しよる企てしめた——がすでに沸騰してゐたのだ。しかし正しい道を發見しようとのそれら一切の努力のうち、我々は我々の前に、深く革命に傾倒し、演壇上の役割のために成熟し、反對黨を粉碎する鋼鐵のやうな鋭利な且つ可撓性のある辯舌を持つ、一人の人間を持つたのだ。……』及び等々。

ヤロスラウスキーは極度の熱心さをもつて迸り出る。『シベリヤ人は、これらの輝かしい論文を讀んだ後、その熱烈さにさらはれてしまひ、彼の出現を堪へがたく待つてゐた。それらの論文の筆者を知つてゐるものはほんの少數でしかなく、しかもトロツキイを知つてゐた人々は、彼が後年最も革命的な軍隊、世界の最も偉大な革命の、世に認められた指導者とならうとは、當時想像だもしなかつたのだ。』私が農民を無視したといふ事件は、もしそれがやれるとして、ヤロスラウスキーの手にかかると、一層工合の悪いものにすらなるのだ。私の文獻的勞作の最初のもの、農民に獻じたものであ

つた。こゝにヤロスラウスキーがそれについて言つてゐることがある。

『トロツキイはその生活の一切の微妙な點を踏査しないでは、シベリヤの村落に停つてゐることは出来なかつた。第一にまづ彼は、シベリヤの村落の行政機關に注意を向けた。彼は一聯の論文で、この機關についての輝かしい研究を興へた……』及び等々。『トロツキイは、彼の周圍に、たゞ村落しか見なかつた。彼はその窮乏状態について歎いた。彼はその朦朧な状態、その法律の保護の缺如によつて、心を壓せられた。』ヤロスラウスキーは農村生活に關する私の論文を教科書に編入するやうにと要求した。この凡てが一九二三年の二月のこと、即ち農村にたいして私が注意を拂はないといふ詩が、初めて創作されてゐた正にその月なのだ。しかしその時ヤロスラウスキーはシベリヤに行つてゐたので、まだよく、新『レーニニズム』について知つてゐなかつたのだ。

私が引用したいと思ふ最後の例は、スターリン自身に關するものだ。革命の第一週年記念の時のこと、彼は、別の形はとつてゐたが、眞直に私に向けた一論文を書いた。説明しておくが、十月革命のための準備の間、レーニンはフィンランドに隠れて居り、カメネフ、ジノヴィエフ、リューコフ、及びカリーニンは蜂起に反對して居り、誰一人スターリンについて何等知つてゐるものはなかつた。その結果、黨は十月革命に結びつけるに主として私の名をもつてした。十月革命の第一回記念祭中、スターリンは、私に向つて中央執行委員會による一般的指導を持ち出すことによつて、この印象を弱め

ようと企てた。しかし彼の見解を凡ての人々に受け容れられるものと爲すために、止むなく次のやうに書かなければならなかつた。

『實際に蜂起を組織した仕事の全部は、ペトログラード・ソヴィエツトの議長トロツキイの直接の指導の下で、遂行された。黨は、守備隊が急速にソヴィエツトに赴いたこと、及び軍事革命委員會の仕事を立てに組織したことについて、第一に最も多く同志トロツキイに負ふところがあつたと、何等躊躇なく言ふことが出来る。』

スターリンがこんな風に書いたのは、當時は彼ですらこれ以外どんな仕方でも書くことが出来なかつたからだ。『同志トロツキイは黨においても、また十月革命においても、何等特別の役割を演じはしなかつたし、また演ずることが出来なかつたのだ。』と、公衆のまへでスターリンが敢て述べ得るに到つた前には、數年の無拘束な息抜きが必要であつたのだ。彼はこの矛盾を指摘されると、單に彼の粗雑さを倍加することで、それに答へた。

『三幅對』^{トリア}はどんな場合でも、私に向つて彼等自身を對抗させることは出来なかつた。たゞレーニンを持出して来て、私に對抗させることが出来ただけだ。だがこれをやるためには、レーニン自身もはや三幅對に反對することが出来ないといふことが、必要であつた。言葉を換へて言へば、彼等の運動が成功するためには、致命的に病んでゐるレーニンか、又は彼が靈廟に香料を施された亡骸となつ

て横たはつてゐることが、必要であつたのだ。だが、これでもまだ十分でなかつた。その運動の間、私も亦鬪争陣營の外にあることが必要であつたのだ。このことが一九二三年の末に事實となつて現れた。

私はこゝで歴史哲學を取扱つてゐるのでなく、私の生活がそれに結びつけられてゐた諸事件を背景として、私の生活を見直してゐるのだ。ではあるが私は、偶發事がいかに親しく歴史的法則を助けるかを、注意しないではおれないのだ。廣く一般的に言へば、全歴史的過程は、偶發事を透しての歴史的法則の屈射だ。生物學の言葉で言へば、歴史的法則は偶發事の自然淘汰を透して實現される、と言つてもよいだらう。そこで偶發事を人爲淘汰の過程に従はせるところの意識的の人間活動は、この基礎に立つて、發展するのだ。

だがこゝで、私の記述を遮つて、デユブナ河畔、カロシノ村の、私の友達イヴァン・ヴァシリエヴィツチ・ゼエツエフについて若干述べておかなければならない。この地方は、ザボロチエ（沼地の向ふ側）として知られてをり、その名の示すやうに、狩獵物に豊富なところだ。こゝでデユブナ河は廣い地域にわたつてその地方に流れ出してゐる。沼、湖、及び蘆の生えた浅い澤が、約四十キロメートルの廣い帯となつて伸びてゐる。春には、こゝへ鶯鳥、鶺鴒、あらゆる種類の野鴨、たいしやくしぎ、

鶺鴒、およびその他一切の沼池の同胞が訪れて来る。二十キロメートル離れた邊りの、蘆苔の生えた小さい丘の方のちよつとした森の中には、山鶺鴒が赤いビルベリーの果汁を吸つて、クツクツと鳴いてゐる。イヴァン・ヴァシリエヴィツチは、短い一本の橈で、沼の堤防の間の狭い溝のなかを、彼の獨木舟を漕いで行く。この溝は誰も知らない昔、おそらく二三百年前か乃至それ以前に掘られたものであつて、自然に埋められてしまふのを防ぐために、毎年々々浚渫はれてゐるものに相違ない。我々は、夜明け前に天幕へ行きつづけたために、カロシノを眞夜中に出發しなければならなかつた。一步一步に、泥炭沼がよろめく丸太を浮かしてゐる。會つてこれがいつも私をぞつとさせた。しかしイヴァン・ヴァシリエヴィツチは、私が最初に訪れた時に、おそろしがりなで歩きなさい、湖では溺れて死ぬ人はあるが、沼ではこれまで會つて生命を落した者はない、と私に言つた。

獨木舟は軽くてぐら／＼するので、仰向きに寝てちつと動かないでゐる方が安全で、特に風の吹いてゐる時はさうだ。漕ぎ手は安全のために立膝でゐるのが普通だ。たゞイヴァン・ヴァシリエヴィツチだけは、もともとびつこではあるが、眞直ぐに立つてゐるのだ。イヴァン・ヴァシリエヴィツチはこの土地の鴨王だ。彼の父、祖父、曾祖父、いづれも鴨とりであつた。おそらく彼の祖先の誰かは、イヴァン恐怖王の食卓へ、鴨、鶯鳥、鶺鴒を提供したのであらう。ゼエツエフは、沼鶺鴒、山鶺鴒、或はた、いしやくしぎなどは少しも顧みなかつた。問へば彼は『わしの仲間ぢやない。』とぶつきら棒に云ふだ

らう。しかし彼は、鴨のことなら何から何まで、その羽根、鳴聲、魂まで知つてゐる。イヴァン・ヴァシリエヴィツチは、動く獨木舟に立つて、水の中から一本の羽を拾ひあげ、それから二本目、三本目と拾ひあげ、それをちつと眺めたあとで、叫ぶのだ。

『グシチノへ参りませう、鴨は昨夜あそこで休んだんですよ。』

『どうして分るかね？』

『ほれお覽の通り、羽が水に浮いてゐて、まだ水が滲み込んでゐません。新しい羽根ですよ。昨夜、鴨が飛んでゐたが、グシチでなくちや、この邊に鴨の飛んで行けるところはないんですよ。』

そんなわけで、他の狩獵者が一と番か二た番獵つて歸るのに、イヴァンと私は五つ番か、時とする^{つがひ}と八番も持つて歸るのだ。彼の手柄で、私の名譽だ。そんなことはしばしば日常の生活にもあるのだ。蘆の天幕のなかで、イヴァン・ヴァシリエヴィツチはよく棕櫚の葉を彼の唇へ持つて行つて、鴨のやうにがあくくと鳴き始める、それがいかにもやさしいので、度々ねらはれた非常に用心深い雄鴨でも、その魔術にかゝつてしまつて、天幕のまはりに泳いで来るか、水の上へ二三歩ばかり不意に飛び立つ、そんなわけで、實際それを射るのが氣恥しくなるくらゐだ。ゼエツエフはあらゆることに注意し、あらゆることを知り、あらゆることを感知する。『さあ用心して、』と彼は私に囁く、『雄鴨があなたの方へ眞直ぐに飛んで來ますよ。』私は、森のうへ遙かに二つの點のやうな羽根を認めるが、

これが雄鴨だとは見定めることは出來ない——さういふ秘密は、鴨ギルドの大親方、イヴァン・ヴァシリエヴィツチにしか開かれてゐないのだ。だが、じつさいに雄鴨は私の方に向けて飛んで來る。そこでもし君が射ち損ずると、イヴァン・ヴァシリエヴィツチは低い、つしましやかな呻き聲を發するだらう——だが、君の背後でこの呻き聲を聞くよりも、むしろこの世に生れて來なかつた方がいいのだ。

戦争前、ゼエツエフは或る紡績工場で働いた。冬になると彼は火夫になるため、または發電所で働くために、モスコウに出て來る。革命後の最初の數年間、あらゆるところに戦闘が行はれ、森や泥炭沼は焼かれ、野原は裸になつてしまひ、鴨は飛ばなくなつた。するとゼエツエフは新しい制度に疑問を持つた。だが一九二〇年後には、鴨がふたたび——こんどは群をなしてやつて來るやうになり、イヴァン・ヴァシリエヴィツチはすつかりソヴィエツト權力を認めた。

こゝから約二キロメートルのところに、小さなソヴィエツト燈心工場が一箇年存在してゐた。その支配人は私の軍事列車の以前の運轉手であつた。ゼエツエフの妻と娘は、そこから月々約三十ルーブルを持つて歸るのが常であつた。これは空前の富であつた。だが、その工場は間もなくその全地域に燈心を供給して、閉鎖されてしまつた。そこで再び鴨がこの家庭の生活の基礎となつた。或る年のメーデーに、イヴァン・ヴァシリエヴィツチは、モスコウの或る大劇場で、舞臺にならん

だ招待者の間に彼自身を見出した。イヴァン・ヴァシリエヴィッチはびつこの足を下にして、第一列に坐り、ちよいと當惑した風だったが、いつものやうに、はつきりした威厳をもち、私の報告を傾聴した。彼はムラロフによつてそこへ招かれて來たので、ムラロフはいつも私と狩獵の悦びや悲しみを分つ仲であつたのだ。イヴァン・ヴァシリエヴィッチはその報告を非常によろこび、絶対に何も彼も理解し、カロシノへ歸つてそれをすつかり報告した。このために我々三人の友情は以前にも増して厚いものとなつた。古い獵師達、特にモスコウ附近から來た人たちは、すつかり墮落してをり、大地主と接觸して、何れも阿諛と、虚言と、馱法螺の達人であつた——これは注意されなければならぬ。ところがイヴァン・ヴァシリエヴィッチは違つてゐた。彼は非常な單純性と、觀察力と、個人的威厳とを持つてゐた。彼が心から商人でなく、一個の藝術家であつたのは、このためだ。

レーニンもゼツエフと狩獵に行つた。イヴァン・ヴァシリエヴィッチはいつも木造小屋のなかの或る箇所を指して、そこで枯草の上にレーニンが寝ころんだのだと言つてゐた。レーニンは熱情的に狩獵が好きであつたが、狩りに出掛けることは稀であつた。彼は、重大な事柄では非常に自制力をもつてゐたが、狩りに出掛けると、定つて興奮した。偉大な戰略家も將棋になるといつも下手な遊び手であるやうに、政治的狙撃には天才を具へた人達でも、射撃家としては平凡であることが出来るものだ。レーニンが、あたかも取返しつかぬものを心に描いてゐるかのやうに、ほとんど絶望的に、自

動車で狩りに出かけて二十五歩のところを狐を射ち損じたことを私に歎いてゐたのを、私は覚えてゐる。私は氣の毒でたまらなかつた。

レーニンと私は、一緒に狩りに出る約束をし、いく度かしつかりそのプランを立てたのだが、遂にそれをやる機會がなかつた。革命後の最初の數年間は、概してかういふことをやる時間がなかつた。レーニンは時折、何とか都合してモスコウを離れて、天空廣潤なところへ出たが、私は鐵道列車、事務局、又は自動車からほとんど解放されることがなく、一度も獵銃を手にしなかつた。そしてその後内亂がすんだ後では、いつも豫期しない何事かと持ち上つて、我々のどちらかと約束を果すことを妨げた。その後レーニンの健康が悪くなり始めた。彼が床につく少し前に、我々はチヴェル地方のシヨサ河で會はうと約束した。だがレーニンの自動車が田舎道で動かなくなつてしまつて、私は空しく彼を待つてゐた。第一回目の急變から回復した時、彼は狩獵に出度いと執拗に言ひ張つた。結局醫師達は、あまり無理をしないと云ふ條件で、降參してしまつた。ある農學上の會議の席上で、レーニンはムラロフの側へ行つて訊ねた。『君とトロツキイは時々一緒に狩りに出掛けるつてねえ？』

『ええ、時々。』

『で君は、いい獵をするかね？』

『時々は。』

『僕をつれて行かないかね？』

『でもあなたはそんなことの許しを得ていらつしやるんですか？』と、ムラロフは注意深く訊ねた。

『もちろん許されてゐる……だから僕をつれて行かないかね？』

『それをどうして僕がお断り出来ませうかね、ウラヂミル・イリイツチ？』

『では君を呼びにやつていいかね？』

『私達はお待ちしてゐますよ。』

だがレーニンと呼びによさなかつた。その代りに彼の病氣が第二回目の急變のベルを鳴らした。それから死。

この傍語の凡ては、一九二三年十月の或る日曜日に、私はどうして且つ何故に、ザボロツエに、沼地と、蘆のなかにゐたかを説明するために、必要だつたのだ。その夜は、薄い霜が下りてゐて、私はフェルト裏の長靴を穿いて、天幕にやすんだ。然し翌朝は日光が温くつて、霜は解けた。自動車は土地の高くなるところで私を待つてゐた。内亂中、互ひに體をくつつけて働いた運轉手のダヴィドフはいつものやうに、私が何をして遊ぶのか、それを知らうとしてぢり／＼してゐた。獨木舟から自動車まで、約百歩だけ歩かなければならぬので、それ以上の距離ではなかつた。しかしフェルト裏の長靴で、沼のなかへ足を下した瞬間に、私の足は冷たい水に浸された。自動車に飛び上つた時までには、私

の足は全く冷え切つてゐた。ダヴィドフのそばに坐つて、私は長靴をぬいで、發動機の熱で足を温めようとつとめた。だが寒氣が全身をとらへた。私は寢床につかなければならなかつた。流行感冒のあとで、何かしら腺窩炎的の發熱がした。醫師達は私に安靜を命じ、こんなわけで私はその年の秋と冬をさうして費したのだ。一九二三年の『トロツキイズム』の討議の始めから終りまで、私が病氣であつたのは、このためなのだ。革命乃至戦争は豫見することが出来る、だが、野鴨を狩る秋の狩獵の結果を豫見することは、不可能だ。

レーニンはゴルキー村に横臥してをり、私はクレムリンに在つた。亞流共は、陰謀の範圍を擴めつた。最初彼等は、彼等の賞讃にます／＼多量の毒藥を附加し、注意深く、こつそりとそれをやつた。彼等のうち最も性急のジノヴィエフでさへ、私の誹謗にめぐらすに保留をもつてしたのだ。一九二三年十二月十五日、ペトログラードの黨協議會において、ジノヴィエフは言つた。『同志トロツキイの權威、ならびに彼の奉仕は、凡ての人々に知られてゐる。我々の間では、それについて述べる要はない。だが、過失はいつまでも過失だ。私が過失を犯した時、黨は十分に峻嚴に、私を攻撃したのだ。』等々が久しい以前から隱謀者の特性の一つだつたかの臆病ではあるが、進撃的な調子で叫ばれた。彼等は、彼等の足場を一層深くさぐつて見、陣地を更に多く占領した後で、始めて勇敢になつ

て行つた。

一つの全き科學が、人爲的評判を製造し、幻想的自叙傳を構成し、任命された指導者を擔ぎ上げるために、創造された。特殊な小さな科學は、プレジデント名譽議長席の問題に捧げられた。十月以來、名譽議長席にはレーニンとトロツキイを選ぶのが、諸々の會議での慣習であつた。この二つの名前の組合せは、日常の演説、論文、詩、及び民衆小歌に取入れられてゐた。ところがいま、この二つの名前を、尠くとも機械的に分離して、後になつて政治的に一つを他に對抗させることが出来るやうにすることが、必要となつた。そこでいま議長席は、ポリトビュローの全委員をふくむこととなり始めた。それからその委員がA・B・C順で、表に名を連らねられることとなり出した。その後、A・B・C順は廢されて、指導者に階級をつけることとなつた。第一位にはジノヴィエフが記載されるやうになつた——これはベトログラードが範を示したのだ。しばらく経つと、名譽議長席は、まったくトロツキイの名を除いてしまつて、そこへに現れて來た。參集者からの嵐のやうな抗議が、いつもこれに答へ、時としては議長が私の名前のないのは過失だつたと説明せざるを得なかつた。だが、新聞の報道はもちろんこの點については沈黙してゐた。それから第一位がスターリンに與へられ始めた。もし議長が、彼の爲すべきことを察するほど、十分に聰明でなかつた場合には、彼はいつも諸新聞紙で訂正された。名譽議長席の名前の排列にしたがつて、人物の經歷がつけられたり、廢されたりした。この仕事、

一切のうちで最も執拗な、組織的なこの仕事は、『指導者崇拜』にたいする闘争の必要といふことで、正當化された。一九二四年一月のモスコウ會議で、プレオブラツェンスキイは亞流共に言つた。『然り、我々は指導者崇拜に反對である。しかし我々は、一人の指導者を崇拜する代りに、その指導者よりも小型の多くの指導者の崇拜を教へることに亦、反對である。』

私の妻は彼女の回想録に書いてゐる。『それは苦しい日であつた、爾餘の委員にたいして、ポリトビュローでレウ・ダヴィドウィツチのために激しく闘争した日であつた。彼は獨りで、且つ病んで居り、しかも彼等全部と戦はなければならなかつた。彼が病氣のために、會合は私達のアパートメントで開かれ、私は隣室に坐つて、彼の演説を聞いた。彼は全存在でもつて演説した。あたかもさういふ演説をする毎に、彼は彼の力の或るものを失つたかのやうに思はれた——彼はそれだけの「血」で語つた。そしてそれによつて、私は冷い、無關心な返答を聞いた。もちろん凡てのことが前もつて決定されてゐたのであるから、何で興奮する必要があつたらう？ さういふ會議の後にはいつでも、レウ・ダヴィドウィツチの體温は頂點に達し、彼は汗みどろになつて書齋から出て來て、衣物をぬいで、床に就いた。彼のシャツや衣物は、雨嵐に濡れでもしたやうに、乾かさなければならなかつた。その時分、會議は頻々と行はれ、レウ・ダヴィドウィツチの部屋で開かれたが、その部屋の色の褪せた、古い絨毯は、毎晩私の夢のなかへ、生きた豹の形をとつて現れ、晝に行はれた會議は夢魔となつ

た。これが、公然の闘争となる以前の、闘争の最初の段階であつた。』

○ その後のジメヴィエフ及びカメネフのスターリンにたいする闘争において、この時期の秘密が、隠謀の加盟者自身によつて暴露された。といふのはそれが實際に隠謀であつたからだ。七名から成る秘密の政治部局が形成された。これは私を除いた公のポリトビュローの全員を擁するもので、そこには、現在の最高經濟會議の議長、クビシエフもふくまれてゐた。一切の問題は、前以つてその秘密の中心で決定され、その中心では各委員は相互の誓約で結びつけられてゐた。彼等は、お互ひの間で論戦しないやうに努め、同時に私を攻撃する機会を見出さうとした。地方的の諸組織にも同様な中心があり、それらは厳格な規律によつてモスコウの『七人』と結びつけられてゐた。通信には、特別の暗號が用ひられた。これは、本來一人の人間に向けられた、党内の立派に組織された非合法グループであつた。黨及び國家における責任ある働き手は、トロツキイ反對といふたゞ一つの基準によつて、組織的に選擇された。レーニンの病氣から生じた長い『空位』の間、この仕事は倦むことなく、しかもなほ秘密の中に行はれて、レーニンが回復した場合には、爆弾を仕掛けた橋梁は、そのまま觸れられずに保存され得るやうになつてゐた。隠謀者達は、暗示で活動した。諸地位への候補者は、彼等の爲すべきことを察知する必要があつた。『察知』した人々は、階段を上つて行つた。この戦ひで、一つの特別な『出世主義』が發展し、それが後になつて、恥しげもなく、『反トロツキイズム』の名を受け

たのだ。レーニンの死は、隠謀者達を自由にし、彼等をして、公然と姿を現すことを許した。人物選擇の過程は、低級なものとなつて行つた。いまや何人も彼の反トロツキイズムを證明しないでは、工場の支配人の地位も、黨の地方支部の書記、農村の執行委員會議長の地位も、簿記掛またはタイプストの地位も、これを得ることが出来なくなつた。

○ この陰謀に反對の聲を挙げた黨員は、全く縁遠い理由、時にはでつち上げられた理由による兇惡な攻撃の犠牲となつた。これに反して、最初の五年間、容赦なく黨から驅逐されて來た節操のあやふやな分子が、今は、トロツキイに敵意を持つた言葉を一言吐くことによつて肩で風を切つた。一九二三年の終りから、同じ隠謀がコンミニュニスト・インターナショナルの各支部で行はれた。指導者の或る者は抛り出されて、その後任には、トロツキイに對する態度如何を唯一の基礎として他の連中が任命された。根氣のいゝ人爲的な選擇——最善者を選択することではなくて、最も都合のいい者を選択することが行はれて來た。獨立的な、有爲の人物の代りに、黨機關のお蔭でその地位を保つてゐるといふやうな凡庸な連中を置き換へることが、一般政策となつた。この黨機關の凡庸化したことの最高の表現は、スターリン自身があの地位に登り上つたことだ。

第十六章 レーニンの死と権力の移轉

『君が権力を失ふとはどうしたことだね？』——と、かう、私はよく訊かれたし、今でもまだ訊かれる。大抵の場合、かうした質問の底には、権力を失ふといふことが、時計やノート・ブックのやうなものもなくすると同じく、何か形を持った物體をなくすることだといつた素朴な觀念がひそんでゐる。だが、事實としては、権力の獲得を指導した革命家たちが、或る段階に到つて、平和的にせよ大悲劇によるにせよ、権力を失ふ場合、さうした事實がすでに、支配的革命團體内における一定の思想、氣分の影響力の衰頹、或は大衆自身の間における革命氣分の衰頹を意味してゐる。もしくは、同時にその兩方であるかも知れぬ。地下から姿を現した黨の指導者グループは、革命の初期の指導者たちが明確に系統化し完全に見事に實行し得たところの革命的傾向を吹込まれた。彼等を黨の指導者たらしめ、黨を通じて労働階級の指導者たらしめ、労働階級を通じて一國の指導者たらしめたものは正しくこれだ。かうして、一部の個人の手に権力が集中されたのであつた。だが、一國の直接権力を握つた党内層の意識にあつては、さうした革命初期の思想の影響力が失はれて行つた。

國そのものにあつては、いはば、反動といふ一般的な名稱の下に總括し得べき過程が形づくられて

行つた。かうした過程は、程度の差こそあれ、労働階級にも波及し、黨までも其中にまきこまれた。

権力機關を構成してゐるところの党内層は、得手勝手な目的を發展させて革命なるものをその得手勝手な目的に従屬させようと努めた。階級の歴史の線を明かにし、機關の限界を超えて見通し得る幹部と、機關そのもの——つまり、ありふれたコンミュニスをも手軽く吸収するところの、巨大な、厄介な、雑種のもの——との間に、分裂があらはれ始めた。最初、この分裂は政治的な性質よりもむしろ心理的なものであつた。過去はまだ心にまざ／＼と生きてゐた。十月のスローガンは記憶から消えてはゐなかつた。また初期の指導者の權威もまだ強かつた。だが、傳統的な形式の陰に、一種ちがつた心理が發達しつつあつた。國際的な展望もぼんやりして來た。日常生活の常規が、すっかり民衆の心を奪ひつつあつた。新しい方法は、古い目的に役だつことはしないで、新しい目的、就中、新しい心理を創造しつつあつた。多くの連中の眼には、一時的な形勢が窺極の決勝點であるか見え出した。新しい型の人間が作り出されて來た。

どこまで分析して行つても、革命家なるものも、他の人々と同じ社會的素質からできてゐるのだ。しかしながら、歴史的過程によつてこの革命家たちが他の人々から選り分けられて、一つの特別なグループに集められるについては、それだけ何等か非常にちがつた個人的性質が、かうした革命家にはあるにちがひない。他人との提携、理論的な活動、一定の旗印の下における鬭争、集團的な規律、猛

火の如き危険の下における鍛錬、——かうしたものが、次第に革命家の型を形成する。一例として、ボリシエヴィキ心理的型をメンシエヴィキのそれに比較して見れば間違ひはない。極くたまには見當違ひはあるにしても、相當經驗の積んだ眼ならば、外見によつてボリシエヴィキとメンシエヴィキの見分けがつくのだ。

しかしながら、かうだからといつて、一ボリシエヴィキ黨員が、常に且つ何事にもボリシエヴィキだとは限らない。一定の哲學的見通しを血や肉の中にまで吸収し、この哲學的見通しを自己の意識の支配者とし、この哲學的見通しと感覺の世界を調和せしめることは、萬人が萬人にめぐまれてゐるわけではなく、極く少數の者にしかめぐまれてはゐない。労働大衆には、その代用物として階級本能があり、それは、決定期にあつては極度の敏感さを帯びる。だが、黨及び國家機關内には、大衆出身であるが、すでに永く大衆から離れ、その地位のために、遊離した獨得な階級に置かれてゐる革命家が澤山ある。彼等の階級本能は蒸發してしまつてゐる。と同時に、彼等は、ものゝ過程をその全體性において視るだけの理論的安定と視野を缺いてゐる。彼等の心理には、防禦工事の施されてない面がたくさん残つてゐる。さうした面は、環境の變化とともに、彼等を、外敵のイデオロギー的影響の容易に滲透して來る危険に曝すのだ。地下的鬭争、暴動、内亂の時代には、この種の型の人々は、黨の單なる兵卒にすぎなかつた。彼等の心は一本調子であり、それは黨の音叉と相和した。だが、緊張が弛

み、革命の遊牧民が固定した生活へ轉移するとき、市井人の性癖や、己惚れ上つた役人の趣味、魅力が、再び彼等の身内に頭を擡げた。

私は、カリーニンやヴオロシロウやスターリンやリューコフのたわいもない言葉を耳にして、びつくりしたことは一度や二度ではない。どこから、かうしたことが起るのか？——と私は自分自身に訊ねた——どんな泉から、それは湧き出るのか？ 私が會合に出かけて行く、そして談笑してゐるグループに出會すとき、さうしたグループが、私の姿を見ると話をやめてしまふことも屢々だつた。さうした會談の中に私に對する攻撃があつたわけでもなければ、黨の原則に背反した話があつたわけでもない。だが、彼等の態度には、道徳上の弛るみがあり、自己満足があり、下らなさが見えた。人々はかうした新しい氣分——さうした氣分の中では、俗惡なゴシップ的な要素が非常に重要な位置を占めることになる——をお互ひに注ぎ交はす衝動を感じ始めた。それ以前は彼等も、さうしたことが、レーニン或は私の面前ばかりでなく、お互ひの間でも、不躰であることを辨へてゐた。例へば、スターリンに野鄙な眞似があると、——レーニンは書類から頭をあげることもしないで、誰か他にさうした言葉に不快な思ひをしてゐるものはないかといふ風に、あたりを見廻すのであつた。そんな場合、レーニンと私の、心理學的な人物評價の一致を明白に現すものは、一つの眼くばせ、聲の抑揚だけで十分だつた。

支配的新黨内層の生活に次第に多くなつて來た娛樂に私が参加しなかつたとしても、それは、道德上の理由からではなくて、さうした面倒臭いことに煩はされなくなかつたからであつた。お互ひの家庭訪問、舞踏會にせつせと通ふこと、座にゐない者をクソ味噌にやつつける宴會——そんなものはちつとも私に魅力がなかつた。新しい支配者グループの方では、さうした方面の生活は私に不似合だと感じて、私を口説き落さうとしなかつた。私が姿を見せるや否や、會談がぱつたり歇むことが多かつたのも、この理由からであつて、會談してゐた連中は私に對して少々きまり悪るげに又多少忌まじましい氣持で、話を切上げるのだつた。それは私が權力を失ひ始めた確かな兆候だと、見たければ見て差支へなう。

こゝでは、私は問題の心理學的一面に言葉を限つてゐるのであり、問題の社會的根柢、つまり革命的社會の構造上の變化は除外してゐるのだ。もちろん、窮極のところ、問題を決定するものは、かうした變化だ。だが、現實生活で、直接ぶつつかるものはかうした變化の心理的反映だ。内面的な事情といふものは、むしろ徐々に展開して上層部の分子的變化作用を助長し、二つの融和し難い立場を比較する緒を大衆に與へなかつた。おまけに、前に云つた新しい氣分は永い間、傳統的公式の假面をかぶつてゐたし、現在なほさうなのだ。このことは、益々以て、新陳代謝の作用がどの程度にまで進んでゐるかの判断を困難にした。十八世紀末のテルミドールの陰謀は革命の前々から用意されて、不意

に起り、血なまぐさい大詰の形をとつた。我々に對するテルミドールの陰謀は、非常に永引いた。ギロチンは——少なくとも一時——奸計に置き換へられた。過去のごまかしが、コレヴェヤー装置を以て組織だてられて、官僚的政黨のイデオロギー的な新武裝の武器となつた。レーニンの病氣と、レーニンが指導者の位置に復歸する見込とが、一時、形勢を漠然たるものにし、かうした形勢が、時に中斷しはしたが、二箇年以上も續いた。もし、革命が上向期にあつたならば、この猶豫期間は反對派に有利になつたらう。だが、國際的規模における革命は、次から次へと敗北を受け、従つて、この猶豫期間は、私及び私の政治上の仲間に對するスターリンの官僚主義を自動的に強めることによつて、國民的改良主義の手に有利になつてしまつた。

永久革命の理論に關する、底の底まで俗人的な、馬鹿げ切つた中傷は、かうした心理的な根源から生じた。酒の席の雑談或は舞踏會の歸り路で、いやに氣取つた役人連が互ひに話し合ふ。——『奴と來たら、永久革命のことしきや考へられないんだ。』非社交性、個人主義、貴族趣味に關する非難が、この特殊な氣分にびつたりと結びつけられた。『さう革命のことばかり考へちやをられない、たまには自分の身も可愛いや』といふ生活感情は、『永久革命をやつゝける』と翻譯された。マルキシズムのこむづかしい理論的な諸要求や、革命のこむづかしい政治的な諸要求に對する反抗が、この人達の頭の中では、『トロツキイズム』に對する鬭争の形態をとるやうになつたのだ。かうした旗印の下

に、ポリシエヴィキの中の俗人連の遊離化が進行してゐたのだ。私が権力を失つたのはこのためであり、私のこの敗北の形態も、これによつて決定されたのだ。

前に述べたやうに、レーニンは、その臨終のベッドから、スターリンとその一味のヂエルゼンスキーやオルズオニキヅに一撃を加へようとしてゐた。レーニンはヂエルゼンスキーを高く評價してゐた。ヂエルゼンスキーが自分はレーニンから経済的な仕事の指導の才があると思はれてゐないと氣づいた時から、二人の間が疎遠になり出した。ヂエルゼンスキーをスターリンの腕に飛び込せたものはこれであり、そこでレーニンは彼をスターリンの支持者の一人として叩きつけようと決心したのだ。オルズオニキヅに就ては、レーニンは、この男の總督振りを理由に黨から驅逐しようと思つてゐた。スターリン、ヂエルゼンスキー、オルズオニキヅに反對してヂョルヂアのポリシエヴィキを支持すると約束したレーニンの覺書は、ムヂヴァニへの宛名になつてゐる。かうした四人の運命は、スターリン派によつて企まれた黨内の大風の跡のやうな大異動に、一番はつきりとあらはれてゐる。レーニンの死後、ヂエルゼンスキーは最高經濟會議つまり一切の國家産業を一手に握る機關の首席に置かれた。除名候補名簿に乗せられてゐたオルズオニキヅは、中央統制委員會の首席にされた。スターリンは、レーニンの意志に反して、書記長に留つてゐるばかりでなくて、黨機關によつて前古未聞の権力を與へられてゐる。最後に、レーニンがスターリンに反對して支持したブヅ・ムヂヴァニは、今、ト

ホルスクの監獄にある。同じやうな『顔觸れ替へ』が、黨の指導的人員全體にわたり、またインターナショナルの各黨全部にわたつて實行された。亞流共の時代と、レーニン時代の隔たりは、單に思想の溝ばかりではなくて、黨の組織の大々的顛覆による懸隔だ。

この顛覆を實現した主な道具はスターリンだつた。スターリンは實際的な稟性を持ち、強い意志と、目的を遂行するにあたつての執拗さを持つてゐる。彼の政治的視野は狭く、理論的な頭腦の装置は原始的だ。彼の編著『レーニニズムの基礎』は、彼が黨の理論的傳統にお世辭を呈しようとした試みであり、學生臭い馬鹿げた誤りだらけだ。彼は、外國語を知らないために、外國の政治生活を受け賣りで知るより仕方がない。彼の心は始末に了へないほど經驗本位で、創造的な想像力に缺けてゐる。黨の指導的グループでは(もつと廣汎な仲間では、全然知られてゐなかつた)いつも、第二或は第三ヴァイオリン手だと定められた男であつたやうだ。その彼が、今日第一ヴァイオリン手を演じてゐるといふ事實は、この男に對する總勘定ではなくて、むしろ、この一國の政治的後退の過渡期の總勘定である。エルヴェチウスが、すつと昔に云つてゐる。——『各時期にそれ／＼の偉大な人物があり、若しさうした人物がない場合には、さうした偉大な人物をで、つち上げる。』と。さもなければ、要するに、スターリンは、革命の下向期に非人格的な機關が自動的に作り出した産物である。

レーニンは一九二四年一月廿一日に死んだ。死はレーニンにとつて、單に肉體上、精神上の苦痛か

ら救はれることに過ぎなかつた。まだ意識が完全にはつきりしてゐるときに、あれほど身體の自由のきかなかつたこと、殊に言語を云ふの力をなくしてゐたといふことは、堪へられないほど情けなく感じたらしい。醫師連の意見がましい口調や、ありふれた冗談や、心にもない力づけに我慢できなくなつた。また、言語の云へる時分、レーニンは、思ひ出したやうに、醫師連に質問を試み、醫師連の不用意な矛盾を捉へ、説明の追加を強要し、自分で醫書を走り讀みした。この場合でも、例によつて例の如く、レーニンは、何よりも先づ、明確さを求めてゐたのだ。レーニンの我慢できた唯一の醫師はフョードル・アレクサンドロウイツチ・グエチエールだつた。腕のいゝ醫師で、善良な人間で、御機嫌取りの片影も持たないグエチエールは、純な愛情からレーニンとクルプスカヤに惹きつけられてゐた。レーニンがほかのどの醫師も近くへ寄せつけない時期にも、グエチエールは相變らずレーニンを往診した。グエチエールはまた、革命の年月を通じて、私の家庭の親友であり、かゝりつけの醫師でもあつた。グエチエールのお蔭で、私達は、ウラルデミール・イリイツチの容態に關する最もたしかな、最も聰明な報告を得、非人格的な公報を補足し訂正することができた。

一度ならず、私はグエチエールに、レーニンが恢復する場合、はたして智力が失はれずにあるかどうかを訊ねた。グエチエールはこんな調子の返辭をした。——疲勞の傾向は大きくなる、仕事に以前のやうな明確さはなくなるだらう、しかし名人はどこまでも名人であらう、と。第一回の急變と第二

回の急變の中間期に、この豫測は一言一句確證された。ポリトビエローの會議の終り頃には、レーニンは、どうにもならないほど疲れた人間といふ印象を與へた。顔の全筋肉はたるみ、眼の艶は消え、彼獨得のがつしりした前額までが萎縮したやうに見え、肩はげつそりとたれさがつた。顔の表情、それから全體のもの腰を要約すれば、それは、疲れた——といふ一言に盡きた。そうした、うす氣味のわるい時には、レーニンは死刑を宣告された人間のやうに私には思へた。しかし、ぐつすり一晩安眠すると、また彼は思考力を回復するのであつた。この二回の急變の中間に書いた論文は、レーニンのどの著述にくらべても遜色はない。源泉の水にかはりはないが、その流出はしだいに減つて來た。第二回の急變後だつて、グエチエールは一切の希望を捨てはしなかつた。だが、グエチエールの報告はたえず悲觀的なものになつて行つた。病氣はのろ／＼と進んだ。悪意もなく慈悲もなく、盲目の自然力はこの偉大な病人を無能力の状態にひきずり込んで行き、その状態からのがれる道もなかつた。レーニンは廢人として生きようたつて生きられる人でもなかつたし、また廢人として生きる筈の人でもなかつた。だが、それでも、我々は、レーニンの恢復の望みを捨てなかつた。

一方、私自身の病氣もあまり抄々しくなかつた。『醫師の強請で——とエヌ・イー・セドーヴァは書いてゐる、——エル・デイは田舎へ轉地させられた。そこへグエチエールが病人を見舞うて來た。グエチエールは病人に對してやさしい心遣ひを持つてゐた。政治はこの人には興味がなかつたが、私

どもに對して、どういふ風に同情を表していいのやら知らず、ひどく悲しんでくれた。エル・デイの迫害は、この人に思ひがけないことだつた。見當がつかないで、看病しながらも心を痛めてゐた。アルハンゲルスコエで、グエチエールは、躍起となつて、エル・デイをスクームに連れて行く必要を私に告げた。たうとう、私どもはさうすることに決めた。バクー、チフリス、バツームを過ぎて行く旅はそれだけでも長いのに、鐵道を埋めた吹雪のために一層長いものとなつた。だが、旅行は心を慰める効果を持つてゐた。モスコウを遠ざかるにつれて、最近モスコウで感じてゐた鬱陶しさから脱け出して行つた。だが、それにも拘らず、私は、まだ大病人のお伴をしてゐる氣がした。不安さが忍耐心を悩ました——スクームの生活はどんなものだらう？　そこでは、敵の中にゐるのだらうか、味方の間にゐることになるのだらうか？』

一月二十一日、私達はスクームへの途中、チフリスの停車場にゐた。私は自分の客車の仕事部屋に妻と坐つてゐた。その時節の常として體熱が高かつた。そこへ、扉にノックがあつて、私の忠實な助手で、スクームへ私を連れて行くセルムクスが這入つて來た。這入つて來る彼の物腰、それから私に紙片を渡し、硝子のやうな眼つきで私を見返るときの彼の鉛色の顔から、私は變事を感じた。それはレーニンの死を報ずるスターリンの暗號電報だつた。私はそれを妻へ渡した。妻は、もう、すつかり推し當てゝゐた。

チフリスの官憲も、まもなく同じやうな電報を受取つた。レーニンの訃報は波紋となつて擴がつて行つた。私はクレムリンへ直通電報を打つた。私の問ひに答へてかう云つて來た。——

『葬儀は土曜日になる。君は引返しても間に合はないのだから、我々は君の治療を續けられんことをお奨めする。』

と云はれて見れば、私だつて他に仕様もなかつた。本當のところは、葬儀は日曜日までは行はれなかつたし、それまでにモスコウへ引返さうと思へば、やす／＼と着くのであつた。信ぜられないやうに見えるかも知れないが、私は葬儀の期日に就てまで欺されたのだ。私が葬儀の期日をたしかめるやうなことも考へないだらうし、あとでならんとか云ひわけも立つといふ陰謀家連の推測は、はづれなかつた。レーニンの第一回の急變のニュースが三日後まで私に通報されなかつた事實を、私は想起せざるを得ない。これは一つの定石であつた。目的は『機を制する』にあつた。

チフリスの同志達は私に早速レーニンの死に就て書けとせがんで來た。だが、私は矢も楯もたまらない唯一の欲求しか知らなかつたし——そして、それはひとりぼつちでゐたいといふことだつた。私は手をのばしてペンを取り上げることもできなかつた。モスコウ電報の簡単な文言が、まだ腦裏に響いてゐた。列車に群り寄つた人々は返辭を待つてゐた。無理もなかつた。列車は三十分間停止され、私は告別の辭を書いた。——『レーニンは逝つてしまつた。レーニンはもはや居ない。』肉筆の數頁

の言葉は直通電報で送られた。

『私どもはすつかり氣落ちして到着した。——と妻は書いてゐる——スクームは初めての土地だつた。含羞草は花盛りだつた——スクームにはこの樹が澤山あつた。すばらしい椰子樹。椿。一月だつた。モスコウでは嚴寒だつた。アブハダイアン人は親しげに私どもを到着を迎へてくれた。休憩室の食堂の壁には二箇の肖像畫がかゝつてゐた。——一つは黒布をかけられた——ウラヂミール・イリイツチの像、今一つはエル・デイのだつた。私どもはそれを取りはづしたかつたが、さうしたこともあまり大袈裟に見えるだらうと考へた。』

スクームで、私は永い間、海に面したバルコニーに臥て暮らした。一月だといふのに、太陽は暖かくほがらかだつた。バルコニーと光る海との間には巨きな椰子樹があつた。絶間のない熱感レーニンの死の考へとこつちやになつた。私は、心の中で、自分の生涯のあらゆる時期を経験した。——レーニンとの會見、お互ひの不一致、論争、新に盛り返へされた友情、仕事上の協力。箇々のエピソードが夢のやうなあざやかさで現れた。次第に、さうしたすべてが絶えず鋭どくなつて輪郭を取り始めた。びつくりするほどはつきりと、私は、瑣末なことでは自分等の先生に忠實だつたが大きなことでは忠實ならぬ『お弟子たち』を見た。海の空氣を息一ぱい吸ひこむとき、私は亞流共に反對する私の歴史的正当さの確信を、力一杯攝取した。

一九二四年一月二十七日。紺碧の天蓋の下にきら／＼と輝いて、椰子樹の上にも海面にも靜寂が支配してゐた。と、だしぬけに、大砲の一齊射撃によつて靜寂は破られた。號砲はどこか下の方の、海岸で行はれてゐた。その時刻モスコウに埋められた指導者に對するスクームの敬禮であつた。私は故人を想ひ、あれほど多年の間、故人の生涯の伴侶であり、故人を通じて世界に知られて來た婦人の事を想つた。今、彼女は故人を埋めてゐる。彼女を取り圍んで悲しむ——だが彼女の悲しむやうには悲しむことのない幾百萬人の中に、彼女は孤獨を必ずや感じてゐるにちがひない。私はナヂエズダ・コンスタンチノヴナ・クルブスカヤのことを想つたのだ。私は、現在ゐるところから一言挨拶、同情、いつくしみの言葉を云ひたかつた。だが、さうする氣になれなかつた。起つた事實の前に言葉といふものはあまり輕すぎた見えた。なんだかおさなりなものにしか聞えないことを懼れた。だから、數日後、ナヂエズダ・コンスタンチノヴナから手紙を受取つたとき、私は感謝の念に打たれてしまつた。これがその文面である。——

『愛するレウ・ダヴィドヴィツチ

お知らせしようと思ふのはほかのことでもありません。それは死の一箇月あまり前のこと、ウラヂミール・イリイツチはあなたの書物を見てゐましたが、あなたがマルクスとレーニンを要約してゐる箇所へ來ると私にくりかへし讀めと云ふのです。極く注意深く耳を傾けてゐるかと思ふと、今

度はそれを自分でまた読みかへしました。それから、も一つお知らせしたいと思ひます。あなたがシベリヤからロンドンの私どものところへ来た當時、ウ・イーがあなたに向けた態度は、死の時まで變りませんでした。レウ・グヴィドヴィツチ、あなたの力と健康を祈りながら、心から抱擁を捧げます。

エヌ・クルプスカヤ』

ウラヂミール・イリイツチが死ぬる前に見てゐた書物の中で、私はレーニンとマルクスを比較してあつた。私は、レーニンのマルクスに対する態度、弟子としての敬虔な愛と距離の歎きとから成る態度を知り過ぎるほど知つてゐた。師匠と子弟の關係は、歴史の過程において、理論上の先驅者と最初の實現者との關係となつた。私は、その論文で、距離に關する傳統的な悲しみをあつさり掃ひのけてしまつた。歴史的にかく密接に結びついて、しかもかくちがつてゐるマルクスとレーニン、この二人は私にとつては人間の精神力の二つの最高峯として超ゆべからざるものであつた。そこで、私は、レーニンが死の直前にレーニンに關する私の文章を注意深く、且つおそらく感動を以て讀んでくれたかと思ふと、うれしかつた。なぜなら、レーニンにとつても私にとつても、マルクスのスケールといふものは、人間の個性を測る寸法のうち絶大なものであつたから。

そして、また今、私は感動を以てクルプスカヤの手紙を讀んだ。クルプスカヤは私のレーニンとの

337

交渉のうちの二つの極端な時期を擧げた。——私がシベリヤを脱走して、早朝レーニンをロンドンの堅いベッドから叩き起した一九〇二年の十月と、それから、レーニンの畢生の事業に對する私の評價を二度繰り返して讀んでくれた一九二三年の十二月の終りとである。この二つの時期の間に二十年が経過した。——最初は協同活動、それから猛烈な内訌、夫から再び、より高い歴史的基礎の上に起つた協同活動。ヘーゲルの用語を借れば、アイゼン正、アンチ反、シニ合だ。そして今、クルプスカヤが、永いアンチテーゼの期間にも拘らず、レーニンの私に對する態度は『ロンドン』のそれに變りないことを證據立てゝくれた。つまり、暖かい支持と友情、だが今はより高い歴史的水準に立つたそれなのである。よしんば他に何がなくとも、レーニンの死の数日後クルプスカヤの書いたこの小さな手紙が歴史の判断上に持つ重味には、あの偽善者連中の大形の書物を束にしてかゝつたつて叶ひはしないだらう。

『雪のためにひどく遅れて、新聞紙が、追憶の辭や略傳や論文をもたらし始めた。私どもの友人はエル・デイがモスコウに行くものと期待してゐたし、エル・デイが旅行を切上げて歸つて來るものと思つてゐた。なぜなら、スターリンの電報がエル・デイの歸路を斷つたものとは誰も想像しなかつたのだから。私はスクームで受取つた息子の手紙を思ひ起す。この子はレーニンの死にひどく打たれて、風邪を惹いて華氏百〇四度の熱に悩まされてゐたが、あまり暖くもない外套にくるまつて、最後の敬意を表すために圓柱會館ホーランド・ストリートに行つて、私どもの到着を待つて、待ち切れないほど待つた。この子の手

紙はに、劇しい苦悶と遠慮勝ちな不服が感じられた。』これもまた妻のノートからの引用だ。

トムスキー、フルンゼ、ペタコフ、グスエフといふ顔觸れの中央委員會代表が、軍事部の人員異動を私と相談するためにスクームへ出掛けて來た。これも單なるみせかけにすぎなかつた。軍事部の人員の入れ替へは、すでに前々から私の留居中に全速力で行はれてゐて、今は、體裁を取りつくらふだけの問題であつた。

軍事部に加へられた第一の打撃はスクリヤンスキーの頭上に落ちた。スクリヤンスキーは、ツアリツシン正面におけるスターリンの戦敗、南部戦線の彼の失敗、ルヴオフ正面の彼の冒險に對するスターリンの復讐を第一番に受ける男だつた。陰謀は今やその毒蛇の鎌首を高く擧げた。スクリヤンスキー——引いては私を——引き抜くために、ウンシュリヒトといふアンビシアスな、と云つてあまり能のない陰謀家が、數月前から軍事部に任命されてゐた。スクリヤンスキーは追ひ出されて、當時ウクライナの軍隊を指揮してゐたフルンゼが、その後釜におかれた。フルンゼはまじめな人物であつた。黨内における彼の權威は昔シベリアの苦役宣告にもとづいたものであり、スクリヤンスキーの比較的新しい權威よりはずつと高かつた。おまけに、戦時中、フルンゼは軍事的指導にかけて非難の打ちどころのない才を發揮してゐた。だが、軍事行政者としては、スクリヤンスキーに到底及ばなかつた。彼はともすれば抽象的な計畫に夢中になりがちだつた。人物の鑑定家としても拙い方で、ともすれば

専門家殊に第二流の連中の影響に落ちてしまふのであつた。

ともあれ、スクリヤンスキーの話は片付けて行かなければならない。スターリン獨得の無作法さでもつて、相談一つ受けることなしに、スクリヤンスキーは經濟的な仕事の方へ移された。ゲー・ペー・ウーでの自分の代理にすぎないウンシュリヒトを厄介拂ひして、産業方面にスクリヤンスキーの様な第一流の行政官を得てよろこんだヂェルヂンスキーは、スクリヤンスキーに衣服トラストを委ねた。スクリヤンスキーは愕きの肩をすぼめるなり、早速、この新しい仕事に跳び込んだ。數箇月後、彼はアメリカを訪問して視察し、研究し、機械を購入することに決心した。出發前、彼は私に別れの挨拶がてら忠言をもとめにやつて來た。内亂中、私たちは相携へて働いたものだつた。だが、話と云へば通常黨のことよりも軍隊の編成とか、軍律とか、將校の昇進の速度をはやめることとか、軍事工場に銅やアルミニウムを供給することとか、制服と糧食のことばかりだつた。二人とも、さうしたことあまり忙しすぎた。レーニンが病氣にかゝつて後、亞流者共の陰謀が軍事部へ喰ひ込み始めるやうになると、私は黨の問題に就ては、特に武官連中と論じ合ふことを避けた。形勢は、甚だ不確かであり、對立は當時、僅かにあらはれ出したばかりで、軍隊内にフラクションを形成することは、多大の危険を藏してゐた。その後、私自身まで病氣になつた。一九二五年のその夏、もはや私が軍事部をあづかつてゐない時代、スクリヤンスキーとの會合で、私たちは、何から何まで話し合つた。

『ね、——とスクリヤンスキーは訊ねた——いつたい、スターリンとは何者です？』

スクリヤンスキー自身、スターリンを知り抜いてゐるのだ。彼はスターリンに對する私の定義と、スターリンの成功に對する私の説明を聴きたいのだ。私は一分間ほど考へた。

『スターリンは、——と私は云つた——黨のなかでも代表的な凡庸人だ。』

この定義は、當時、心理的にも社會的にも全幅の意味を帯びて私の心に形成された。スクリヤンスキーの顔の表情から、私は直ぐと、相手の質問者に相當重大なものに思ひ到らしめ得たことを見てとつた。

『御存じの通り、』と彼は云つた。『この最後の時期に、くだらない、獨りよがりの凡くら共が、あらゆる場面に入り込んで來たことは、實に驚く可きものがあります。しかもそのすべてが、スターリンのうちに指導者を見出してゐるんです。いつたいどうしてこんなことになつたんですか？』

『これは革命の最初の數年間の大きな社會的・心理的の緊張のあとの、反動だ。反動革命が勝利を得れば、それ自身の偉大な人物を生んで來るかも知れない。しかしその最初の段階、即ちテルミドールでは、自分の鼻先より遠くは見得ない凡くらが必要なんだ。彼等の力は、その政治的盲目のなかにあるので、彼等は恰も、實際には調帯車輪を踏みつけてゐるに過ぎないのに、自分では前進してゐると思つてゐる勢驥馬のやうなものだ。ものゝ見える馬はさういふ仕事をするには出來ない。』

その會話のうちで私は、初めて、テルミドールの問題を、絶對的に明瞭に——一種の物理的確信をもつて、と敢て云はう——理解した。私は、いづれ彼がアメリカから歸つて來て後に、この主題に立ち戻らうと、スクリヤンスキーと約した。その後數週間とたないうちに、スクリヤンスキーはアメリカの或る湖でボートを漕いでゐる間に溺死した、との電報が來た。人生には、殘酷な構想といふものは、汲めどもつきせぬものだ。

スクリヤンスキーの遺骨を納めた壺がモスコウに持ち歸られた。その壺は、革命のパンテオンとなつてゐた『赤の廣場』の、クレムリンの城壁に納められるものと、何人も信じてゐた。しかし中央委員會の書記長は、スクリヤンスキーを市外に葬ることに決定した。スクリヤンスキーが別れを告げに私を訪問したことが、注意を惹き、考慮に入れられたことは明かだつた。嫌惡は遺骨の壺にまで及んだのだ。スクリヤンスキーを輕少視することは、内亂において勝利を確保した指導權にたいする一般の鬭争の一部分なのだ。生きてゐたスクリヤンスキーが、自分は何處に埋葬される可きかといふ問題に興味を持つてゐたとは、私は考へない。だが、中央委員會の決定は、個人的及び政治的下劣の特性を帯びてゐた。私は、嫌厭の情を押しつけて、モロトフを呼んだ。しかし決定はこれを變更をさせることは出來なかつた。とは云へ歴史は、それにたいして裁決を下すに相違ないのだ。

一九二四年の秋に、私の體温は再び昇り始めた。この時までには、他の討論が燃え上つたが、こんどはそれは或る豫め手筈をととのへられた計畫に基いて、上の方から齎されたものであつた。レーニングラードで、モスコウで、及び諸の地方で、その所謂『討論』を準備するために、即ち、こんどは反對派でなく私個人に向けられた體系的の、立派に組織されたい、ちめ付けを準備するために、無数の豫備的な祕密協議が開かれた。その祕密の準備がすっかり出来ると、『ブラウダ』紙からの合圖によつて、トロツキイズムにたいする反對運動が、一切のブラットフォームにおいて、一切の頁及び欄のうちであらゆる割れ目や隅つこで、一齊に爆發した。それは實にその種のうちの運動の偉觀であつた。誹謗は火山の噴火と同じだつた。そしてそれは黨の大衆に大きな衝撃を與へた。私は發熱で床に就て沈黙してゐた。新聞紙や演説家等は、實際は彼等の誰一人としてそれが何を意味するものか正確に知つてはゐなかつたのだが、トロツキイズムを暴露すること以外は、なにもしなかつた。日に日をついで、彼等は過去からさまざまの出来事を取り出して來、二十年間のレーニンの論文から論戰の拔萃をつくり、それらを混亂させ、偽り、切斷し、概してそれらを表すに、恰も凡てのことがつい昨日の出来事であるかのやうな遣り方であつた。誰一人としてこの凡てのうちの何ものも理解する事が出来なかつた。もしそれらが實際に眞實であるならば、レーニンはそれを知つてゐたに相違ないのだ。だが、その凡てにも拘らず、十月革命は存在しなかつたか？ 革命の後の内亂は存在しなかつたか？ トロ

ツキイはレーニンと共に、コンミュニスト・インターナショナルの創設に努力しなかつたか？ トロツキイの肖像がレーニンの肖像とならべて、あらゆる場所に掲げられなかつたか？ しかし誹謗は冷たい熔岩の流れとなつて流れ出した。それは自動的に、良心の上に壓迫を加へ、意志にとつて更に一層荒蕪的であつたのだ。

一個の革命的指導者としてのレーニンにたいする態度は、宗教上の位階組織の首位者に對する態度に似たものに、道をゆづつた。私の抗議を斥けて、『赤の廣場』に靈廟が、革命的意識にそぐはない、それを傷ける記念物が、建設された。レーニンに關する公の書物は、同様な靈廟と成つた。彼の觀念は、偽善的の説教のために、切れ切れにされて引用された。彼の香油をぬつた遺骸は、生けるレーニン——及びトロツキイにたいする武器として使用された。大衆は擧にされ、惱まされ、且つ威嚇された。それが單に大袈裟だつたといふお蔭で、無智な噓言の運動が、政治的勢力をもつて來た。それは大衆を壓倒し、抑壓し、荒廢させた。黨は沈黙を宣告された自身を見出した。黨にたいする黨機關の獨裁以外の何ものでもない統治が、樹立された。他の言葉で云へば、黨は黨たることを止めつゝあつたのだ。

朝、病床にある私に新聞紙が運ばれた。私は、電報に目を通し、諸の論文の標題と署名に目を通した。私はそれらの人々を非常によく知つてゐた。私は彼等の内部の思想、彼等が何を言ふことが出来

るか、彼等が何を云ふやうに命令されたか、を知つてゐた。大多数の場合、彼等は革命によつて既に枯渴された人々であつた。或るものは、他から欺かれた單なる心の狭い狂信者であつた。他のものは、いかに自分が高い價值ある人間であるかを實證しようと取急いでゐる若い『出世主義者』であつた。彼等の凡てはお互ひに矛盾し、彼等自身で矛盾してゐた。だが、誹謗は諸新聞紙に絶間なくつゞけられ咆え立て、金切聲を立て、その矛盾と淺薄性をその喧騒のうちに吸ひ込んだ。それは、單なる容積だけで成功した。

エス・イー・セドーヴァは書いてゐる。『トロツキイの病氣の第二回目の襲來は、彼にたいする迫害の奇怪な運動と時を同じうした。その運動を私達は恰も極めて悪性の病痾で苦しめられてゐるかのやうに、辛く感じた。『ブラウダ』紙の各頁は際限のないものに思はれ、その各行、一語一語すらが、嘘であつた。トロツキイは沈黙してゐた。しかしその沈黙を守るといふことが、彼にとつて何と苦しむことであつたか！ 友達は晝の間、時としては夜、彼を訪ねて來た。或る人が一度彼に、その日の新聞を讀んだかどうかと訊ねたのを私は記憶してゐる。彼は、もう新聞は讀まない、と答へた。彼は實際、新聞を手にとつて、その上に眼を走らすだけで、すぐ横へ押しやつてしまつてゐたのだ。そこに書かれてある一切を知るためには、彼にとつては、それを一目見ただけで十分であるかのやうに見えた。彼は、その料理——しかもその上、毎日同じ料理だ——をつくるコツクを餘りにもよく知つて

ゐた。當時、それらの新聞を讀むといふことは——彼はよくさう言つてゐた——まづたく自身の咽喉へ煙突掃除のブラツシを押し込むやうなものであつた。もしトロツキイがそれに答へようと決意すれば、彼は自身を強ひて、それを讀むことが出來たでもあらう。しかし彼は沈黙をつゞけた。彼の神経衰弱の状態が危険だつたお蔭で、彼の冷靜がぶら／＼とつゞいたのだ。彼は青ざめて、瘦せたやうに見えた。家庭では私達は、迫害について語ることを避けたが、しかもその外には何を話すことも出來なかつた。私は、教育人民委員省へ毎日私の仕事に出て行くときに、どんな氣持がしたかを記憶してゐるが、それは鞭を持つた行列の間を通りぬける刑罰を受けてゐるやうであつた。しかし誰一人として、曾つて、不愉快なあてこすりなどをやる者はなかつた。小さを支配グループの敵意ある沈黙とならんで、そこには私の同僚の大多数からのまがう、方なき同情があつた。黨の生命は、内部の、隠れた生命と、外觀だけの外部の生命との二つに、分裂したやうに見え、その二つの生命はお互ひに絶對に對立してゐた。たゞ極く少數の勇敢な人々だけが、「二本石」的の投票の下に同感を隠した多くの人の心情に潜んでゐるものを、危険を冒して顯し示した。』

私のレーニンを攻撃してチハイゼに送つた書簡が、この時期に公表された。一九一三年の四月に起つたこの挿話は、當時セントペトログラードで發行されてゐた公式のポリシエヴィキ新聞紙が、私のウイennaで發行してゐた新聞『ブラウダ——勞働新聞』の名稱を擅有したといふ事實から生じたもの

だ。これは、外國亡命者の生活に頻々として起るかの激甚な衝突の一つを惹起した。一時ポリシエヴィキとメンシエヴィキの間に立つてゐたチハイゼに送つた書簡のうちで、私は、ポリシエヴィキの中央部とレーニンにたいする憤激を洩したのだ。一二週間後であつたら、私は、私のこの書簡に嚴重な検査官的修正を加へたであらうし、また、なほ一二年後であつたら、その書簡は私自身の眼に一つの不思議なものと思はれたであらう。だがその書簡は、特殊な運命を持たざるを得なかつた。それは送達の途中で、警察部によつて押収されたのだ。そして十月革命まで警察の書類のなかに止められてゐたのだが、その時に『共產黨歴史研究所』の手に入つた。レーニンはこの書簡のことをよく知つてゐて、彼の眼には、私の眼に映ると同様、それは單に『昨日の雪』で、それ以外の何ものでもなかつたのだ。さまざまの種類のおそろしく澤山の書簡が、外國亡命の數年間に書かれた！一九二四年に亞流共は書類の中からその書簡を掘出し、當時その四分の三が新黨員から成つてゐた黨へ、それを投込んだ。このために選ばれた時期が、レーニンの死の直後の數週間であつたといふことは、何等偶然ではなかつた。この條件は二重に肝要であつたのだ。第一に、レーニンは最早立ち上つてこれらの紳士達をその正しい名によつて呼ぶことが出来なかつたし、第二に、人民の大衆は彼等の指導者の死についての悲歎によつて引裂かれてゐた。民衆は、黨の過去について何等の觀念ももつてゐないので、レーニンにたいするトロツキイの敵意ある言説を讀んで、當惑してしまつた。その言説が十二年前に

爲されたものであることは眞實であるが、むき出しに引用して來るに當つては、年代は無視されたのだ。亞流共がチハイゼに送つた私の書簡を利用したやり方は、世界史における最大の詐欺の一つだ。ドレフューズ事件におけるフランス反動主義者の偽造文書は、スターリンと彼の共働者によつて犯された政治的偽造に比べると、何ものでもないのだ。

誹謗は、それが何等かの歴史的要求に副ふ場合においてのみ、一つの力となるのだ。誹謗が、爾く無限の市場を發見することが出来たとすれば、社會的關係または政治的氣分において、何等かの移轉があつたに相違ない、と私は推論した。そこでこの誹謗の内容を解剖することが必要である。私は病床に横はつてゐたので、それをする時間をどつさり持つてゐた。トロツキイは『農民を掠奪しよう』——これは反動的農業家、キリスト教的社會主義者及びファシストがいつも社會主義者及び特にコミニニストを攻撃して放つ表式だ——と欲してゐるといふ求刑はそもそも何から生れたのか？ 永久革命のマルクシスト的觀念をかく痛烈にいちめつけ、それ自身の獨得の社會主義を建設する約束を持つてゐるところの、この民族的自慢は、何處から來たのか？ 民衆のいかなる部分が、さういふ反動的俗惡性を要求するのか？ 而して最後に、理論的水準のこの低下、政治的愚鈍へのこの逆轉は、どうして、何故に生じたのか？ 病床に横はりながら、私は私の古い論文を讀み返した。そして私の眼は、一九〇九年、即ちストリツピン治下の反動的統治の絶頂において書かれた章句の上にと

どまつた。

『歴史的發展のカーヴが上向する時には、一般の思考力は、一層浸透性を帯び、一層勇敢となり、一層誠實と成る。それはその進行中に事實を掴み、且つその進行中に、普遍化の絲とそれらの事實を連結する……しかし政治的カーヴが下向を示す時には、一般の思考力は、愚鈍に服従する。政治的普遍化の貴重な賜物は、その痕跡すら残されないので、どこかへ消えてしまふ。愚鈍は傲慢と成り、その齒をむき出し、眞摯な普遍化をしようとするあらゆる企てに向つて、それを傷けようとする嘲笑を積み重ねるのだ。それは、自身が戦場を支配してゐることを感知して、それ自身的手段に手頼りはじめるのだ。』

その最も重要な手段の一つは、誹謗だ。

我々は反動の時代を通過しつゝあるのだと、私は自身に向つて云つてゐる。諸階級の政治的移轉、ならびに階級意識における變化が、進行しつゝあるのだ。大なる努力の後には、逆轉がある。それはどこまで行くだらうか？ その出發點へ歸つて行かないことは確かだ。だが、何人も前以つてその線を指示することは出来ない。内部諸力の闘争がそれを決定するであらう。第一に、我々は現に何が起つてゐるかを理解しなければならぬ。反動の深い分子的過程が表面に現れ出でつゝある。その過程は、『十月』の觀念、スローガン、及び生きた人材の根絶、尠くともその弱少化を目標としてゐるの

だ。これが、現に起りつゝあることの意味なのだ。だから我々は、餘りに主觀的にならぬやうにし、喧嘩をしないやうにし、又は、歴史がその出來事を爾く錯雜・粉碎した道へ導き入れたことについて憤激しないやうにしよう。現に何が起つてゐるかを理解することは、すでに、半ば、勝利を保證することなのだ。

第十七章 党内闘争の最後の時期

一九二五年一月に、私は、陸軍人民委員としての私の職を解かれた。この決定は、それに先立つ闘争によつて、注意深く準備されたものだつたのだ。亞流共は十月革命の傳統を第一に恐れてゐたが、夫については、内亂時の傳統と、軍事と私との關係を最も恐れてゐた。私は、何等争闘もしないで、いや重荷を下したやうにすら感じて、軍事上の地位を投げ出した、といふのは、私はそれによつて、私の軍事的意嚮に關する彼等のあてこすりの武器を、私の反對派の手から扭ぢ取つたからであつた。亞流共は最初は彼等の行爲を正當化するために、それらの空想を發明したのだが、次いでそれを殆ど信じはじめたのだ。すでに一九二二年以來、私の個人的興味は他の分野へ移轉してゐた。戦争は終り、軍隊は五百三十萬人から六十萬人に減少されてゐた。軍事上の仕事は、官僚的處置に入りつゝあつた。そして經濟上の諸問題が國內で最も重要なものであり、戦争が終つた瞬間から、その問題が軍事よりも遙かに巨きな範圍にわたつて、私の時間と注意を吸収した。

私は、一九二五年五月に、利權委員會リクケン委員会の議長となり、傍ら電氣工藝局長、工業科學技術局議長を兼任した。これら三つの地位は何等連絡したものではなかつた。その選擇は、私の背後で、黨から私

を孤立させ、私を日常の實務に溺れさせ、私を特別の統制の下におかうとする等々の、特殊の考慮から決定されたものであつた。それにも拘らず、私は、この新しい處置と調和して仕事をしようとして、誠實に身を入れた。私は全然勝手の分らない三つの施設で仕事に着手したとき、自然耳元までそれに没入してしまつた。私は、工業が中央集權化された性質を帯びたところから、ソヴィエツト・ロシアにおいて極めて大規模に發展した技術科學の諸研究所にたいして、特別に興味を抱いてゐた。私は次々として多くの實驗室を訪問し、第一流の科學者の與へる説明に耳を傾け、時間の許す時には、化學及び液體力學を研究した。そして私は半ば行政家で、半ば學生であると感じた。私が青年時代に物理學及び數學の大學課程を踏まうと企てたのも、無駄ではなかつた。私は、政治から休息し、自然科學及び工藝學の問題に注意を集中してゐた。電氣工藝局長として、私は、建設中の發電所を訪問し、ドニエープルへ小旅行を試みた。其處では水力發電所を建設するために、大規模の準備工事が行はれてゐたのだ。二人の端艇手は、ザポロズキ・コサツクスの古い航路に沿つて、私を漁船に乗せて、急流を下つた。この冒険は、もちろん、單なるスポーツ的の興味からであつた。だが、私は、經濟的見地と、技術的見地との雙方から、ドニエープルの工事に深い興味を覺えた。私は、發電所に缺陷のなからんことを期して、一隊のアメリカ専門家を組織し、その後それにドイツの専門家を補足した。そして、私は私の新しい仕事を當座の經濟的要求に結びつけるばかりでなく、社會主義の根本問題と結び

つけようと努力した。經濟問題にたいして民族的に近づいて行かうとする阿呆な遣り方（自己封鎖的孤立を通じての『獨立』）との闘争において、私は、ソヴィエツト經濟と世界經濟の比較指數を求め、制度を發展させる計畫を樹てた。これは、輸出入貿易及び利權讓與政策の必要に應ぜんがため、世界市場における正しい方向を決定する必要から來た結果であつた。ところで一國民の生産力を支配するものとして世界の生産力を認めるところから不可避的に生じて來ることの比較指數の計畫は、『一國における社會主義』といふ反動的理論にたいする攻撃をふくんでゐた。

私は、私の新しい活動と關聯した事象に就て、公の報告をなし、實物やパンフレツドを公刊した。私の反對派は、この領域で戰鬪を受取ることも出來なかつたし、またそれをしようとも注意しなかつた。彼等は、トロツキイは自分のために新しい戰場を創つたといふ表式で、情勢を總括してゐた。電氣工藝局及び科學上の諸施設は、曩に陸軍省や赤軍に見たと殆ど同じ程度で、いまや彼等を惱まし始めた。スターリンの機關は私の踵を追つて來た。私のやつた實際的手段の一つ一つが、舞臺裏での入組んだ隱謀を惹起し、理論的結論の一つ一つが『トロツキイズム』の無智な神話を太らした。私の實際上の仕事は、それに不可能な條件のもとで遂行されたのだ。スターリン及び彼の助手モロトフの創造的活動の多くは、私の周圍に直接的のサポーターヂュを組織することに向けられてゐたと言つても、決して誇張ではない。私の指導の下にあるその諸施設にとつては、必要な資金を得ることが實際上不可能になつた。そこで働いてゐる人々は彼等の將來、いや少くとも彼等の生活について、恐怖し始めたのだ。

私自身のために政治的休日を獲ようとする私の計畫は、明かに失敗であつた。亞流共は、中途半端で止まることが出來なかつた。彼等は、これまでやつて來たことを餘りにも怖れてゐたのだ。昨日の誹謗が彼等の上へどつしりとのしかゝり、今日、二重の隱謀を要求してゐた。私は遂に、電氣工藝局及び技術科學の諸施設の職から解任して欲しいと主張した。主要な利權委員會の方の仕事では、利權讓與は一々ポリトビユーローで決定されてゐたのであるから、同じやうに隱謀する餘地は與へられなかつた。

353

その間に黨の情勢は、新たな危機に到達した。闘争の第一期においては、例の三幅對は私に反對するために形づくられたのであつたが、それは一箇の單位體であるには遙かに遠いものであつたのだ。理論的及び政治的の點では、ジノヴィエフもカメネフもおそらくスターリンに優つてゐた。しかし彼等は、性格といふちよつとしたものを缺いてゐたのだ。外國亡命中にレーニンの下で獲得した彼等の國際的見解は、スターリンのそれよりも廣いものであつたが、それは彼等の地位を少しも強くはせず反對にそれを弱めた。政治的傾向は、自己封鎖的民族的發展の方へ向つてをり、『我々は我々の帽子を雨下して、その下に敵を埋める。』といふロシア愛國主義の古い表式が、いまや致々として、新し

い社會主義的言語で翻譯されてゐた。たとひそれが限られた程度のものにせよ、國際的見地を展開しようとするジノヴィエフ及びカメネフの計畫は、官僚主義者の眼には、彼等を第二番目の『トロツキイ主義者』に轉化したのだ。これがために、彼等は更に一層狂暴に私にたいする反對運動を煽り、それによつて諸機關から一層大きな信任を獲得しようとした。しかしその努力も亦、徒勞であつた。諸機關は、スターリンがその肉の肉であることを急速に發見しつゝあつた。ジノヴィエフ及びカメネフは、間もなく、彼自身がスターリンに向つて敵對的反對の地位にあることを發見した。彼等は、爭論を三幅對の間から中央委員會へ移さうと試みた時、スターリンがそこで確乎たる大多數を擁してゐることを發見したのだ。

カメネフはモスコウの公の指導者と見做されてゐた。しかし、一九二三年、即ち黨が大多數で反對派を支持して來た時に、カメネフがモスコウの黨組織へ參加して來たのを逐出して後は、モスコウのコンミスニストの一兵卒達は、冷靜に沈黙を維持した。スターリンに反抗する最初の企てとも、カメネフは宙に浮上つた自身を發見したのだ。レニングラード^{*}の狀態はそれとは異つてゐた。レニングラードのコンミニュニストは、ジノヴィエフ配下の機關の重い眼瞼によつて、一九二三年の反對派から、防禦されてゐた。しかし今や、彼等の順番がやつて來た。レニングラードの労働者は、富農——いはゆるクラーク——に有利な政治的傾向及び一國限りの社會主義を指す政策によつて目を醒され

た。労働者の階級的抗議は、ジノヴィエフの高級官吏的反對と一致した。かくして新しい反對派が生まれ、最初の段階でその成員の一人は、ナヂエスタ・コンスタンチノヴァ・クルブスカヤであつた。誰も彼もびつくり仰天したことは、彼等の第一人者ジノヴィエフ及びカメネフが、彼等自身、反對派による批評を一語々々そのまゝ繰返さざるを得なくなつたといふことで、間もなく彼等は、『トロツキイ主義者』の陣營のものとして、他から耳を傾けられた。我々の仲間において、ジノヴィエフ及びカメネフとの關係を親密にすることが、極く控目に云つても、逆説的に思はれたのは、少しも不思議ではない。反對派のうちにはさういふブロックに反對したものが、多數あつた。極く少數ではあつたがジノヴィエフ及びカメネフに反對して、スターリンとブロックを結ぶことが可能だと考へたものすら若干あつた。私の親友の一人で、舊い革命家で、内亂の際の最も立派な司令官の一人であつたムラハコウスキーは、一切のブロックに反對だと聲明し、彼等の立場を典型的に説明し、『スターリンは欺くだらうし、ジノヴィエフはこそく逃げ出すだらう。』と言つた。しかしさういふ問題は、心理的考慮によつてではなく、政治的考慮によつて、最後に決定された。ジノヴィエフ及びカメネフは、一九二三年以來、彼等にたいする鬭争においては、『トロツキイ主義者』が正しかつた、と公然と告白した。彼等は我々の綱領の基礎的原理を承認した。さういふ事情の下において、彼等とブロックを形成しないといふことは不可能であつた、特に、數千の革命的なレニングラードの労働者が、彼等の背

後にあつた以上、さうだつたのだ。

* セントピーターズブルグは、戦時中ペトログラードと改稱され、更にその後、レニングラードと改稱された。——英譯者

私は、この三年間、即ち彼がデョルヂヤへ小旅行に立つ前夜以來、公式の會合以外には、カメネフと會つてゐなかつた。その夜、彼はレーニンと私とのつた立場を展開すると約したが、その後レーニンの容體が險悪だと知つて、スターリンの方へ移つて行つたのだ。我々が最初に會つた時に、カメネフは『君とジノヴィエフが同じプラツトフォームへ姿を現すだけで十分だ、黨は自身の眞の中央委員會を見出すだらう。』と叫んだ。私は、さういふ官僚的な樂天主義に嘲笑を禁ずることが出来なかつた。カメネフは、三幅對の三年間の活動が黨に與へた破壊的な結果を、明かに過少評價してゐた。私は、彼の感情に少しの斟酌もなく、それを彼に指摘した。一九二三年の終り、即ちドイツにおける革命運動が敗北して後に、その端を發した革命的退潮は、國際的範圍に及んでゐたのだ。ロシアにおいては、『十月』にたいする反動が全速力で進行してゐた。黨の諸機關は、いよ／＼ますます／＼右翼と結んでゐた。さういふ情勢の下で、我々のやる必要のあることは、手をつなぎ合ふことだけであつて、さうすれば勝利は熟した果實のやうに我々の足元へ落ちて來ると考へるのは、兒戯に類したことであらう。『我々は遠大な目標を持たなければならぬ』と、私は何十回となくカメネフ及びジノヴィエフ

に向つて繰返した。その契機の拍車に驅られて、私の新しい同盟者等はこの表式を勇敢に承認した。しかし長持ちはしなかつた。彼等は、一日々々、一時間一時間と、意氣沮喪して行つた。ムラバオウスキイは、彼等の個性の評価において正しいことを實證した。ジノヴィエフは結局、こそ／＼と逃げ出した。だが、彼は彼の支持者の全部によつて追隨されることなどは全くなかつた。とにかく彼の二重の方向轉換は、『トロツキイズム』の傳説の上に、癒す可からざる瘡傷を與へたのだ。

一九二六年の春、私の妻と私とはベルリンへ小旅行をやつた。モスコウの醫師達が、私の高熱の持續を説明することが出来なくなり、全責任を背負ふことを欲せず、私に外國へ旅行するやうにと勧告したのだ。私もまた同じく、『行詰り』からの出路を見出さうと焦慮してゐた、といふのは私の高熱が極めて重要な契機に私を無力にし、私の反對派の最も確乎たる同盟者として活動したからだ。私の外國訪問問題は、ポリトビュローで取上げられ、同局は、その手にせる報道と一般的政治情勢に鑑みて、私の旅行を極めて危険だと思惟すと聲明したが、最後の決定は私に委せた。その聲明には、私の旅行の許し難いことを述べたゲー・ペー・ウーの覺書が添へられてあつた。ポリトビュローは、疑ひもなく、外國に在る間私に何等か不愉快な出來事が起つた場合、黨がその責任を負ふことになるのを、恐れてゐたのだ。私を外國へ、しかもその場合コンスタンチノーブルへ追放すると云ふ觀念は、

その時はまだ、スターリンの警官的頭腦のなかにも目醒めてゐなかつた。またポリトビュローが、外國の反對派を固めるために私が外國で活動しはしないかと懸念してゐたことも、あり得ることだ。それにも拘らず、私は、友達と相談した後、旅行に出ることに決意した。

ドイツ大使館との交渉は、支障なく完了し、四月の中旬、私の妻と私とは、教育人民委員省のウクライナ『同僚』の一員クズメンコの名で、外交官旅行券をもつて出發した。私の祕書で、以前の私の列車の司令官のセルムスクと、ゲー・ペー・ウーの代表とが、我々と一緒であつた。ジノヴィエフとカメネフとは、心からの感情を見せて、私と別れた。彼等は、スターリンと面と向つて止つてゐることの見透しを好まなかつたのだ。

戦争以前の數年間、私はホーヘンツォーレルンのベルリンを非常によく知つてゐた。當時、その都は、自身の特別な外貌をもつてをり、それを愉快なものだとは何人も言はなかつたが、多くの人々はそれを堂々たるものだと思つてゐた。ベルリンは變化した。いまやそれは、全く外貌といふものを持つてをらず、尠くとも私の發見し得るその何ものも持つてゐなかつた。この都市は、ながい、重い病氣——その行程には多くの外科手術が伴つた——から、徐々に恢復しつゝあつた。インフレーションは既にをはつたが、安定されたマルク相場は、一般的貧血症を測定する手段としてしか役に立たなかつた。街路において、店舗において、通行人の顔面に、貧窮化が感ぜられ、また同時に、かのいらい

らした、屢々貪るやうな、再起の慾望が感ぜられた。戦争と、敗北と、ヴェルサイユの泥坊行爲の困難な數年の間の、ドイツの徹底性と潔癖性とは、おそろしい貧困によつて呑みつくされてしまつた。

人間の蟻塚は、戦争の長靴によつて破壊された通路、廊下、倉庫を、頑強に、だが沈んだ心で、復興しつゝあつた。街路の階調のうちに、行人の動作や姿態のうちに、宿命觀の悲劇的な暗流が感ぜられた。『どうにも仕方がない、人生は無限の苦役の期間だ、我々はまたも最初から始めなければならな

501

數週間、私は、ベルリンの或る私立醫院で、醫學的觀察の下におかれてゐた。不思議な體熱の根源を求めて、醫師達は次から次へと私を轉々させた。最後に一咽喉専門醫は、その根源は私の扁桃腺にあるといふ假説を持ち出し、いづれにしてもそれを取除くやうにと勸告した。診察家や治療家は、中年の醫術的に劣つた人間だつたので、それを躊躇した。だが、外科醫は、過去に戦争の經驗をもつてゐたので、ひどい侮蔑をもつて、彼等を取扱つた。彼は、いまでは扁桃腺を取除くことは、髯を剃ると同じに容易だ、と言つた。私は承諾せざるを得なかつた。

助手達は私の手を縛る用意をしてゐたが、その外科醫は、精神的保證を受入れることに決意した。私に力をつけさせる彼の諧謔の背後に、私は、緊張と、抑制された興奮を感ずることが出來た。テーブルの上に横たはつて、自身の血を堰止めることは、極めて不快な感じのものだ。手術は四十分乃至

五十分つゝいた。萬事甘く行つた——たゞし、その手術が一見無効だつたといふ事實を見逃せばだ、といふのは、體熱は少し後になつて再び昇つたからだ。

しかし私がベルリンにゐた時日、尠くともその醫院で暮した時日は、無駄ではなかつた。私は、一九二四年八月以來殆ど完全にそれから切離されてゐたドイツの新聞紙に、耽溺した。毎日々々、私は一揃ひのドイツの公刊物及び若干の外國の公刊物を供給され、読み了つた後で、私はいつもそれを床に投げ出した。私を訪ねた醫師達は、ありとあらゆる色彩の政治的意見を持つ新聞紙の敷物の上を歩かなければならなかつた。それは實際私にとつては、ドイツ共和政治の全配列に耳を傾ける最初の機會であつた。私は、そこに何等豫期しないものを見出さなかつたことを、こゝに告白しなければならぬ。軍事的崩壞の捨兒としての共和國、ヴェルサイユの強制的產物としての共和黨、彼等自身それを握りつゝぶした十一月革命の絞殺者としての社會民主黨、民主的大統領としてのヒンデンブルグ——一般に、それは私が想像したところとそっくりそのままであつた。だがしかし、目近かにその配列を見るのが出来るのは、極めて教訓的であつた。

五月一日に、私の妻と私は自動車で市中へドライブに出掛けた。我々は、主要區域を訪問し、行列を見守り、ポスターを読み、演説を聴き、アレキサンダープラッツへ赴き、群衆の中へまじつた。私は、メーデーの行列を澤山見たが、それは一層堂々として、一層裝飾的のものであつた。が、私は

よほど前から、何人の注意も惹かないで、私自身名もない全體の一部分と感して、耳を傾けたり、觀察したりして、群衆の中を動き廻ることが出来るやうになつてゐた。たゞ一度、我々の同伴者が注意深く私に言つた。『あそこに、貴下の寫眞を賣つてゐますよ。』しかしその寫眞から、何人も、教育人民委員省の『同僚』の一員クズメンコを認めはしなかつたであらう。この章句が、ウエストツブ伯、ヘルマン・ミュラー、ストレーゼマン、レヴェントロフ伯、ヒルファーディング、またはその他、およそ私のドイツ入國許可に反對した人々によつて讀まれる場合があるかも知れないから、私はこゝに次のことを彼等に報告しておく必要があると思ふ。私は、何等非難す可きスローガンも叫ばなかつたし、何等不法なポスターも貼らなかつたこと、そして概して私は、數日後に手術を受けるのを待つてゐる一觀光客に過ぎなかつたこと、これだ。

我々はまた市の郊外の『酒祭り』を見に行つた。こゝには人々が群をなしてゐた。渦巻と酒に煽られて、春らしい氣分であつたに拘らず、過去の數年の灰色の影は、宴樂の上にも、他を悦ばせようと骨折つてゐる人々の上にも、覆ひかぶさつてゐた。近く寄つて見ればすぐ分ることだが、彼等は誰も彼も、徐々に恢復しつゝある病上り者のやうに見えた。彼等の歡喜はまだ彼等には一つの大きな努力だつたのだ。我々は込み合ふ群衆のなかで數時間費し、觀察し、おしやべりをし、紙製の皿でフランクフルターを食べ、ビールを飲みさへした。その味は、我々が一九一七年以來忘れてゐたものだ。

私の手術した跡は急速に恢復しつゝあつて、私は出發の日取を考へてゐた。その時、今日になつてすら私に何等か謎のやうに思はれる、或る豫期しない事件が突發した。私が出發しようと目論んでゐた日より約一週間前、醫院の廊下に二人の紳士が現れた。彼等は、警察の仕事をしてゐることを極めてはつきりと表明してゐるところの、かのはつきりしない外貌を持つた紳士であつた。私は、窓から中庭を眺めて、そこに彼等と同じやうな約五六人の人間が私の下にゐるのを發見した。彼等は彼等自身では多少異つてはゐたが、それでもお互ひに著しく似通つてゐた。私はそれについてクレスチンスキイの注意を促した。數分間の後、副醫師の一人が戸をノックして、興奮して通報した——主任の言ひつけで——ところによると、私が生命を狙はれてゐる危険にあるといふのだ。『警官から狙はれてゐるのではないだらうねえ？』と、私は、澤山の警察の手先共を指して、訊ねた。その醫師は、警官はそこでその企てを阻止しようとしてゐるのだと、おそろしく仄めかした。二三分の後、一警部がやつて来て、クレスチンスキイに向つて、警察では實際私の生命を狙ふ計畫があるといふ報道を受取つたので、非常保護手段を講じたのだと語つた。醫院全體は上へを下への騒ぎであつた。看護婦達は、お互同志や患者に云つた、この醫院にトロツキイをかくまつてあるので、それがもつて、この建物へ爆弾を投じようとしてゐるのだと。そこに醸し出された雰圍氣は、療養施設にはまつたくそぐはないものであつた。私は直ちにソヴィエツト大使館へ赴くやうに、クレスチンスキイと手筈を定めた。醫院の前面の街路は警官でバリケードがつくられてゐた。私は警察の自動車で護衛された。

この挿話の正式の説明は、次のやうなものであつた。或る新たに發見された隠謀に關聯して逮捕されたドイツの王黨派の一人が、裁判所の審問で次のやうなことを言つた——若くは云つたと公表された。即ちロシアの白衛軍が、ベルリンに滞在してゐるトロツキイの生命を奪はうと、早くから計畫をととのへてゐるといふのだ。私の旅行は曩にドイツの外務當局を通じて手配されたのだが、外務當局は故意に、それを警察に報告することを差控へてゐた。といふのは警察官の間には王黨員が非常に澤山ゐたからだ。警察では、逮捕された王黨員の報告には大して信用を置かなかつたが、それにも拘らず、その醫院に私が滞在してゐることについての彼の言説を耳にとめた。そこで調べた結果、その報道が正しかつたので、警察は非常に驚愕した。そこで醫師達について訊問がなされると同時に、私は時を同じうして二つの警告を受けたのだ……一つは副醫師から、他は警部からだ。さういふ計畫が實際企てられてゐたものかどうか、また警察は實際逮捕された王黨員から私の到着を聞いたのかどうかその疑問には今日ですら、私は答へることが出来ない。

しかし私は、この事件はそれより遙かに單純なものではないかと思つてゐる。我々は次のやうに斷定していゝだらう。外交官仲間は『祕密』を保つことに失敗した。そこで警察は、外交社會に信任のないことに腹を立て、ストレーゼマン又は私に、警察の援助がなくては扁桃腺を取除くことは出来

ないといふことを示威しようと決したのだと。その説明は何れにもせよ、醫院はすっかり轉倒してしまひ、一方私の假想的な敵にたいする素晴らしい警戒の下で、私は大使館へ引移つた。この物語の曖昧な、弱々しい反響が、後になつて、ドイツの新聞紙に現れたが、誰一人としてそれを信じようとする者はなかつたやうだ。

私のベルリン滞在の時日は、ヨーロッパにおける重要な出来事と時を同じうした。イギリスの總同盟罷業及びポーランドのピルスドスキイのクー・デターがそれだ。この二つの出来事は、亞流共と私との意見の不一致を大いに重加し、我々の後來の鬭争の一層激しい發展を豫め決定した。こゝにこの問題について若干述べておかなければならない。

スターリン、ブハーリン及び——最初の時期に——ジノヴィエフは、ソヴィエツト労働組合の上層グループとイギリス労働組合の總評議會ゼネラル・カウンスルとの間に外交的同盟を結んだことをもつて、彼等の政策の輝ける成功だと考へてゐた。彼の地方的狹隘性の故に、スターリンは、パーセル及びその他の労働組合指導者等は、或る困難な契機には、イギリスのブルジョアジーを向ふに廻してソヴィエツト共和國に援助を與へる用意をしてをり、若くはそれが出来ると想像した。イギリスの組合指導者に關しては、彼等は次のやうに信じたが、それには若干正當なものがあつた。即ち、イギリス資本主義が危機にあること、大衆の不満が増大してゐることに鑑みれば、ソヴィエツト労働組合の指導者と、公然ではあ

るが實際上責任のない友好關係を結び、それを媒介として彼等の左翼が掩護されるといふことは、イギリスの組合指導者にとつて利口なことであらうといふのだ。雙方ともに、大部分ものをその眞の名によつて呼ぶことを避けて、遠廻りをして他の心をさぐることはかりやつてゐたのだ。腐敗した政策は大事件に遭着して一度ならず難破した。一九二六年五月のイギリスの總同盟罷業は、イギリスの生活においてのみならず、我々の黨の内部生活においても、大きな出来事であることを自證したのだ。

戦後のイギリスの運命は絶大な興味の対象であつた。同國の世界的地位における急激な變化は、同國の内部の勢力關係に於ても、それと同様急激な變化を齎さずには出来なかつた。たとひイギリスも含めてのヨーロッパが、多かれ少かれ長い期間、一定の社會的均衡を回復することとしても、イギリス自身は、一聯の重大な争闘と震動を媒介としてのみ、さういふ均衡に到達することが出来ることは、明かであつた。私は、イギリスにおいては、あらゆる場所で、石炭業における争闘が一箇の總同盟罷業を導いて來ることは、在り得ることだと考へてゐた。このことから私は、労働階級の舊い組織と、その階級の新しい歴史的任務との間の本質上の矛盾が、近い將來に勿論露呈されるであらう、と斷定した。一九二五年の冬及び春、私はコーカサスにゐた間に、これについて一書——『イギリスは何處へ行く？』——を書いた。この書物は、イギリスの總評議會が左翼へ移つて行くこと、イギリス労働黨及び労働組合の平成員の間に漸次に、苦痛なくコンミニズムが浸透して行くことを期待し

て、本来ポリティビューローの公式の觀念を目ざして書かれたものであつた。一部は無用の紛糾を避けるため、一部は私の反對派を喰止めるために、私はこの書の内容をポリティビューローへ提出した。元來それは、事實にたいする批評の問題であるよりも、寧ろ、豫見の問題であるので、ポリティビューローの委員の何人も、敢て意見を發表したものはなかつた。その書物は無事に検閲を通過し、正確にそれが書かれたまゝで發行された。少し後になつて、それはイギリスにも現れた。イギリス社會主義の公式の指導者達は、その書物を目して、イギリスの事情を知らず、『ロシア』の總同盟罷業をイギリス嶋の大地に移植しようと夢想し得る一外國人の幻想だとした。さういふ評價は、政治的凡庸較べでは決してなく、一等賞を得たマクドナルド彼自身を始めとして、數十の人々、數百の人々にとつてすら爲された。然しながら、それから數箇月のうちに、炭坑夫のストライキは總同盟罷業と成つたのだ。私は、私の豫見がかくも早く確證されるとは豫期してゐなかつた。もしその總同盟罷業が、イギリス改良主義者の國産的評價に反對して、マルクス主義者の豫見の正しさを證明したとするならば、總同盟罷業中の總評議會の行動は、スターリンのパーセルにたいする期待の崩壊を標識したのだ。私は醫院にあつて、總同盟罷業の進行について、特に大衆とその指導者との間の關係についての一切の報道を、熱心に蒐集し、それを調べ合せた。私の胸をむかつかせたものは、モスコウの『ブラウダ』紙の論文の性質であつた。その主要な關心事は、破産を覆ひ隠し、體面を保つにあつたのだ。このことを

やり通す事は、事實を狡猾に歪曲するより外にはないのだ。革命的政治家の知的没落の實證として、大衆を欺瞞するより大いなるその實證はあり得ないのだ。

私はモスコウへ歸還すると、イギリスの總評議會とのブロックを即時に破棄せんことを要求した。ジノヴィエフは、彼に不可避の動搖を示した後で、私に賛成した。ラデツクは反對した。スターリンはブロックに、ブロックラしいものすら、嚙りついた。といふのは彼はそれだけにしか値しなかつたのだ。イギリス労働組合主義者は、彼等の差迫つた内部の危機が終熄するまで待つてゐた。そしてその時に彼等の誠實であるが、頭の鈍い同盟者を無禮に蹴飛ばしてしまつたのだ。

まさにそれと同様重要な出來事が、同じ時に、ポーランドに起つてゐた。その小ブルジョアジイは、狂的に出路を求めて、叛逆を起し、ピルズドスキイをその楯の上に乗せたのだ。共產黨の指導者ヴアルスキイは、『プロレタリアートと農民の民主的獨裁』が正に彼の眼前に發展してゐると決定し、コンミュスト・インターナショナルに向つてピルズドスキイの支持を要求した。私は久しい以前からヴアルスキイを知つてゐた。ローザ・ルクセンブルグがまだ生きてゐた間は、彼はおそらく革命家の伍列で、彼の地位を保つことが出來た。獨りに残されると、彼はいつも茫然自失した。一九二四年、非常に躊躇した後で、彼は、遂に『トロツキイズム』の害毒、即ち民主的獨裁の成功における農民の過少評價の害毒を理解した、と聲明した。彼は、歸服の報酬として、指導者の地位を與へられ、それ

から、それを獲得するのに爾く長い間かゝつた拍車を使用する機會の來るのを、しびれを切らして待つてゐたのだ。一九二六年五月、彼はその機會を掴んだが、それはたゞ彼自身の名譽を傷け、黨の旗に泥を塗つたに過ぎなかつた。もちろん、彼は罰せられずにすんだ。スターリン配下の機關は、ポーランド労働者の激怒から彼をかばつたのだ。

一九二六年中、黨内鬭争は、更にその強度を増して發展した。その秋には、反對派は、黨地方部の集會において公然の突撃すら行つた。諸機關は狂暴に逆襲した。觀念の鬭争は、行政上の技術に席をゆづつた。労働者の地域的集會に參列するための、黨官僚の電話での召集、一切の集會の面前でサイレンを鳴らす自動車の集積、ブラットフォームに反對派が現れると、口笛を鳴らしたり、ブーブー音を立てたりする、立派に組織された妨害。支配的分派は、その勢力の機械的集中によつて、威嚇及び報復によつて、その抑壓を遂行した。黨の大衆は、何事かに耳を傾けたり、それを把握したり又は何事かを言ふ時を得るまへに、分裂及び破局が來ることを惧れた。反對派は退却せざるを得なかつた。十月十六日に、我々は宣言を發し、我々の見解を正しいものと思惟し、黨の機構のなかでそのために鬭争する權利を保留するけれども、分裂の危険を生む可き行動の使用を抛棄すると聲明した。十月十六日の宣言は、黨の機關を目當てとしたものでなく、黨の大衆を目當てとしたものであつた。それは黨内にとゞまつて、更に黨のために奉仕しようとする我々の欲求の表現であつたのだ。スターリン主義者は、それが締結された翌日、もうその休戰條約を破壊し始めたけれども、なほ我々は時間を獲たのだ。一九二六年——七年の冬は、我々に息抜きの時間を與へ、それは我々をして、多くの問題を更に徹底して理論的に検討することを許した。

一九二七年の初頭すでに、ジノヴィエフは、一擧にはないが、尠くとも徐々に、降服しようと思つち構へてゐた。しかしその時に、支那における人を仰天させるやうな事件がやつて來たのだ。スターリンの政策の犯罪的性質は、人の眼を射つた。それがしばらくの間、ジノヴィエフ及びその後彼に追隨した人々の降伏を延期させた。

支那における亞流共の指導は、ポリシエヴィズムの一切の傳統を踏みにじつてしまつた。支那共産黨は、その意志に反して、ブルジョア國民黨に結びつき、その軍事的規律に服従することを強制された。ソヴィエツトの創設は、禁止された。共産黨は、農民革命を阻止し、ブルジョアジーの許可なくしては労働者を武装させることを差控へるやうに、勸告された。蔣介石が上海の労働者を打ち碎き、軍閥の手に權力を集注した時よりもよほど以前に、我々は、さういふ結果は不可避だとの警告を發した。一九二五年以來、私は國民黨から、コンミュニストの撤退を要求してゐた。スターリン及びブハーリンの政策は、革命の粉碎を準備し、それを容易ならしめたばかりでなく、國家機關による報復の援助をかりて、蔣介石の反革命事業を我々の批評から掩護したのだ。一九二七年四月、圓柱會館にお

ける黨集會の席上において、スターリンはなほ蔣介石との聯合政策を擁護し、彼にたいする信任を求めた。それから五六日後に、蔣介石は上海労働者と共産黨とを、血に浸してしまつたのだ。

興奮の波は黨を壓倒した。反對派は頭を擡げた。そして『コンスピラチヤ』（隱謀者）——その時、モスクウでは、既に我々は、『コンスピラチヤ』の方法を用ひて、蔣介石に反對して、支那労働者を擁護せざるを得なかつた——の一切の法則を無視して、反對派は、利権委員會の事務室に、群をなして私を訪問した。多くの若いコミュニスト達は、スターリンの政策の明々白々な破産は、反對派の勝利を近づけざるを得ないものと考へてゐた。蔣介石のクー・デターあつて後の最初の日の間、私は、私の若い友達の熱した頭の上に——及びそんなに若くない友達の頭の上に、バケツに幾杯もの冷水を注ぎかけないではをれなかつた。私は、反對派は支那革命の『敗北』の上には興隆することは出来ないとふことを、彼等に示さうと努力した。我々の豫見が正しいことを自證したといふ事實は、一千人、五千人、乃至一萬人の新しい支持者を我々の方へ惹き附けるかも知れなかつた。しかしながら、百萬人の人間にとつては、重要なことは、我々の豫見ではなくて、支那プロレタリアートが打ちのめされたといふ事實だつたのだ。一九二三年のドイツ革命の失敗の後、一九二五年のイギリス總同盟罷業の壊滅の後、支那におけるこの新たな災禍は、國際的革命にたいする大衆の失望を増大するに過ぎなかつたであらう。しかも、スターリンの民族改良主義政策の主要な心理的源泉として役立つた

ものは、この同じ失望だつたのだ。

極めて短い期間に、一箇の分派として、我々が、疑ひもなく勢力を獲得したこと——云はゞ、我々が一層知力的に結合され、數において強力となつたことは、明かであつた。しかし我々を権力と結びつけてゐた情緒は、蔣介石の劍によつて斷られた。彼の最後の不信なロシアの同盟者スターリンは、いまや、黨から反對派を驅逐することによつて、上海労働者の粉碎を完成せざるを得なかつた。反對派の背景は、舊い革命家のグループであつた。しかし我々はや獨りではなかつたのだ。新しい世代の革命家の數百人數千人が、我々のまはりに參集した。この新しい世代者は、十月革命によつて目を醒され、内亂に参加し、レーニンの中央委員會の大きな權威のまへに、直立してゐたものなのだ。一九二三年以來初めて、彼等は、獨りで考へ、批評し、發展の新しい轉回にマルクス主義的方法を適用し、且つ更に一層困難なこと、即ち、革命的創意の責任を負擔することを學び初めたのだ。現在、數千のかういふ若い革命家が在り、彼等は、スターリン統治の下の牢獄や流刑地において理論を研究することによつて、彼等の政治的經驗を増大しつゝあるのだ。

反對派の指導的グループは、その眼を大きく見開いて、この終曲に直面した。我々は、我々の觀念を、術策や遁辭によつてははなく、實際的結果は何一つもこれを避けることをしない公然の鬭争によつて、新しい世代の共有財産となすことが出来たといふことを、餘りにも明瞭に理解したのだ。我々

は潰走の避く可からざる境涯に遭遇したが、しかし、一層遠い未来において、我々の觀念の勝利のため、道を拓きつゝあつたことを自信することが出来たのだ。

物質勢力の壓迫は、人類の歴史にいつも大きな役割を演じて來たし、いまも猶ほ演じてゐる。時としてそれは進歩的の役割であることもあるが、多くの場合、反動的な役割であつて、その如何は、いかなる階級がその力を用ひ、いかなる目的に用ふるかに依存してゐる。しかしそのことから、暴力が『一切の』の問題を解決し、『一切の』障礙に打ち勝つことが出来ると信ずるのは、途方もないことだ。武器の力によつて、進歩的な歴史的傾向の發展を阻止することは可能だが、進歩的觀念の前進の道を永久に封鎖することは不可能だ。その闘争が、大きな原理のための闘争である場合、革命家の遂行し得る唯一の規則が、『どんなことがあつても、汝の義務を果せ。』であるのは、これが故なのだ。

一九二七年の終りに開かれる筈になつてゐた第十五回大會が近づくにしたがつて、ます／＼黨は歴史の十字路に到達したことを感じた。警戒心は黨内にみなぎつた。奇怪至極な恐怖手段にもかゝらず、反對派の聲を聞かうとする欲望は、黨内に目醒めた。これは非合法的手段によつてのみ、達成され得たものであつた。モスコウ及びレニングラードのさまざまの部分に、祕密の集會が催され、それには男女兩性の労働者や學生が参加し、彼等は、誰か反對派の代表者の意見を聞かうとして、二百人

乃至百人二百人とグループをなして參集した。一日の中に私は、二箇所、三箇所、時としては四箇所、のさういふ集會を訪問した。それらの集會はいつも誰か労働者のアパートメントで催された。二つの小さな部屋が、人々で一杯になつてをり、演説者は二つの部屋の間の戸のところ立つてゐるのが常であつた。時としては凡ての者が床に坐つてをることがあり、一層多くの場合には、その餘地がないので、討議は立つたままで行はざるを得なかつた。屢々、統制委員會の代表者達がさういふ集會に姿を現し、凡ての者に退去を要求することがあつた。彼等は討議に参加を求められた。もし彼等が何等か悶着を起した場合には、彼等は逐ひ出された。全部で約二萬人の人々が、モスコウ及びレニングラードのさうした會合に参加した。その數は増大しつゝあつた。反對派は、曩に内部から占領されてゐた高等工業學校の講座で、巨きな集會を開く準備を、周到にと／＼のへた。講堂には二千人の人々が蔭めき合ひ、入れない大群衆が街上に残つてゐた。その集會を禁止しようとの政府の企ては、無効であつた。カメネフと私とが、約二時間演説した。最後に、中央委員會は、労働者に向つてアツピールを發し、反對派の集會を暴力によつて粉碎せよと言つた。このアツピールは、ゲー・ペー・ウーの指導の下に、軍隊によつて注意深く準備された、反對派攻撃の單なる隱蔽に過ぎなかつたのだ。スターリンはこの争闘を流血によつて解決しようとしたのだ。我々は、大きな集會を一時中止するやうにとの合圖を與へた。しかしこれは、十一月七日の示威運動があつて後のことであつた。

一九二七年十月に、中央執行委員會がレニングラードでその開期を開いた。その機會を記念するために、當局者は大衆的示威運動を舉行した。しかし豫測しない事情のために、その示威運動は全く豫期しない轉向をやつたのだ。ジノヴィエフと私及び反對派の他の少數の人達は、示威運動の大きさと調子を見るために、自動車で市内を一巡してゐた。そのドライブの終り頃に、我々は冬宮へ近付いたが、そこには中央執行委員會の委員の爲に、演壇として數臺の自動車トラックが引出されてあつた。我々の自動車は警官隊の警衛線のちよつと手前で止まり、その先にはもはや通路はなかつた。この『袋小路』をどうして抜け出ようか、まだ心を定め得ない前に、指揮官が我々の車のところへ急いでやつて来て、全く無心に、我々を演壇まで護衛して行つてやらうと申出たのだ。そして我々が躊躇してゐる間に、二列の警官隊は、まだ誰も乗つてゐない最後の自動車トラックまで、我々のために道を開いた。我々が最後の演壇に在るといふことを大衆が知つた時、示威運動の性質は即座に變化した。人々は、そこからの挨拶に答へることすらしないで、無關心に第一のトラックの側を通り過ぎて、我々の演壇へいそいだ。間もなく我々のトラックのまはりに數千の人々の人垣がつくられた。労働者と兵隊は、立ちどまり、見上げ、挨拶を叫び、それから先へ動いて行かざるを得なかつた、といふのは、彼等の背後に在る人々がいら立つて彼等を壓迫したからだ。秩序を回復するために我々のトラックへ送られた一隊の警官は、それ自身一般の氣分にとらへられてしまつて、何等動作をしなかつた。國家機

關の信任された數百人の手先共が、群衆の眞直中へ派遣された。彼等は我々を口笛で彌次り倒さうとしたが、彼等の切離された口笛は、同情の絶叫によつて全く呑込まれてしまつた。このことが續けば續くほど、示威運動の公の指導者にとつては、形勢はますます堪へ難いものとなつた。結局、中央執行委員會の議長と、その最も秀でた委員の若干とが、そのまはりには廣い空虚な入江以外の何ものもない第一の演壇から下りて来て、いちばん端に在つて、ほとんど重要でない賓客のために設けられた我々の演壇へとよぢ上つた。しかしこの勇敢な方法をもつてしてすら、その場を救ふことは出来なかつた。それといふのは人々が名前を叫びつゞけてゐたからだ——しかもその名前は、その場の公の主人公等の名前ではなかつたのだ。

ジノヴィエフは忽ち樂天的になつて、この感情の表示から、重大な結果が生ずるものと期待した。私は、彼の衝動的評價に賛成しなかつた。レニングラードの労働者大衆は、反對派の指導者にたいするプラトニツクな同情の形で、自身の不満を示威した。しかし彼等はまだ、國家機關が我々を片付けるのを阻止することが出来なかつた。この點に關して、私は何等の幻想も抱かなかつた。他方、この示威運動は、支配的分派にたいして、反對派の破壊を急速に行ひ、それを完成された事實として大衆の前におくやうにすることの必要を、示唆しないではおかなかつた。

次の地標は、十月革命の第十回記念日に際しての、モスコウの示威運動であつた。示威運動の組織

者、祝賀論文の筆者、及び演説者は、大部分、十月の出来事の間バリケードの反対側にあつたか、又は、何が起つたかを見得るまで、たゞ家庭の中に避難所を求めてゐて、確乎たる勝利が得られた後になつて始めて、革命に結びついて来た人々であつた。私が、その諸論文を読み、その居候共が十月革命を裏切つたと云つて私を非難するラヂオ演説を聴くことは、苦々しいといふよりも、寧ろ愉快なことであつた。もし諸君が、歴史の過程の力學を理解し、如何に諸君の反対者が、彼の知らない手によつて左右されてゐる糸で引張られてゐるかを見た場合には、卑劣不信の最も嫌惡すべき行動も、諸君にたいしてその力を失つてしまふのだ。

反対派は、自身のスローガンを記したピラをもつて、一般行列に参加することに決定した。そのスローガンは決して黨に反対して構へられたものではなかつた。それは例へばかういふのだ。『我々の攻撃を右へ——クラーク、ネツプマン及び官僚へ向けよ。』……『レーニンの意志を遂行せよ。』……『日和見主義反対、分裂反対、レーニンの黨の統一賛成。』今日、これらのスローガンは、右翼にたいする鬭争において、スターリン分派の公然の信條となつてゐる。十一月七日に、反対派のピラは、その手から奪ひ取られ、すた／＼に引裂かれ、それを持つてゐるものは、特に組織された部隊によつて打擲された。公然の指導者等はレーングラード示威運動で教訓を得て、この度は彼等の準備は遙かに有効であつた。大衆は不安の兆候を示してゐた。彼等は、深く悩んだ心をもつて、示威運動に参加した

のだ。そして驚愕し、當惑した人々の上に、二つの活動的なグループ——反対派と機關と——がせり上つてゐた。『トロツキイ主義者』にたいする鬭争への志願者として、有名な非革命的要素、時としては單なるフラスシスト要素すらが、モスコウの街路において、いまや機關の援助にやつて來つゝあつたのだ。一警官は、警戒を與へるのだといふ口實で、公然と私の自動車を射撃した。誰かゞ彼の手を導いてゐたのだ。消防隊の酔つぱらつた一役人は、呪詛の聲を放ちながら、私の自動車の踏臺の上へ飛び上り、ガラスを破壊した。その光景を見ることの出来た人にとつては、一九二七年十一月七日のモスコウの街路における出来事は、明かに、テルミドールの豫習であつた。

同様な示威運動がレーングラードに起つた。そこへ赴いたジノヴァイエフとラデツクとは、特殊部隊のために抑留され、群衆の暴行から保護するといふ名目で、示威運動のある間、ビルデングの一つに監禁された。その日にジノヴァイエフは、モスコウにある我々に書いてよこした。『我々の手にしてゐる一切の報道は、この暴行が大いに我々の運動を利するであらうといふことを示してゐる。我々は、君に何が起つたか、それを知り度いと藻掻いてゐる。接觸（即ち、労働者との祕密の討議）は、こゝでは非常に甘く運んでゐる。我々に有利の方への變化は、大きい。こゝしばらくの間は、我々はこゝを去るとは提議しない。』これが、ジノヴァイエフの反対運動から出たエネルギーの、最後の閃光であつた。その翌日、もう彼はモスコウに在つて、降服の必要を主張してゐた。

十一月十六日に、ヨツフェは自殺した。彼の死は、生長しつゝある闘争への楔であつた。

ヨツフェは重い病人であつた。彼は、日本——そこで彼はソヴィエツト使節だつた——から、重態になつて歸つて來てゐたのだ。彼が外國へ派遣されるについて、さまざまの障碍が加へられたが、彼の日本滞在は餘りに短かゝつた。そしてそれは有利な結果を持つてゐたに拘らず、十分に報いられるところがなかつた。ヨツフェは利権委員會で私の代理となり、一切の重い日常の事務が、彼ののしかかつた。黨内の危機は彼をひどく悩ました。最も彼を懊惱させたものは、隠謀であつた。幾度か彼は、闘争の眞直中へ身を投げ入れようとした。彼の健康を氣づかつて、私は彼を引きとめた。ヨツフェは、永久革命の理論に關聯しての反對運動に、特に憤激してゐた。彼は、單に革命の果實を享樂してゐるに過ぎない人々が、爾餘の者よりも遙か以前に革命の行程と性質を豫見した人々にたいして卑劣な虐待を加へるのを、堪へることが出来なかつたのだ。ヨツフェは、永久革命の主題についてレニンと交談したこと——もし私に誤りがなければ、それは一九一九年のことだ——を私に語つた。レニンは彼に『さうだ、トロツキイは正しいことを自證した。』と言つた。ヨツフェはその會話を公表しようと欲してゐたが、私は、全力をつくして彼に思ひとまらせた。私は、雪崩を打つて彼に襲ひかかつてくるであらう虐待を、まさしく心に描くことが出来たのだ。ヨツフェは特に頑強で、物柔かい外貌の下に、不變の意志を隠してゐた。無智な進撃や政治的隠謀が新たに爆發する度毎に、彼は嫌

惡に滿ちた聲を顔をして、いつも私のところへやつて來て、『僕はあれを公表しなけりやならん。』と繰返した。私はいつも彼と議論をして云つた。さういふ『證人の證言』は、何ものも變化させはしないだらう。黨の新らしいゼネレーションを再教育し、遠大な目標を抱くことが必要だと。

ヨツフェは外國での療養を完了することが出来ず、彼の容體は日に日に惡化するばかりであつた。秋になつて、彼はどうしても仕事を停止せざるを得なくなり、その時彼は全く打ちのめされてゐた。彼の友達は再び彼を外國へ送らうといふ問題を持ち出したが、このたびは中央委員會が露骨にそれを拒絶した。スターリン主義者は、いまや、反對派を全く別箇の方向へ送らうと準備してゐたのだ。私が中央委員會から、ついで黨から除名されたことは、他の何よりもひどく、ヨツフェを驚愕させた。彼の個人的及び政治的激怒に、彼自身の肉體上の不治といふ悲しい現實が加はつた。ヨツフェは、革命は危機に臨んでゐる、と誤りなく感じた。だが、もはや彼には戦ふ力がなかつた。闘争から遠ざかつた生活は、彼にとつては、何ものをも意味しなかつた。そこで彼は、彼の最後の結末をつけたのだ。その時、私は既にクレムリンから私の友達のピロポドウの家に移つてゐた。彼は、ゲー・ペー・ウーの手先共によつて、何處へ行くにも後を尾けられてゐたが、形式上ではまだ内務人民委員であつた。ピロポドウは、その時故郷のウラルへ赴いてゐて、其處で、機關にたいする闘争において、労働者に接近しようと努力してゐた。私は、容體を聞かうと思つて、ヨツフェのアパートメントへ電話

をかけた。彼が自身で答へた——彼の病床のそばに電話があつたのだ。彼の聲の調子に——あとになつて始めてそれが分つたのだが——何等か不思議な、他を驚かすものがあつた。彼は私に来て欲しいと言つた。何かの突然の用事で、私はどうしてもすぐ行く事が出来なかつた。當時の嵐のやうな日々には、重大な問題について私と協議するために、同志達がつゞけかけてピロポロドウの家を訪問して來たのだ。一二時間経つて聞き慣れない聲が電話で私に知らせた。『アドルフ・アブラモウイチが自殺しました。ベッドの側の卓子に貴方に宛てた包があります。』ピロポロドウの家には、いつも數人の軍人出の反對派があつて、私が市へ出て運動するとき私に隨つて出る支度をしてゐた。我々はヨツフェのところへ急いだ。我々がベルを鳴らし、ノックしたのに答へて、扉の背後から誰か、我々の名前を訊ね、それから少しばかりおくれて、扉を開いた。何等か不思議なことが内部に行はれてゐた。我々は部屋へ入ると、私は、血によごれた枕をした、アドルフ・アブラモウイチの靜かな、無限にも、やさしい顔を見た。ゲー・ペー・ウーの一員のBが、ヨツフェの机にかけてゐた。包はベッドの側の卓子から無くなつてゐた。私は、すぐそれを返すやうにと要求した。Bは口ごもり乍ら手紙などはなかつたと言つた。彼の態度と聲調から考へて、嘘をついてゐることは疑ひなかつた。數分間後には、市のあらゆる部分から來た友達が、その部屋へ流れ込み始めた。外務人民委員省及び黨施設の公式の代表者等は、反對派の群衆のまんなかで度を失つてゐた。その夜の間、數千の人々がこの家

を訪問した。書簡が盗まれたといふニュースは全市にひろがつた。外國の新聞記者は電報を發してをり、この上、書簡を隠匿することがどうしても出来なくなつた。結局、その複製寫眞がラコウスキイに手交された。私に宛て、ヨツフェが書き、私の名を記した封筒に封緘された手紙が、何故にラコウスキイへ、それも原本でなく複製寫眞で與へられなければならなかつたのか、それは私が敢て説明しようと思つてゐることも出来ない事柄だ。ヨツフェの手紙は、結局、彼を反映したものだつたが、それも死の半時間前の彼だ。ヨツフェは彼にたいする私の態度を知つてをり、深い精神的信頼によつて私に結ばれてゐた。彼は、私が淺薄だと考へ、または公表に適しないと考へた箇所は、どんな箇所でもこれを抹殺する権利を私に與へたのだ。狡猾な敵共は、全世界の眼からその手紙を隠匿することに失敗したので、こんどは、一般に見せるために書かれたものでない正にその部分を、彼等自身の目的に利用しようと思つたのだ。

ヨツフェは、そのために彼の生涯をさゝげたと同じ目的のために、彼の死をさゝげようとした。半時間後に自身の額に向つて引金を引いたその同じ手をもつて、彼は、證人の最後の證言と、一友人の最後の忠告とを、書いたのだ。彼の最後の手紙で、直接に私に宛て、述べられたものは、かうだ。

『親愛なレウ・タヴイドウイチ、貴方と私とは、數十年の共同の活動によつて、且つ、私は敢てこれを期待しますが、個人的の友情によつて、お互ひに結ばれてゐます。この事は、いまお別れするに

當つて、私から見ても貴方が誤つてゐると思はれる點を貴方に述べる權利を私に與へます。私は今まで嘗て、貴方の指摘した道の正しさを疑つたことはありません。貴方の知られる通り、「永久革命」の日から、過去二十年以上、私は貴方と一緒に仕事をして來ました。しかし私は、いつもかう信じてゐます。貴方には、レーニンの不屈不撓の意志と、彼の何もをもつてしても降服しない心と、將來大多數を制し、凡ての人が將來彼の道の正しさを認めることを豫見して、正しいと思つた道にたゞ獨りになつても踏みとどまる彼の用意とが、缺けてをります。政治的には、一九〇五年から始めて、貴方はいつも正しくありました。そして私が貴方に繰返し語つたやうに、私は、レーニンが一九〇五年においてすら正しかつたのは貴下であつて、彼ではないと承認したのを、私自身の耳で聞いてゐます。人は死に際して嘘は言ひません、そしていま私は、再びこれを貴下に向つて繰返します。……しかし貴方はこれまで屢々、過大評價した同意又は妥協のために、貴方の正しさを抛棄して來ました。これが誤りです。私は繰返して言ひます。政治的に貴方はいつも正しくありました、そして現在は、これらで、よりも更に正しいのです。いつの日にか、黨はそれを理解するでせうし、歴史がそれを承認しないといふことはないでせう。ですから、たとひ何者かといま貴方を去つたとしても、又は、我々みんなの欲してゐるほど多數のものが、我々みんなの欲してゐるほど速かに、貴方のところへやつて來ないとしても、勇氣を失つてはなりません。貴方は正しい、しかし、貴方の正しさが勝利を得る保證は、

極端に何ものをもつてしても降伏しない心と、峻嚴なる眞直性と、一切の妥協の絶對的排斥以外の何ものゝ中にも存しないのです。まさにこのものゝうちに、レーニンの勝利の祕密があるのです。これまで幾度か、私は、このことを貴方に言ひ度いと思ひました、が、いま始めて、最後のお別れの言葉として、私はそれを云つたのです。』

ヨツフェの葬式は、普通の労働日に、モスコウの労働者がそれに參列するのを阻止するやうな時間に執行された。それにも拘らず、一萬人を下らない人々がそれに參列し、その葬式は堂々たる反對派の示威運動に轉化した。一方スターリン分派は、大會のための準備をととのへ、分裂を一箇の完成された事實としてその前におかうと急いでゐた。大會出席の代議員を選ぶ地方協議會への謂ゆる選舉は、伴りの『討議』の公開の席上行はれ、その間に軍隊的に組織された妨害者の集團は、お定りのファシスト的な遣り方で、集會を破壊したのだ。第十五回大會の準備以上に不名譽なものを想像するさへ困難だ。ジノヴィエフと彼の仲間とは、十月革命の第十回記念日にモスコウ及びレニングラードの街路で始まつた自然的群衆にたいして、大會が政治的彈壓を加へるであらうといふことを察知するのに、何等困難はしなかつた。ジノヴィエフと彼の友達の唯一の關心事は、まだその時間のある間に降伏することだつたのだ。スターリン官僚がその眞の敵と思つてゐるのは、第二位の反對派である彼等ではなくて、私と結びつけられた反對派の主要グループであることを、我々は理解し損じはしなかつた。